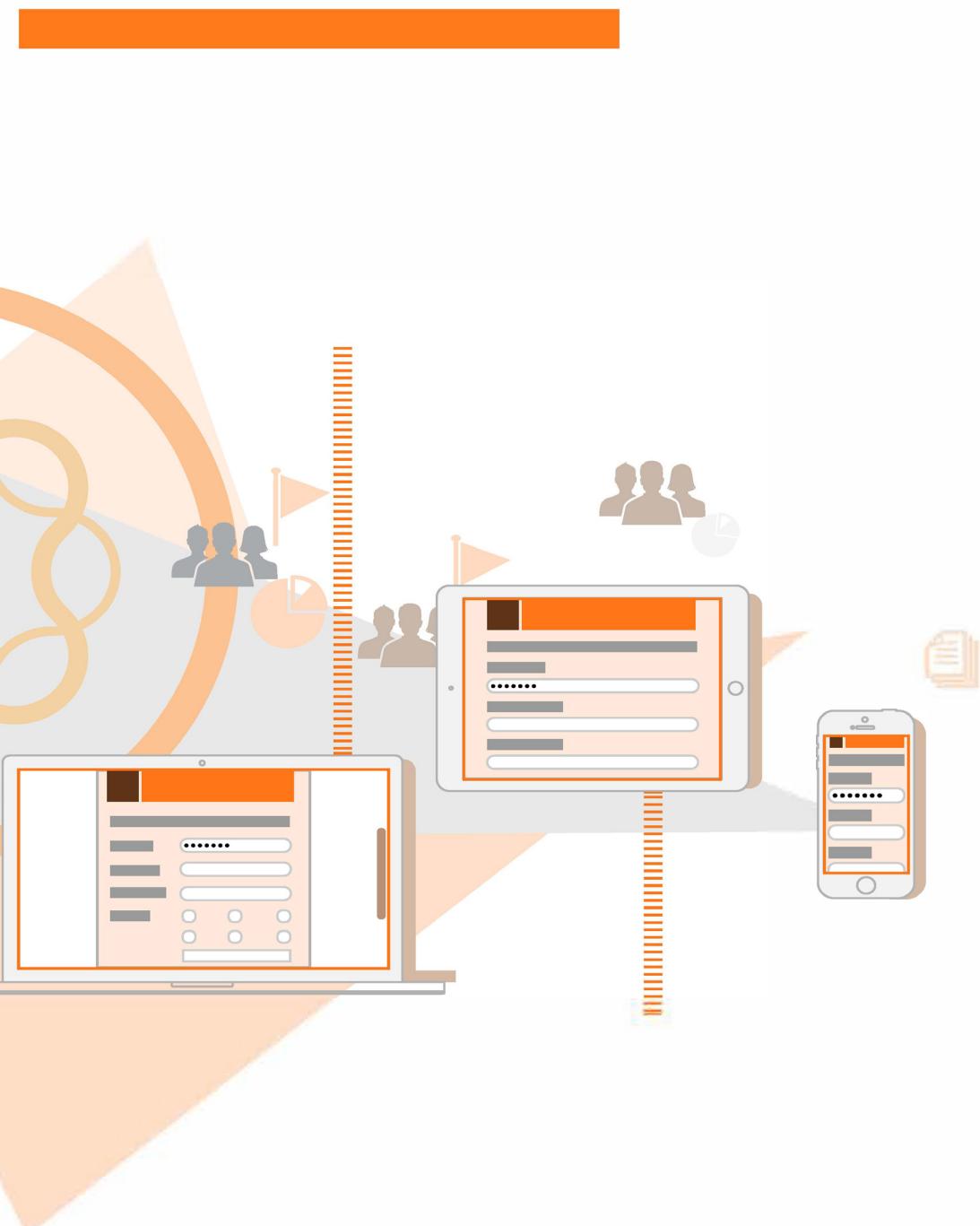


# JEE 上の Adobe Experience Manager Forms のインストールおよびデプロイ (WebLogic 版)



**AEM 6.3 Forms**

## 法的通知

法律上の注意については、<https://helpx.adobe.com/jp/legal/legal-notices.html> を参照してください。

---

# 目次

<b>章1</b>	<b>このドキュメントの内容</b>	<b>1</b>
このドキュメントの対象読者	1	
このガイドで使用する表記	1	
追加情報	2	
<b>章2</b>	<b>インストール、設定およびデプロイメントプロセスの概要</b>	<b>3</b>
インストール、設定およびデプロイメントの概要	3	
設定およびデプロイのためのタスクの選択	4	
自動設定と手動設定の比較	4	
JEE上のAEM Formsのインストール、構成、およびデプロイメントリスト	5	
自動インストールおよびデプロイメントリスト	5	
手動インストールおよびデプロイメントリスト	6	
<b>章3</b>	<b>AEM Formsモジュールのインストール</b>	<b>7</b>
事前準備	7	
インストーラーの確認	7	
ダウンロードしたファイルの確認	7	
ダウンロードしたアーカイブファイルの展開	7	
インストールに関する考慮事項	8	
インストールパス	8	
一時ディレクトリ	8	
Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへのインストール	8	
インストールに関する一般的な注意	9	
JEE上のAEM Formsのインストール	9	
ログファイルの表示	10	
次の手順	10	

---

<b>章4 AEM Formsをデプロイするための設定</b> .....	<b>11</b>
JEE上のAEM Formsの設定とデプロイの際の考慮事項 .....	11
一般的な考慮事項 .....	11
WebLogic アプリケーションサーバーの考慮事項 .....	11
JEE 上の AEM Forms Server クラスター設定時の考慮事項 .....	12
JEE上のAEM Formsの事前設定タスク .....	12
JEE上のAEM Formsの設定とデプロイ .....	13
Adobe Experience Manager Forms を設定 .....	13
CRXの設定 .....	14
(リモートホストのみ) CRX 設定サマリー .....	14
PDF Generator 用の Acrobat の設定 .....	15
設定の概要 .....	15
アプリケーションサーバーおよびデータベースの設定 .....	15
インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイルの選択 .....	17
JEE 上の AEM Forms EAR のデプロイ .....	17
Adobe Experience Manager Forms データベースの初期化 .....	17
Central Migration Bridge Service のデプロイ .....	18
Adobe Experience Manager Forms コンポーネントのデプロイ .....	18
Adobe Experience Manager Forms コンポーネントの設定 .....	18
Connector for EMC®Documentum® の設定 .....	18
Connector for IBM®Content Manager の設定 .....	19
Connector for IBM®Filenet の設定 .....	19
Connector for Microsoft®SharePoint® の設定 .....	20
ネイティブファイル変換のための Adobe Experience Manager Forms Server の設定 .....	20
PDF Generator の System Readiness Test .....	21
Acrobat Reader DC Extensions の設定 .....	21
サマリー、および次の手順 .....	21
<b>章5 デプロイメント後のタスク</b> .....	<b>22</b>
一般的なタスク .....	22
シリアル化エージェントの設定 .....	22
正しい日付、時刻およびタイムゾーンの設定 .....	22
クライアント SDK の URL とポート番号の設定 .....	22
委任 RSA ライブラリと委任 BouncyCastle ライブラリの起動 .....	23
アプリケーションサーバーの再起動 .....	23
デプロイメントの確認 .....	23
Administration Consoleへのアクセス .....	23
OSGi Management Consoleへのアクセス .....	24
ログファイルの表示 .....	24

---

---

作成者インスタンスと発行インスタンスの設定	25
作成者インスタンスの設定	25
発行インスタンスの設定	25
作成者インスタンスと発行インスタンス間の通信	26
IPv6実装の設定	27
Adobe Reader用日本語フォントのインストール	27
Workbenchへのアップグレード	27
CSIV2 Inbound Transportの設定	28
JBoss用JMSの有効化	28
アダプティブフォームおよびCorrespondence Managementアセットの移行	29
分析とレポートの再設定	29
Content Repository Connectorサービスの設定	29
作成者インスタンスと発行インスタンスの設定	30
作成者インスタンスの設定	30
発行インスタンスの設定	30
発行ノードの設定	30
作成者インスタンスと発行インスタンス間の通信	31
発行インスタンスURLの定義	31
ActivationManagerImplの発行インスタンスURLの定義	31
逆複製キューの設定	32
作成者インスタンスURLの定義	32
IPv6実装の設定	32
Adobe Reader用日本語フォントのインストール	32
PDF Generatorの設定	33
環境変数	33
HTTPプロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定	33
Adobe PDFプリンターをデフォルトのプリンターとして設定	34
デフォルトプリンターの設定	34
Acrobat Professionalの設定 (Windowsベースのコンピューターのみ)	34
PDF Generatorで使用するためのAcrobatの設定	34
Acrobatのインストールの検証	35
Acrobatの信頼できるディレクトリリストへの一時ディレクトリの追加	35
PDF Generatorへのフォントの追加	35
JEE上のAEM Forms以外のアプリケーション	36
Windows専用アプリケーションへの新しいフォントの追加	36
その他のアプリケーションへの新しいフォントの追加	37
OpenOfficeスイートへの新しいフォントの追加	37
HTMLからPDFへの変換の設定	37
HTMLからPDFへの変換の設定	37
HTMLからPDFへの変換におけるUnicodeフォントのサポート	37

---

---

Network Printer Clientのインストール . . . . .	39
PDF Generatorネットワークプリンタークライアントのインストール . . . . .	39
Windowsでネイティブのプリンターの追加ウィザードを使用したPDFG	
ネットワークプリンターの設定 . . . . .	40
プロキシサーバーのポート転送を使用したPDF Generator Network Printer Clientの	
インストールと設定 . . . . .	40
ファイル制限機能の設定の変更 . . . . .	41
監視フォルダーのパフォーマンスパラメーター . . . . .	41
PDF Generatorのパフォーマンスパラメーターの設定 . . . . .	41
保護フィールドを含むMicrosoft Word文書に対するPDF変換の有効化 . . . . .	41
Document Securityに対するSSLの設定 . . . . .	42
FIPSモードの有効化 . . . . .	42
FIPSモードのオンまたはオフ . . . . .	42
Connector for EMC Documentumの設定 . . . . .	42
Connector for EMC Documentumの設定 . . . . .	43
DocumentumリポジトリでのXDP MIME形式の作成 . . . . .	46
Documentum管理者アカウントを使用したDocumentum Content Serverでの	
XDP形式の作成 . . . . .	46
Documentum管理者アカウントを使用するためのConnector for EMC Documentum	
サービスの設定 . . . . .	47
複数の接続ブローカーのサポートの追加 . . . . .	47
DocumentumリポジトリでのXDP MIME形式の作成 . . . . .	48
Documentum管理者アカウントを使用したDocumentum Content Serverでの	
XDP形式の作成 . . . . .	48
Documentum管理者アカウントを使用するためのConnector for EMC Documentum	
サービスの設定 . . . . .	48
Connector for IBM Content Managerの設定 . . . . .	49
Connector for IBM Content Managerの設定 . . . . .	49
「Use Credentials from process context」ログインモードを使用した接続 . . . . .	51
Connector for IBM FileNetの設定 . . . . .	53
UNIXおよびLinux用の追加のライブラリのインストール . . . . .	58
Content Repository Connectorサービスの設定 . . . . .	58
<b>章6 高度な実稼働環境の設定 . . . . .</b>	<b>59</b>
OutputおよびFormsのプールサイズの設定 . . . . .	59
既存のPoolMax値の変更 . . . . .	59
PDF Generator . . . . .	60
EJBプールサイズの設定 . . . . .	60
PS2PDFおよびImage2PDFのプールサイズの設定 . . . . .	60

---

WindowsでのCIFSの有効化	61
NetBIOS over TCP/IP の有効化	61
他のIPアドレスの追加	61
ファイルとプリンターの共有の無効化 (Windows Server 2008)	61
ファイルとプリンターの共有の無効化 (Windows Server 2012のみ)	61
<b>章7 付録-コマンドラインインターフェイスを使用したインストール</b>	<b>62</b>
概要	62
JEE上のAEM Formsのインストール	62
エラーログ	63
<b>章8 付録- Configuration Managerコマンドラインインターフェイス</b>	<b>64</b>
操作の順序	64
コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル	65
一般的な設定プロパティ	66
共通のプロパティ	66
JEE 上の AEM Forms プロパティの設定	68
アプリケーションサーバーの設定および検証のプロパティ	69
WebLogic の設定および検証のプロパティ	69
アプリケーションサーバーのプロパティ	69
JEE 上の AEM Forms プロパティのデプロイ	71
JEE 上の AEM Forms プロパティの初期化	71
JEE 上の AEM Forms コンポーネントプロパティのデプロイ	71
PDF Generator 用の管理者ユーザーの追加	72
Connector for IBM Content Manager の設定	72
Connector for IBM FileNet の設定	73
Connector for EMC Documentum の設定	74
Connector for Microsoft SharePoint の設定	75
コマンドラインインターフェイスの使用	76
JEE 上の AEM Forms の設定 CLI の使用	76
CRX CLI の使用の設定	76
アプリケーションサーバートポロジの検証 CLI の使用	76
データベース接続の検証 CLI の使用	76
アプリケーションサーバーの設定 CLI の使用	77
アプリケーションサーバー設定の検証 CLI の使用	77
(WebSphere および Weblogic のみ) JEE 上の AEM Forms デプロイ CLI の使用	77
JEE 上の AEM Forms 初期化 CLI の使用	77
JEE 上の AEM Forms Server の検証 CLI の使用	77

---

JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイ CLI の使用 . . . . .	78
JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイメントの検証 CLI の使用 . . . . .	78
PDF Generator のシステム準備設定の確認 . . . . .	78
PDF Generator の管理者ユーザーの追加 . . . . .	78
Connector for IBM Content Manager の設定 . . . . .	78
Connector for IBM FileNet の設定 . . . . .	79
Connector for EMC Documentum の設定 . . . . .	79
Connector for Microsoft SharePoint の設定 . . . . .	80
使用例 . . . . .	80
Configuration Manager CLI のログ . . . . .	80
次の手順 . . . . .	80
<b>章9 付録- WebLogic Serverの手動設定 . . . . .</b>	<b>81</b>
サーブレットコンテナ用の認証資格情報の設定 . . . . .	81
サーブレットコンテナ認証を変更するには . . . . .	81
クラスパスおよびサーバー起動引数の変更 . . . . .	82
管理対象サーバーのクラスパスの変更 . . . . .	82
WebLogic Server スタックスレッドタイムアウトの増加 . . . . .	83
Solaris の管理対象サーバーの開始引数の設定 . . . . .	84
JVM引数の設定 . . . . .	84
管理対象サーバーで JVM でのメモリ割り当ての増加 . . . . .	84
データベース接続の設定 . . . . .	85
Oracle データベース接続の設定 . . . . .	85
Oracle 用の新しいデータソースの作成 . . . . .	85
Oracle 用の新しい AEM_DS データソースの作成 . . . . .	86
接続プールの設定 . . . . .	87
Oracle 用の新しいデータソースの作成 . . . . .	88
接続プールの設定 . . . . .	89
WebLogic 10g 上の Rights Management に使用する Oracle 用の新しいデータソースの作成 . . . . .	89
接続プールの設定 . . . . .	90
MySQL データベース接続の設定 . . . . .	90
MySQL 用の新しいデータソースの作成 . . . . .	90
接続プールの設定 . . . . .	91
MySQL 用の新しい AEM_DS データソースの作成 . . . . .	91
接続プールの設定 . . . . .	92
Rights Management に使用する MySQL 用の新しいデータソースの作成 . . . . .	92
接続プールの設定 . . . . .	93

---

DB2 データベース接続の設定 . . . . .	94
DB2用の新しいデータソースの作成 . . . . .	94
接続プールの設定 . . . . .	95
DB2用の新しいAEM_DSデータソースの作成 . . . . .	95
接続プールの設定 . . . . .	96
Rights Managementに使用するDB2用の新しいデータソースの作成 . . . . .	96
接続プールの設定 . . . . .	97
SQL Server データベース接続の設定 . . . . .	98
SQL Server用の新しいデータソースの作成 . . . . .	98
接続プールの設定 . . . . .	99
SQL Server用の新しいAEM_DSデータソースの作成 . . . . .	99
接続プールの設定 . . . . .	100
WebLogic 10g 上の Rights Managementに使用するSQL Server用の新しいデータソースの作成 . . . . .	100
接続プールの設定 . . . . .	101
Windows ログインのJEE上のAEM Formsデータベースユーザーへのマップ . . . . .	102
Windows 上での統合セキュリティの設定 . . . . .	102
データソースのセキュリティ保護 . . . . .	103
次の手順 . . . . .	103
<b>章10 WebLogicへの手動デプロイ . . . . .</b>	<b>104</b>
JEE上のAEM Formsモジュールのデプロイについて . . . . .	104
デプロイ可能なコンポーネントの概要 . . . . .	104
インストール検証サンプル (IVS) EARファイルの選択 . . . . .	105
WebLogic Serverへのデプロイ . . . . .	105
EARファイルをデプロイするには . . . . .	105
WebLogic Serverの再起動 . . . . .	106
WebLogic管理対象サーバーの停止 . . . . .	106
WebLogic管理サーバーの停止 . . . . .	106
WebLogic管理サーバーの起動 . . . . .	106
WebLogic管理対象サーバーの起動 . . . . .	107
次の手順 . . . . .	107
AEM Formsのデプロイメントを設定するためのConfiguration Managerの起動 . . . . .	107

---

<b>章11 付録- SharePointサーバーでのConnector for Microsoft SharePointの設定</b> . . . . .	<b>108</b>
インストールと設定 . . . . .	108
SharePointサーバーの必要システム構成 . . . . .	108
インストールに関する考慮事項 . . . . .	108
SharePointサーバー2007でのインストールと設定 . . . . .	109
Web パーツのインストーラーの抽出 . . . . .	109
バッチファイルの編集 . . . . .	109
バッチファイルの実行 . . . . .	110
サービスモデル設定の IIS Web アプリケーションのフォルダーへのコピー . . . . .	110
SharePoint Server 2010およびSharePoint server 2013でのインストールと設定 . . . . .	111
環境変数の編集 . . . . .	111
Web パーツのインストーラーの抽出 . . . . .	111
Connectorのインストールとアクティベート . . . . .	111
機能の有効化または無効化 . . . . .	112
Microsoft SharePoint Server 2010 のコネクタおよび Microsoft SharePoint Server 2013 の アンインストール . . . . .	114

# 1. このドキュメントの内容

JEE 上の AEM Forms は、ビジネスプロセスの自動化と効率化を支援するエンタープライズサーバープラットフォームです。JEE 上の AEM Forms は次のコンポーネントで構成されます。

- サーバー機能とランタイム環境を提供する J2EE ベースの Foundation
- JEE 上の AEM Forms を設計、開発、テストするためのツール
- JEE サーバー上の AEM Forms にデプロイされ、機能サービスを提供するモジュールとサービス

JEE 上の AEM Forms の機能について詳しくは、「[AEM Forms の概要](#)」を参照してください。

## 1.1. このドキュメントの対象読者

このドキュメントは、JEE 上の AEM Forms のインストール、アップグレード、設定、管理またはデプロイを担当する管理者や開発者を対象にしています。読者は J2EE アプリケーションサーバー、オペレーティングシステム、データベースサーバーおよび Web 環境に関する十分な知識を持っている必要があります。

## 1.2. このガイドで使用する表記

JEE 上の AEM Forms のインストールおよび設定に関するドキュメントでは、共通のファイルパスについて次の命名規則を使用します。

名前	デフォルト値	説明
[aem-forms root]	Windows : C:\Adobe\Adobe_Experience_Manager_Forms Linux および Solaris : /opt/adobe/Adobe_Experience_Manager_Forms	JEE モジュール上の AEM Forms すべてに使用されているインストールディレクトリ。インストールディレクトリには、Configuration Manager 用のサブディレクトリが含まれます。このディレクトリには、SDK およびサードパーティ製品に関連するディレクトリも含まれます。
[appserver root]	Windows 上の WebLogic Server : C:\Oracle\Middleware\wlserver_<version>\ WebLogic Server (Linux および Solaris) : /opt/Oracle/Middleware/wlserver_<バージョン>/	JEE モジュール上の AEM Forms すべてに使用されているアプリケーションサーバーディレクトリ。
[server name]	Server1 (WebLogic Server の場合)	
WL_HOME	WebLogic Server 10g (Windows) : C:\bea\ WebLogic Server 10g (Linux および Solaris) : /opt/bea/ WebLogic Server (Windows) : C:\Oracle\Middleware\ WebLogic Server (Linux および Solaris) : /opt/Oracle/Middleware/	WL_HOME 環境変数に指定されている、WebLogic Server のインストールディレクトリ。

名前	デフォルト値	説明
[appserverdomain]	WebLogic 12c Server (Windows) : C:\bea\user_projects\domains\base_domain\ WebLogic Server (Windows) : C:\Oracle\Middleware\user_projects\domains\base_domain\ WebLogic 12c Server (Linux および UNIX) : /opt/bea/user_projects/domains/base_domain/ WebLogic Server (Linux および UNIX) : /opt/Oracle/Middleware/user_projects/domains/base_domain/	
[dbserver root]	データベースタイプとインストール時の設定によって異なります。	JEE上のAEM Formsのデータベースサーバーがインストールされている場所。
[AEM_temp_dir]	Windowsの場合 : C:\Adobe\Adobe_Experience_Manager_Forms\tmp Linuxの場合 : /opt/adobe/Adobe_Experience_Manager_Forms/tmp	JEEサーバー上のAEM Formsの一時ディレクトリ。
[CRX_home]	Windowsの場合 : C:\Adobe\Adobe_Experience_Manager_Forms\crx-repository Linuxの場合 : /opt/adobe/Adobe_Experience_Manager_Forms/crx-repository	CRXリポジトリをインストールするために使用するディレクトリ。

このガイドに記述されているディレクトリの場所に関するほとんどの情報は、すべてのプラットフォームに当てはまります (Windows以外のオペレーティングシステムでは、すべてのファイル名とパスにおいて大文字と小文字が区別されます)。プラットフォーム固有の情報は、必要に応じて特記します。

## 1.3. 追加情報

次の表では、JEE上のAEM Formsについてより詳しく知るために役立つリソースを紹介します。

情報	参照先
JEE上のAEM Formsとモジュール	<a href="#">AEM Formsの概要</a>
JEE上のAEM Formsのインストールの準備	<a href="#">JEE上のAEM Formsのインストールの準備 (シングルサーバー)</a>
管理タスクの実行	<a href="#">管理ヘルプ</a>
JEE上のAEM Forms用のすべてのドキュメント	<a href="#">JEE上のAEM Forms ドキュメント</a>
現在のバージョンに関するパッチアップデート、テクニカルノート、および追加情報	<a href="#">アドビエンタープライズサポート</a>

## 2. インストール、設定およびデプロイメントプロセスの概要

### 2.1. インストール、設定およびデプロイメントの概要

JEE 上の AEM Forms のインストール、設定、デプロイには次が含まれています。

- **インストール**：インストールプログラムの実行による JEE 上の AEM Forms のインストール。JEE 上の AEM Forms をインストールすると、必要なすべてのファイルが、使用するコンピューター上の 1 つのインストールディレクトリ構造内に配置されます。デフォルトのインストールディレクトリは C:\Adobe\Adobe\_Experience\_Manager\_Forms (Windows) または /opt/adobe/Adobe\_Experience\_Manager\_Forms (Windows 以外) ですが、これ以外のディレクトリにファイルをインストールすることもできます。
- **構成**：JEE 上の AEM Forms を構成すると、JEE 上の AEM Forms の動作方法を決定するさまざまな設定が変更されます。製品のアセンブリでは、設定の指示に従って、すべてのインストール済みコンポーネントがデプロイ可能な EAR および JAR ファイルに配置されます。コンポーネントに対してデプロイメントのための設定とアセンブリを行うには、Configuration Manager を実行します。JEE 上の AEM Forms モジュールを複数同時に設定し、アセンブリすることができます。
- **デプロイ**：製品のデプロイでは、アセンブリされた複数の EAR ファイルといくつかの補助ファイルを、JEE 上の AEM Forms を実行する予定のアプリケーションサーバーにデプロイします。複数のモジュールを設定した場合は、デプロイ可能なコンポーネントがデプロイ可能な EAR ファイル内でパッケージングされています。コンポーネントおよび JEE 上の AEM Forms アーカイブファイルは、JAR ファイルとしてパッケージングされています。

注：JEE 上の AEM Forms アーカイブファイルは、ファイル拡張子 .lca を使用します。

- **データベースの初期化**：JEE 上の AEM Forms で使用されるデータベースを初期化すると、User Management および他のコンポーネントで使用するためのテーブルが作成されます。データベースに接続するモジュールをデプロイする場合は、デプロイメントプロセスの完了後にデータベースを初期化する必要があります。

JEE 上の AEM Forms のインストールと設定を開始する前に、該当する準備ガイドで説明されているように環境の準備が整っていることを確認します。

## 2.2. 設定およびデプロイのためのタスクの選択

JEE上のAEM Formsのインストールが完了したら、Configuration Managerを実行して次を行うことができます。

- アプリケーションサーバーまたはアプリケーションサーバーのクラスターにデプロイするために EAR ファイルでモジュールを設定
- JEE 上の AEM Forms をサポートするようにアプリケーションサーバーまたはアプリケーションサーバーのクラスターのプロパティを設定
- JDBC モジュールを JEE 上の AEM Forms EAR にパッケージ (データソースをセキュリティで保護)
- アプリケーションサーバーまたはクラスターの設定を検証
- JEE 上の AEM Forms EAR ファイルのデプロイ
- JEE 上の AEM Forms データベースの初期化
- JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイ
- JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイメントの検証
- JEE 上の AEM Forms コンポーネントの設定

## 2.3. 自動設定と手動設定の比較

アプリケーションサーバーまたはクラスターの設定およびデータベースに対するデータソースの設定は Configuration Manager を使用して実行できますが、これらの手順は、次の理由により手動で実行した方が望ましい場合もあります。

- アプリケーションサーバーまたはクラスターで他のアプリケーションを実行しており、設定が競合する可能性がある場合
- 設定管理に関する会社のセキュリティ手順により、より細かい制御が求められている場合
- 自動設定が使用できないデプロイメントの場合

手動で設定する場合は、次のタスクを実行します。

- Configuration Manager を使用して、JEE 上の AEM Forms コンポーネントを設定し、必要なフォント、一時ディレクトリおよび GDS ディレクトリを設定する
- アプリケーションサーバーの設定、データソースの設定および JEE 上の AEM Forms EAR ファイルのデプロイを手動で行う
- Configuration Manager を実行してデータベースを初期化する
- Configuration Manager を実行して、JEE 上の AEM Forms をデプロイし、JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイメントを検証します。
- JEE 上の AEM Forms コンポーネントを設定します。

## 2.4. JEE 上の AEM Forms のインストール、構成、およびデプロイメントリスト

この節では、インストールおよび設定プロセスを進めていく際に使用できるリストを用意しました。インストールと設定のためのリストには、自動オプション用のものと手動オプション用のものがあります。

- **自動オプション**：Configuration Manager を使用して、アプリケーションサーバーの設定、JEE 上の AEM Forms EAR ファイルの設定とデプロイ、データベースの初期化、およびサーバーへのモジュールのデプロイを行う方法です。自動オプションは、JEE 上の AEM Forms のインストール、設定およびデプロイメントのための入力処理を少なくしたい場合に使用します。
- **手動オプション**：Configuration Manager を、JEE 上の AEM Forms EAR ファイルの設定、データベースの初期化、サーバーへのモジュールのデプロイだけに使用する方法です。アプリケーションサーバーの設定、データベースへの接続および JEE 上の AEM Forms EAR ファイルのサーバーへのデプロイは、このマニュアルで後述する手順に従って、管理者が手動で実行します。手動オプションは、JEE 上の AEM Forms のインストール、設定およびデプロイメントのために厳密な入力を行う場合に使用します。例えば、このオプションは、ロックダウンされたサーバー環境で使用できます。

### 2.4.1. 自動インストールおよびデプロイメントリスト

次のリストに、自動オプションを使用して JEE 上の AEM Forms モジュールをインストールするために必要な手順を示します。インストールを実行する前に、アプリケーションサーバーまたはクラスターをインストールしておく必要があります。

- 必要なソフトウェアがインストール先の環境にあらかじめインストールされていることを確認します該当する準備ガイドを [http://www.adobe.com/go/learn\\_aemforms\\_documentation\\_63\\_jp](http://www.adobe.com/go/learn_aemforms_documentation_63_jp) から参照してください。
- インストールプログラムを実行します（「JEE 上の AEM Forms のインストール」を参照してください。）
- Configuration Manager を実行し、タスク選択画面のすべてのタスクを選択します。JEE 上の AEM Forms EAR ファイルの設定、アプリケーションサーバー設定の構成、アプリケーションサーバーへの EAR ファイルおよびその他のコンポーネントのデプロイ、JEE 上の AEM Forms データベースの初期化およびデプロイメントの検証が行われます。（このガイドの「JEE 上の AEM Forms をデプロイするための設定」の章を参照してください。）
- 管理コンソールおよび User Management にアクセスします（「Administration Console へのアクセス」を参照してください。）
- （オプション） LDAP アクセスを設定します（「LDAP アクセスの設定」を参照してください。）

#### 2.4.2. 手動インストールおよびデプロイメントリスト

- 必要なソフトウェアがインストール先の環境にあらかじめインストールおよび設定されていることを確認します。
- インストール先の環境でアプリケーションサーバーが作成および設定されていることを確認します。
- インストールプログラムを実行します。
- Configuration Manager を実行し、「JEE 上の AEM Forms EAR タスクの設定」を選択します。このタスクでは、JEE 上の AEM forms の設定を行います。
- アプリケーションサーバー設定を指定します。
- EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイします。これは、手動で行うか、Configuration Manager を使用して行うことができます。

注：(クラスターのみ) クラスターのすべてのノードで、アプリケーションサーバーに EAR ファイルをデプロイしていることを確認します。EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイするときは、デプロイメント範囲がクラスターであることを確認してください。

- Configuration Manager を実行して、JEE 上の AEM Forms を初期化し、JEE 上の AEM Forms コンポーネントファイルをデプロイします。
- Administration Console および User Management にアクセスします。
- (オプション) LDAP アクセスを設定します。

## 3. AEM Forms モジュールのインストール

### 3.1. 事前準備

#### 3.1.1. インストーラーの確認

インストールプロセスを開始する前に、インストーラーファイルについて、次のベストプラクティスを確認してください。

##### ダウンロードしたファイルの確認

アドビの Web サイトからインストーラーをダウンロードした場合は、MD5 チェックサムを使用してインストーラーファイルの整合性を検証してください。次のいずれかを実行し、ダウンロードファイルの MD5 チェックサムを計算して、アドビライセンス Web サイトで公開されているチェックサムと比較します。

- **Linux** : `md5sum` コマンドを実行します。
- **Solaris** : `digest` コマンドを実行します。
- **Windows** : `WinMD5` などのツールを実行します。
- **AIX** : `md5sum` コマンドを実行します。

##### ダウンロードしたアーカイブファイルの展開

アドビの Web サイトから ESD をダウンロードした場合は、`aemforms_server_6_3_0_weblogic_all_win.zip` (Windows) または `aemforms_server_6_3_0_weblogic_all_unix.tar.gz` (Linux または Solaris) アーカイブファイル全体をコンピューターに展開します。Solaris の場合は、`gunzip` コマンドを使用して `.gz` ファイルを展開します。

注：元の ESD ファイルのディレクトリ階層は変更しないでください。

## 3.2. インストールに関する考慮事項

### 3.2.1. インストールパス

正常にインストールするには、インストールディレクトリに対する読み取り、書き込みおよび実行権限が必要です。インストールパスについては、以下も考慮してください。

- JEE 上の AEM Forms をインストールするときに、インストールパスに 2 バイト文字または拡張ラテン文字 (àáçéèëïòùûÃÖßÜなど) を使用しないでください。
- Windows では、JEE 上の AEM Forms インストールディレクトリのパスには、非 ASCII 文字 (例えば、éやñなどのインターナショナル文字) を使用しないでください。
- UNIX 系のシステムでは、モジュールを正常にインストールするため、ルートユーザーでログインする必要があります。ルートユーザー以外でログインした場合は、権限 (読み取り、書き込み、実行の権限) を持っている別のディレクトリにインストール先を変更してください。
- Windows に JEE 上の AEM Forms をインストールするには、管理者権限が必要です。

### 3.2.2. 一時ディレクトリ

一時ファイルは、一時ディレクトリに生成されます。生成された一時ファイルが、インストーラーの終了後も残る場合があります。これらのファイルは手動で削除することができます。

Linux でのインストールでは、インストールプログラムにより、ログインしているユーザーのホームディレクトリがファイルを格納するための一時ディレクトリとして使用されます。そのため、次のようなメッセージがコンソールに表示される場合があります。

```
WARNING: could not delete temporary file /home/<username>/ismp001/1556006
```

インストールが完了したら、次のディレクトリから一時ファイルを手動で削除する必要があります。

- (Windows) 環境変数で設定されている TMP または TEMP パス
- (Linux または Solaris) ログインユーザーのホームディレクトリ

UNIX 系のシステムでは、root 以外のユーザーは次のディレクトリを一時ディレクトリとして使用できます。

- (Linux) /var/tmp または /usr/tmp
- (Solaris) /var/tmp または /usr/tmp

### 3.2.3. Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへのインストール

Linux または UNIX プラットフォームにデプロイするために、JEE 上の AEM Forms を Windows にインストールして設定することができます。この機能を使用して、ロックダウンされた Linux または UNIX 環境にインストールできます。ロックダウンされた環境にはグラフィカルユーザーインターフェイスはインストールされていません。Linux または UNIX プラットフォームの場合、インストールプログラムにより、Configuration Manager で製品を設定するために使用されるバイナリがインストールされます。

その後、Windowsを実行するコンピューターを、デプロイ可能なオブジェクトのステージング場所として使用できます。これらのオブジェクトは、アプリケーションサーバーへのデプロイメント用にLinuxまたはUNIXコンピューターにコピーできます。Windowsベースのコンピューター上のアプリケーションサーバーと、JEE上のAEM FormsをインストールするLinuxまたはUNIXターゲットコンピューターは、同じである必要があります。

### 3.2.4. インストールに関する一般的な注意

- Windowsの場合は、インストール中にオンアクセスウイルスキャンソフトウェアを無効にすることにより、インストールに要する時間が短縮されます。詳しくは、「[AEM Formsが稼働しているサーバーでのウイルス対策ソフトウェアの使用](#)」を参照してください。
- UNIX系のシステムにインストールするが、リリースDVDからは直接インストールしない場合は、インストールファイルに実行権限を設定します。
- デプロイメントの際に権限の問題を回避するため、アプリケーションサーバーを実行する場合と同じユーザーで、JEE上のAEM FormsインストーラーおよびConfiguration Managerを実行してください。
- UNIX系コンピューターにインストールする場合は、指定するインストールディレクトリ名にスペースを含めないでください。
- インストール中にエラーが発生した場合は、インストールプログラムでinstall.logファイルが作成され、エラーメッセージが記録されます。このログファイルは、[aem-forms root]/logディレクトリに作成されます。

## 3.3. JEE 上の AEM Forms のインストール

- 1) インストールプログラムを起動します。
  - (Windows) インストールメディア上、またはインストーラーをコピーしたハードディスク上のフォルダーの¥server¥Disk1¥InstData¥Windows\_64¥VM ディレクトリに移動します。install.exeファイルを右クリックし、「管理者として実行」を選択します。
  - (Windows以外) 適切なディレクトリに移動して、コマンドプロンプトで ./install.binと入力します。
- 2) プロンプトが表示されたら、インストールプログラムで使用する言語を選択して、「OK」をクリックします。
- 3) ようこそ画面で「次へ」をクリックします。
- 4) インストールフォルダーを選択画面で、デフォルトのディレクトリをそのまま使用するか、「選択」をクリックしてJEE上のAEM Formsのインストールのインストール先ディレクトリに移動してから、「次へ」をクリックします。存在しないディレクトリの名前を入力すると、そのディレクトリが作成されます。  
「デフォルトのフォルダーに戻す」をクリックすると、デフォルトのディレクトリパスに戻すことができます。

- 5) **(Windowsのみ)** 手動インストールオプション画面で、目的のデプロイメントオプションを選択し、「次へ」をクリックします。
  - **Windows (ローカル)** : ローカルサーバーに JEE 上の AEM Forms をインストールおよびデプロイする場合は、このオプションを選択してください。
  - **リモート** (下記のリモートオペレーティングシステムを対象とする) : デプロイメント用のステージングプラットフォームとして Windows を使用する場合は、このオプションを選択します。その後で、リモートサーバー上のターゲットオペレーティングシステムを選択します。Windows 上でインストールを行っている場合でも、デプロイメント対象として UNIX オペレーティングシステムを選択できます ([Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへのインストール](#) を参照)。
- 注：保護されたデータソースが WebLogic で使用されている場合、adobe-lifecycle-weblogic.ear ファイルは、リモートマシンにデプロイできません。詳しくは、この [Technote](#) を参照してください。
- 6) JEE 上の AEM Forms の使用許諾契約書を読み、「同意します」を選択して使用許諾契約書の条件に同意し、「次へ」をクリックします。使用許諾契約書に同意しない場合は、操作を継続することはできません。
- 7) プリインストールの概要画面で、詳細を確認して「インストール」をクリックします。インストールプログ ラムによりインストールの進行状況が表示されます。
- 8) リリースノートの情報を確認して「次へ」をクリックします。
- 9) インストール完了画面の詳細情報を確認します。
- 10) 「**Configuration Manager を起動**」チェックボックスはデフォルトで選択されています。「完了」をクリッ クして Configuration Manager を実行します。

## 3.4. ログファイルの表示

インストール中にエラーが発生した場合は、ログファイルが作成され、エラーメッセージが記録されます。ログ ファイルは、[aem-forms root]\log ディレクトリに作成されます。

## 3.5. 次の手順

ここで、JEE 上の AEM Forms をデプロイするための設定をする必要があります。[aem-forms root]\configura-tionManager\bin にある ConfigurationManager.bat ファイルまたは ConfigurationManager.sh ファイルを使用して、Configuration Manager を後で実行することもできます。

## 4. AEM Forms をデプロイするための設定

### 4.1. JEE 上の AEM Forms の設定とデプロイの際の考慮事項

#### 4.1.1. 一般的な考慮事項

- 設定では、データベースの JDBC ドライバーの場所を指定する必要があります。Oracle および SQL Server のドライバーは、[aem-forms root]/lib/db/[database] ディレクトリにあります。IBM Web サイトから IBM DB2 ドライバーをダウンロードできます。サポート対象のドライバーのバージョンとダウンロード場所についての完全なリストは、「[サポートされているプラットフォームの組み合わせ](#)」を参照してください。
- グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリ：インストールの準備（シングルサーバーまたはサーバークラスター）ガイドで説明されている要件を満たす GDS ディレクトリを指定してください。最新のドキュメントについては、[http://www.adobe.com/go/learn\\_aemforms\\_tutorials\\_63\\_jp](http://www.adobe.com/go/learn_aemforms_tutorials_63_jp) を参照してください。
- クラスター環境では、Configuration Manager が行う自動設定に加えて、いくつかの手順を手動で実行する必要があります。

#### 4.1.2. WebLogic アプリケーションサーバーの考慮事項

- Configuration Manager を使用して、アプリケーションサーバーの設定またはアプリケーションサーバーへのデプロイを行う場合は、Configuration Manager を実行する前に、そのアプリケーションサーバーを手動で起動しておく必要があります。別のコンピューターにインストールされているアプリケーションサーバーを設定することもできます。
- デュアルスタックマシン (IPV6 と IPV4 をサポート) 上で Configuration Manager を実行する前に、Administration Server、Node Manager および管理対象サーバーのリスンアドレスの割り当てが完了していることを確認します。この操作を行っていない場合は、リスンアドレスを割り当てた後、それぞれを再起動します。詳しくは、「[WebLogic Server の設定](#)」節を参照してください。
- データソースを保護するには、「[JDBC モジュールを JEE 上の AEM Forms EAR にパッケージ \(データソースをセキュリティで保護\)](#)」を選択します。

注：XML フォームを処理するために JEE 上の AEM Forms の実装が必要な場合は、このタスクを選択しないでください。代わりに、Technote ([http://kb2.adobe.com/jp/cps/844/cpsid\\_84435.html](http://kb2.adobe.com/jp/cps/844/cpsid_84435.html)) の手順を実行して、WebLogic アプリケーションサーバーの JNDI アーティファクトへのアクセスを保護します。

- Configuration Manager では、カスタムファイル名を持つ EAR ファイルのデプロイまたはデプロイ解除をサポートしていません。EAR ファイルがカスタムファイル名を使用している場合は、アプリケーションサーバーに対して手動でデプロイまたはデプロイ解除する必要があります。
- リモートアプリケーションサーバーを設定する場合は、そのアプリケーションサーバーのライブラリファイルを Configuration Manager で使用できるようにするため、Configuration Manager を実行しているコンピューターにもアプリケーションサーバーをインストールしてください。

#### 4.1.3. JEE 上の AEM Forms Server クラスター設定時の考慮事項

- クラスター内の各ノードで、同じパスにローカルサーバーフォントとカスタマフォントのディレクトリを配置することをお勧めします。ローカルフォントディレクトリの代わりに共有フォントディレクトリを使用すると、パフォーマンスの問題が発生する可能性があります。

### 4.2. JEE 上の AEM Forms の事前設定タスク

注：Configuration Manager の実行中に **F1** キーを押すと、現在表示されている画面に関するヘルプ情報が表示されます。「進行状況ログを表示」をクリックすると、いつでも設定の進行状況を確認できます。

- 1) インストールプログラムで Configuration Manager が自動的に起動しなかった場合は、[aem-forms root]/configurationManager/bin ディレクトリに移動し、ConfigurationManager.bat/ConfigurationManager.sh スクリプトを実行します。
- 2) プロンプトが表示されたら、Configuration Manager で使用する言語を選択して、「OK」をクリックします。
- 3) ようこそ画面で「次へ」をクリックします。
- 4) アップグレードタスクの選択画面では、どのオプションも選択しないで、「次へ」をクリックします。
- 5) モジュール画面で、設定する JEE 上の AEM Forms モジュールを選択し、「次へ」をクリックします。

注：適切な設定と機能のために、一部のモジュールは他のモジュールとのテクニカルな依存関係をもちます。相互依存するモジュールが選択されていない場合、Configuration Manager はダイアログを表示し、それより先の操作はできなくなります。例えば、Forms ワークフローを設定する場合は、Content Repository モジュールを選択する必要があります。

- AEM Forms では、Adaptive Forms、Correspondence Management、HTML5 Forms、Forms Portal、HTML Workspace、Process Reporting、OSGi 上の Forms 中心ワークフローの各機能で crx-repository が使用されます。これらの機能を AEM Forms で使用する予定がある場合、crx-repository が必要になります。
  - AEM Forms Document Security を使用する場合、crx-repository は必要ありません。
- 6) タスク選択画面で、実行するすべてのタスクを選択し、「次へ」をクリックします。

注：Oracle RAC を使用している場合は、「JDBC モジュールを AEM Forms EAR ファイルにパッケージ（データソースをセキュリティで保護）」オプションを選択しないでください。

## 4.3. JEE 上の AEM Forms の設定とデプロイ

### 4.3.1. Adobe Experience Manager Forms を設定

- 1) Adobe Experience Manager Forms を設定 (1/5) 画面で、「設定」をクリックし、完了後に「次へ」をクリックします。
- 2) Adobe Experience Manager Forms を設定 (2/5) 画面で、「次へ」をクリックしてデフォルトのディレクトリをそのまま使用するか、「参照」をクリックして Adobe Experience Manager Forms がフォントへのアクセスに使用するディレクトリに移動して選択します。その後で「次へ」をクリックします。

**ヒント:** この画面上の値を変更するには、「設定を編集」をクリックします。このボタンは、Configuration Manager を最初に実行したときには使用できませんが、2回目およびそれ以降の実行では使用できるようになります。

- (オプション) 「Adobe サーバーフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するか、ディレクトリを参照します。
- 「カスタマーフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、「参照」をクリックするか、カスタマーフォントの新しい場所を指定します。

**注:** アドビシステムズ社以外が提供しているフォントを使用するユーザーの権利は、それらのフォントを所有する会社が提供する使用許諾契約書に拘束されるもので、アドビソフトウェアを使用するための使用許諾契約書は適用されません。アドビシステムズ社以外が提供しているフォントをアドビソフトウェアで使用する前に、適用される、アドビシステムズ社以外の使用許諾契約書すべてに準拠していることを確認してください。特に、サーバー環境でフォントを使用する際は注意が必要です。

- (オプション) 「システムフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するか、ディレクトリを参照します。リストにさらにディレクトリを追加するには、「追加」をクリックします。
- (オプション) FIPS を有効にするには、「連邦情報処理規格 (FIPS) 140-2 の暗号化を有効にします」を選択します。このオプションは、連邦情報処理規格 (FIPS) を適用する場合にのみ選択してください。
- 3) Adobe Experience Manager Forms を設定 (3/5) 画面で、「参照」をクリックし、「一時ディレクトリの場所」を指定します。

**注:** 一時ディレクトリがローカルファイルシステムに存在することを確認してください。Adobe Experience Manager Forms では、リモートの場所の一時ディレクトリはサポートされません。

- 注:** 一時ディレクトリを指定しない場合は、システム設定のデフォルトの一時ディレクトリが使用されます。
- 4) Adobe Experience Manager Forms を設定 (4/5) 画面で、「参照」をクリックして、グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリのパスを指定し、「次」をクリックします。

**注:** GDS ディレクトリのフィールドを空白のままにすると、JEE 上の AEM Forms によって、アプリケーションサーバーのディレクトリツリーにあるデフォルトの場所にディレクトリが作成されます。設定手順の完了後、管理コンソール／設定／コアシステム設定／設定からその場所にアクセスできます。

- **GDS を使用:** すべての永続的なドキュメントストレージにファイルシステムベースの GDS を使用します。このオプションでは、最高のパフォーマンスを実現し、ストレージの場所として GDS だけを使用します。

- データベースを使用: 永続的なドキュメントや長期間有効な成果物の保存に、AEM Forms データベースを使用します。ただし、ファイルシステムベースの GDS も必要です。データベースを使用することにより、バックアップと復元の手順が簡単になります。

「設定」をクリックし、JEE 上の AEM Forms EAR にこのディレクトリ情報を設定します。設定が完了したら、「次へ」をクリックします。

### 4.3.2. CRX の設定

1) CRX 設定画面では、CRX リポジトリを設定し、それを adobe-lifecycle-cq-author.ear EAR ファイルにインストールすることができます。

2) リポジトリのパスを指定します。デフォルトの場所は、[aem-forms root]/crx-repository です。

注: CRX リポジトリパスに空白が含まれていないことと、コンテンツリポジトリがクラスターのすべてのノードで使用できることを確認してください。設定が完了したら、コンテンツリポジトリをローカルノードから (CRX 設定画面で指定した) 同じ場所にあるすべてのノードにコピーします。

3) 必要に応じてリポジトリタイプを選択し、次の点について記録します。

- CRX3 TAR は、クラスター デプロイメントではサポートされていません。
- CRX3 Mongo DB を選択する場合、Mongo データベース名とデータベースの URL を指定します。URL の形式は、mongodb://<HOST>:<Port> です。

HOST : MongoDB を実行しているマシンの IP アドレス。

Port : MongoDB に使用されるポート番号。デフォルトのポート番号は 27017 です。

- CRX3 RDB は、Oracle 12c または IBM DB2 10.5 データベースでのみサポートされています。このオプションを選択すると、CRX リポジトリの RDB MK (ドキュメント MK) への永続化が設定されます。

4) 「設定」をクリックして、指定した場所に必要なリポジトリを作成します。

注: JEE 上の AEM Forms がリモートで実行されている場合は、「**Server is running on remote host**」を選択し、リモート ホスト上のリポジトリへのパスを指定します。

「次へ」をクリックして、続行します。

注: パッケージが構成済みになると、Configuration Manager を再実行して削除することはできません。デプロイ済みパッケージをアンインストールするには、Package Manager を使用してアンインストールおよび削除する必要があります。

### 4.3.3. (リモート ホストのみ) CRX 設定サマリー

1) リモートでデプロイする場合は、[aem-forms root]/configurationManager/export/crx-quickstart/ ディレクトリの内容を、CRX 設定画面で指定したリモート ホストの場所へコピーします。

注: クラスター化されたデプロイメントの場合、[aem-forms root]/configurationManager/export/crx-quickstart/ ディレクトリの内容を、すべてのクラスターノード ホスト上の指定した場所にコピーする必要があります。

#### 4.3.4. PDF Generator 用の Acrobat の設定

- Acrobat を PDF Generator に合わせて設定画面で、「設定」をクリックして、Adobe Acrobat および必要な環境設定を設定するスクリプトを実行します。完了したら「次へ」をクリックします。

注：この画面では、Configuration Manager がローカルで実行されている場合にのみ、必要な設定が実行されます。Adobe Acrobat DC Pro が既にインストールされている必要があります。インストールされていないと、この手順は失敗します。

#### 4.3.5. 設定の概要

- Adobe Experience Manager Forms の設定の概要画面で、「次へ」をクリックします。設定したアーカイブは [aem-forms root]/configurationManager/export ディレクトリに配置されます。

#### 4.3.6. アプリケーションサーバーおよびデータベースの設定

- アプリケーションサーバーの設定の詳細画面で、各フィールドの情報を指定して（すべてのフィールドが必須です）、「サーバー接続を検証」をクリックします。

検証が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

注：Administration Server および管理対象サーバーのリスンアドレスは、Weblogic 管理コンソールで指定された値に一致する必要があります。

注：WebLogic アプリケーションサーバーのサーバーインスタンス名には完全修飾ホスト名を入力する必要があります。ホスト名では大文字と小文字が区別されます。デフォルト値の localhost では動作しません。

- アプリケーションサーバーの設定の選択画面で、Configuration Manager で実行するタスクを選択し、「次へ」をクリックします。
- サーバー設定の設定画面（「サーバー設定を設定」を選択した場合のみ表示）で、フィールドの情報を入力し、「次へ」をクリックします。

注：LCM では、-Dadobe.cache.multicast-address 引数および -Dadobe.cache.bind-address jvm 引数を設定しません。場合によっては、これらの引数を手動で設定する必要があります。詳しくは、「サーバーの開始引数の設定」を参照してください。

- データソース JDBC ドライバーのクラスパスを設定画面（「パッケージ化された JDBC モジュール」を指定して「データソースを設定」オプションを選択した場合のみ表示）で、JDBC ドライバーのパスを入力し、「次へ」をクリックします。
- データソース設定画面（グローバルスコープのデータソースを指定して「データソースを設定」オプションを選択した場合のみ表示）で、フィールドの情報を指定し、「データベース接続をテスト」をクリックします。接続のテストが正常に終了したら、「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、F1 キーを押してください。

データソースは、Configuration Manager で自動的に設定する代わりに、手動で設定することもできます。自動データソース設定を上書きするには、画面の下で「続行する前に今すぐ手動でデータソースを設定してください」を選択します。

Configuration Manager を実行したまま、アプリケーションサーバーの管理コンソールにアクセスし、『Adobe Experience Manager Forms のインストールおよびデプロイ (WebLogic 版)』ガイドの「データベース接続の設定」の説明に従ってデータソースを設定します。

注：Weblogic クラスターでは、JDBC ドライバーのパスはクラスターのすべてのノードで同じである必要があります。

- 6) アプリケーションサーバーの設定画面で、「設定」をクリックします。プロセスが完了したら、「次へ」をクリックします。
- 7) JDBC モジュールを Adobe Experience Manager Forms EAR にパッケージ (1/2) 画面（「パッケージされた JDBC モジュール」オプションを指定して「データソースを設定」を選択した場合のみ表示）で、JDBC 設定の詳細情報を指定して、「データベース接続をテスト」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 8) JDBC モジュールを Adobe Experience Manager Forms EAR にパッケージ (2/2) 画面（「パッケージされた JDBC モジュール」オプションを指定して「データソースを設定」を選択した場合のみ表示）で、WebLogic 用の暗号化されたデータベースパスワードを生成するための詳細情報を指定します。次のいずれかのオプションを使用します。

#### 既存の WebLogic で暗号化されたパスワードを使用

データベース用に暗号化されたパスワードが既にある場合は、このオプションを選択します。WebLogic の暗号化ユーティリティを使用して、データベース接続のテスト用に前の画面で入力したパスワードを暗号化することができます。

#### WebLogic で暗号化されたパスワードを生成

データベース用に暗号化されたパスワードを生成し、必要な詳細を指定する場合は、このオプションを選択します。データベース接続のテスト用に前の画面で入力したプレーンテキストのパスワードが、「パスワード」フィールドに自動的に入力されます。「パスワードを暗号化」をクリックして、暗号化されたデータベースパスワードを生成します。

**重要：**これは、WebLogic アプリケーションサーバーによって暗号化されたデータベースパスワードであり、アプリケーションサーバーのパスワードではありません。

「設定」をクリックして、JDBC モジュールを Adobe Experience Manager Forms EAR にパッケージし、完了したら、「次へ」をクリックします。

- 9) ノードマネージャー、管理対象サーバー、および管理サーバーを再起動します。
- 10) アプリケーションサーバーの設定の検証画面で、検証するタスクを選択し、「検証」をクリックします。プロセスが完了したら、「次へ」をクリックします。

注：JDBC モジュールが Adobe Experience Manager Forms EAR ファイルにパッケージされていると、Configuration Manager によって、アプリケーションサーバーの設定の検証中にデータソースの検証に失敗したことが報告されます。このメッセージは無視できます。

注：グローバル範囲のデータソースを使用している場合は、データソースの検証に失敗する場合があります。この場合は、WebLogic サーバーを再起動し、データソースを再び検証してください。

#### 4.3.7. インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイルの選択

- 1) (Forms、Output、Mobile Forms、およびAssemblerのみ) Adobe Experience Manager Forms インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイル画面では、サービス用の3つのサンプルアプリケーションをインストールできます。これらのサンプルファイルをインストールするには、「**IVS EAR をデプロイメントセットに含めます**」を選択し、「次へ」をクリックします。

EAR ファイルが表示されます (モジュール画面で各モジュールを選択した場合のみ)。

注: IVS EAR ファイルは実稼働環境にデプロイしないでください。

#### 4.3.8. JEE 上の AEM Forms EAR のデプロイ

- 1) Adobe Experience Manager Forms EAR をデプロイ画面で、デプロイする EAR ファイルを選択し、「**デプロイ**」をクリックします。デプロイには数分かかる場合があります。デプロイメントが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

注: この手順の後で、必ず、管理対象サーバー、ノードマネージャー、管理サーバーを停止し、この逆の順序でそれらを起動してください。再起動した後、adobe という名前のディレクトリが [appserverdomain] に作成されていることを確認します。このことは、実行時の問題を引き起こす可能性のある [appserverdomain]/null ディレクトリが作成されないようにするために必要です。[appserverdomain]/null ディレクトリが作成された場合は、削除してください。

#### 4.3.9. Adobe Experience Manager Forms データベースの初期化

- 1) Adobe Experience Manager Forms データベースの初期化画面で、アプリケーションサーバーに指定したホスト名とポート番号が正しいことを確認してから、「**初期化**」をクリックします。データベースの初期化タスクによって、データベースにテーブルが作成され、デフォルトのデータがテーブルに追加されて、データベースに基本的なロールが作成されます。初期化が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

指示があったら、アプリケーションサーバーを手動で再起動します。

- 2) Adobe Experience Manager Forms の情報画面で、**Adobe Experience Manager Forms のユーザー ID** と **パスワード** を入力します。これらのデフォルトの値はそれぞれ administrator と password です。

「**サーバー接続を検証**」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックします。

注: この画面に表示されるサーバー情報はデプロイメント時のデフォルト値です。

注: この手順の後で、必ず、管理対象サーバー、ノードマネージャー、管理サーバーを停止し、この逆の順序でそれらを起動してください。再起動した後、adobe という名前のディレクトリが [appserverdomain] に作成されていることを確認します。このことは、実行時の問題を引き起こす可能性のある [appserverdomain]/null ディレクトリが作成されないようにするために必要です。[appserverdomain]/null ディレクトリが作成された場合は、削除してください。

サーバー接続の検証は、デプロイメントや検証でエラーが発生した場合に、トラブルシューティングの対象を絞り込むのに役立ちます。接続テストが正常に終了しても以降の段階でデプロイメントや検証のエラーが発生する場合は、接続の問題をトラブルシューティングのプロセスから除外できます。

### 4.3.10. Central Migration Bridge Service のデプロイ

- 1) Central Migration Bridge Service デプロイメント設定画面が表示される場合は、この画面で「Central Migration Bridge Service をデプロイメントに含める」オプションを選択し、「次へ」をクリックします。

### 4.3.11. Adobe Experience Manager Forms コンポーネントのデプロイ

- 1) Adobe Experience Manager Forms コンポーネントのデプロイメント画面で、「デプロイ」をクリックします。ここでデプロイされるコンポーネントは、サービスのデプロイ、統合および実行を目的として JEE 上の AEM Forms に組み込まれたサービスコンテナにプラグインされる Java アーカイブファイルです。デプロイメントの進行状況を確認するには、「進行状況ログを表示」をクリックします。デプロイメントが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。
- 2) Adobe Experience Manager Forms コンポーネントのデプロイメント検証画面で、「検証」をクリックします。検証の進行状況を確認するには、「進行状況ログを表示」をクリックします。検証が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

### 4.3.12. Adobe Experience Manager Forms コンポーネントの設定

- 1) Adobe Experience Manager Forms コンポーネントの設定画面で、Configuration Manager で実行するタスクを選択し、「次へ」をクリックします。

### 4.3.13. Connector for EMC® Documentum® の設定

注：リモートの JEE 上の AEM Forms デプロイメントの場合は、Configuration Manager を使って Connector for EMC Documentum を設定することはできません。

注：JEE 上の AEM Forms は、EMC Documentum バージョン 6.7 SP1 および 7.0 のマイナーアップデートのみをサポートします。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

注：コネクタ用のクライアントのインストール、JAR のファイルおよび設定変更のコピーの作業が、クラスターのすべてのノードで実行されていることを確認してください。

- 1) EMC Documentum のクライアントを指定画面で、「Connector for EMC Documentum コンテンツサーバーを設定します」を選択して、次の情報を指定します。詳細情報を入力して、「確認」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
  - **EMC Documentum クライアントバージョンを選択**：EMC Documentum コンテンツサーバーで使用するクライアントバージョンを選択します。
  - **EMC Documentum クライアントのインストールディレクトリのパス**：「参照」をクリックしてディレクトリパスを選択します。
- 2) EMC Documentum Content Server 設定を指定画面で、EMC Documentum Server の詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。入力する必要がある情報について詳しくは、F1 キーを押してください。
- 3) Connector for EMC Documentum を設定画面で、「Documentum Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 4) Connector for EMC Documentum に必要な手動設定画面で、一覧の手動による手順を確認および実行し、「次へ」をクリックします。

#### 4.3.14. Connector for IBM®Content Manager の設定

注：リモートのJEE上のAEM Formsデプロイメントの場合は、Configuration Managerを使ってConnector for IBM Content Managerを設定することはできません。

注：AEM Formsは、IBM Content Managerをサポートしています。「[サポートされているプラットフォームの組み合わせ](#)」ドキュメントを確認して、ECMがサポートされているバージョンにアップグレードされていることを確認してください。

注：コネクタ用のクライアントのインストール、JARのファイルおよび設定変更のコピーの作業が、クラスターのすべてのノードで実行されていることを確認してください。

- 1) IBM Content Managerのクライアントを指定画面で、「**Connector for IBM Content Managerを設定**」を選択し、「IBM Content Manager クライアントのインストールディレクトリのパス」を入力します。「確認」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
- 2) IBM Content Managerサーバーの設定を指定画面で、IBM Content Manager Serverの詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。
- 3) Connector for IBM Content Managerを設定画面で「**IBM Content Manager Connectorを設定**」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 4) Connector for IBM Content Managerに必要な手動設定画面で、一覧の手動による手順を確認および実行し、「次へ」をクリックします。

#### 4.3.15. Connector for IBM®Filenet の設定

注：リモートのJEE上のAEM Formsデプロイメントの場合は、Configuration Managerを使ってConnector for IBM FileNetを設定することはできません。

注：AEM Formsは、IBM FileNetのバージョン5.0および5.2のみをサポートしています。ECMが適切にアップグレードされていることを確認してください。

注：コネクタ用のクライアントのインストール、JARのファイルおよび設定変更のコピーの作業が、クラスターのすべてのノードで実行されていることを確認してください。

- 1) IBM FileNetのクライアントを指定画面で、「**Client for IBM FileNet Content Managerを指定**」を選択し、次の設定を指定します。
  - **IBM FileNet クライアントのバージョンを選択**：IBM FileNet Content Serverで使用するクライアントバージョンを選択します。
  - **IBM FileNet クライアントのインストールディレクトリのパス**：「参照」をクリックしてディレクトリパスを選択します。

注：IBM FileNet クライアントを含むディレクトリ名に、ハイフン (-)、下線 (\_)、カンマ (,)、ドット (.) などの特殊文字がある場合は、IBM FileNetの検証に失敗する場合があります。

「確認」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
- 2) IBM FileNet Content Serverの設定を指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1キーを押してください。

- 3) IBM FileNet Process Engine のクライアントを指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「確認」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 4) IBM FileNet Process Engine サーバーの設定を指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
- 5) Connector for IBM FileNet を設定画面で、「FileNet Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- 6) Connector for IBM FileNet に必要な手動設定画面で、一覧の手動による手順を確認および実行し、「次へ」をクリックします。

注：jass.conf.WSI ファイルへのパスに空白が含まれていると、サーバーは開始できません。この場合は、このファイルを別の場所にコピーして、パスに空白が含まれないようにしてください。

#### 4.3.16. Connector for Microsoft®SharePoint® の設定

注：リモートの JEE 上の AEM Forms デプロイメントの場合は、Configuration Manager を使って Microsoft SharePoint のコネクターを設定することはできません。

Adobe Experience Manager Forms Connector for Microsoft SharePoint を設定画面で、次のいずれかのタスクを実行します。

- 後で Microsoft Sharepoint を手動設定するには、「Adobe Experience Manager Forms Connector for Microsoft SharePoint を設定」オプションの選択を解除し、「次へ」をクリックします。
- 「Adobe Experience Manager Forms Connector for Microsoft SharePoint を設定」オプションを選択したままにします。必要な値を入力し、「SharePoint Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

注：Administration Console を使用して後で Connector for Microsoft SharePoint を設定する場合は、この手順をスキップできます。

#### 4.3.17. ネイティブファイル変換のための Adobe Experience Manager Forms Server の設定

- 1) (PDF Generator のみ) PDF のネイティブ変換に必要な管理者のユーザー資格情報画面で、サーバーコンピューターの管理者権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを入力して、「ユーザーを追加」をクリックします。

注：Windows Server 2012 の場合は、管理ユーザーを 1 人以上追加する必要があります。Windows Server 2012 では、追加するユーザーのユーザー アカウント 制御 (UAC) を無効にする必要があります。UAC を無効にするには、コントロール パネル / ユーザー アカウント / ユーザー アカウント 制御 の有効化または無効化をクリックし、「ユーザー アカウント 制御 (UAC) を使ってコンピューターの保護に役立たせる」の選択を解除して、「OK」をクリックします。変更を適用するには、コンピューターを再起動します。

#### 4.3.18. PDF Generator の System Readiness Test

- 1) Document Services PDF Generator System Readiness Test 画面で、「開始」をクリックして、システムが適切に PDF Generator を設定しているかを検証します。System Readiness Tool レポートを確認し、「次へ」をクリックします。Adobe Experience Manager Forms がリモートマシンにデプロイされている場合は、System Readiness Test が失敗します。

#### 4.3.19. Acrobat Reader DC Extensions の設定

- 1) Adobe Experience Manager Forms Acrobat Reader DC Extensions 証明書の設定画面で、モジュールサービスをアクティブにする Acrobat Reader DC Extensions 証明書に関連付けられている詳細を指定します。

注：「管理コンソールを使用して後から設定」を選択することで、この時点ではこの手順をスキップすることもできます。デプロイメントを完了した後で、管理コンソールを使用して Acrobat Reader DC Extensions 秘密鍵証明書を設定できます。（管理コンソールにログインしたら、ホーム／設定／Trust Store の管理／ローカル秘密鍵証明書をクリックします）。

「設定」をクリックし、「次へ」をクリックします。

#### 4.3.20. サマリー、および次の手順

- 1) Configuration Manager のタスクの概要リストを確認し、適切なオプションを選択します。
  - 「次の手順を開始」を選択して、JEE 上の AEM Forms ユーザーと管理インターフェイスに関する情報を表示し、JEE 上の AEM Forms の起動と使用に関する手順を説明した html ページを開きます。

注：サーバを再起動するように伝えるメッセージが画面に表示されます。すぐには再起動を行わないでください。[crx-repository]/logs/error.log に変化がなく、すべてのバンドル（署名以外）がアクティブモードであることを確認してから、サーバーを再起動します。「完了」をクリックして Configuration Manager を終了します。

## 5. デプロイメント後のタスク

### 5.1. 一般的なタスク

#### 5.1.1. シリアル化エージェントの設定

AEM Formsを使用するには、`sun.util.calendar`パッケージをホワイトリストに登録する必要があります。このパッケージをホワイトリストに追加するには、以下の手順を実行します。

- 1) ブラウザーウィンドウでWebコンソールを開きます。デフォルトのURLは`http://[server]:[port]/system/console/configMgr`です。
- 2) デシリアライゼーションファイアウォール設定を検索して開きます。
- 3) ホワイトリストフィールドで`sun.util.calendar`パッケージを追加して「保存」をクリックします。

#### 5.1.2. 正しい日付、時刻およびタイムゾーンの設定

JEE上のAEM Forms環境に接続するすべてのサーバーで正しい日付、時刻およびタイムゾーンを設定することで、時間に依存するモジュール（Digital Signatures や Acrobat Reader DC Extensionsなど）が正常に機能するようになります。例えば、未来の時間に作成された署名は、有効になりません。

同期を必要とするサーバーは、データベースサーバー、LDAPサーバー、HTTPサーバーおよびJ2EEサーバーです。

#### 5.1.3. クライアントSDKのURLとポート番号の設定

CRXリポジトリをインストールしている場合にのみ、次の手順を実行します。

AEM FormsクライアントSDK(CSDK)のデフォルトのURLは、`http://localhost:8080`です。デフォルトのURLを現在お使いのAEM Forms環境のURLに変更してください。現在のURLは、AEM Configuration ManagerとCRXリポジトリ間で有効化され、認証されている必要があります。

- 1) ブラウザーウィンドウでConfiguration ManagerのURL (`http://<server>:<port>/lc/system/console/configMgr`)を開きます。
- 2) 編集のため、Adobe LiveCycle Client SDK Configurationサービスを探して開きます。
- 3) 「サーバーURL」フィールドで、現在お使いのAEM Forms環境のURLを指定し、「保存」をクリックします。

### 5.1.4. 委任RSAライブラリと委任BouncyCastleライブラリの起動

CRX リポジトリをインストールしている場合にのみ、次の手順を実行します。

AEM Formsを使用するには、AEM Forms アドオンパッケージとともに、RSA ライブラリと BouncyCastle ライブラリをインストールする必要があります。これらの委任ライブラリを起動するには、以下の手順を実行します。

- 1) AEM インスタンスを停止します。
- 2) [AEM installation directory]\crx-repository\launchpad\ フォルダーに移動して sling.properties ファイルを開いて編集します。
- 3) 以下のプロパティを sling.properties ファイルに追加します。  
`sling.bootdelegation.class.com.rsa.jsafe.provider.JsafeJCE=com.rsa.*sling.bootdelegation.class.org.bouncycastle.jce.provider.BouncyCastleProvider=org.bouncycastle.*`
- 4) ファイルを保存して閉じます。AEM インスタンスを再起動します。

注：AEM Forms サーバーを再起動する前に、ServiceEvent REGISTERED メッセージと ServiceEvent UNREGISTERED メッセージが <crx-repository>/error.log ファイルに表示されなくなり、このログファイルが安定した状態になるまで待ちます。

### 5.1.5. アプリケーションサーバーの再起動

JEE 上の AEM Forms を初めてデプロイする際、サーバーはデプロイメントモードになっています。このモードでは、ほとんどのモジュールがメモリ内に置かれます。このため、メモリの消費量が大きく、サーバーは実稼働に適した状態ではありません。アプリケーションサーバーを再起動して、サーバーをクリーンな状態に戻す必要があります。

### 5.1.6. デプロイメントの確認

Administration Console にログインして、デプロイメントを確認できます。正常にログインできる場合は、JEE 上の AEM Forms がアプリケーションサーバーで実行されており、データベースにデフォルトのユーザーが作成されていることを意味します。CRX レポジトリデプロイメントを検証するには、CRX ようこそページにアクセスします。

アプリケーションサーバーのログファイルを確認して、コンポーネントが正しくデプロイされたことを確認したり、発生する可能性のあるデプロイメントの問題の原因を特定したりすることができます。

#### Administration Consoleへのアクセス

JEE 上の AEM Forms Administration Console は、各種設定ページにアクセスするための Web ベースのポータルです。これらの設定ページでは、JEE 上の AEM Forms の動作を制御する実行時プロパティを設定できます。Administration Console にログインすると、User Management、監視フォルダー、電子メールクライアント設定および他のサービスの管理設定オプションにアクセスできます。また、Administration Console では「アプリケーションおよびサービス」にアクセスすることもできます。これは、管理者がアーカイブの管理や、実稼働環境へのサービスのデプロイに使用します。

ログインする場合のデフォルトのユーザー名とパスワードは、それぞれ administrator と password です。初回のログイン後は、User Management にアクセスしてパスワードを変更してください。

- 1) Web ブラウザーに次の URL を入力します。

`http://[hostname]:[port]/adminui`

例：`http://localhost:8001/adminui`

注：WebLogic Server のデフォルトポート番号は 7001 です。新しい管理対象サーバーを作成した場合は、別のポートが設定されている可能性があります。管理対象サーバーはデフォルトのポートである 8001 を使用します。

- 2) JEE 上の AEM Forms にアップグレードした場合、以前のインストールと同じ管理者ユーザー名およびパスワードを入力します。新規インストールの場合は、デフォルトのユーザー名とパスワードを入力します。
- 3) ログイン後、「サービス」をクリックして、サービスの管理ページにアクセスするか、「設定」をクリックして、様々なモジュールの設定を管理できるページにアクセスします。

### OSGi Management Console へのアクセス

OSGi コンソールは、OSGi バンドルとサービス設定を管理するための手段を提供します。OSGi Management Console にアクセスするには、次の手順を実行します。

- 1) Web ブラウザーに次の URL を入力します。

`http://[ホスト名]:[ポート]/lc/system/console`

- 2) CRX 管理者のユーザー名とパスワードを入力します。ログイン用のデフォルトのユーザー名とパスワードは、`admin` と `admin` です (CRX 管理者と同じです)。

注：OSGi Management Console には、JEE 上の AEM Forms 管理者または AEM 上級管理者の資格情報ではログインできません。

- 3) ログインすると、さまざまなコンポーネント、サービス、バンドル、その他の設定にアクセスできます。

### ログファイルの表示

実行時や起動時のエラーなどのイベントは、アプリケーションサーバーのログファイルに記録されます。アプリケーションサーバーへのデプロイ中に何らかの問題が発生した場合には、ログファイルを参照して問題を見つけることができます。ログファイルは、テキストエディターを使用して開くことができます。

次のログファイルが `[appserverdomain]/servers/[managed server name]/logs` ディレクトリにあります。

- - `[managed server name].log`
- - `[managed server name].out`

次の CRX ログファイルは `[CRX_home]/` にあります。ログ

- `error.log`
- `audit.log`
- `access.log`
- `request.log`
- `update.log`

## 5.1.7. 作成者インスタンスと発行インスタンスの設定

CRX リポジトリをインストールおよび設定している場合にのみ、次のタスクを実行して、作成者インスタンスと発行インスタンスを設定してください。

### 作成者インスタンスの設定

作成者インスタンスは、JEE 上の AEM Forms サーバーに埋め込まれています。これは、作成者インスタンスの設定を更新する必要がないことを意味します。インスタンスは、JEE 上の AEM Forms インスタンスからすべての構成設定を引き継ぎます。

### 発行インスタンスの設定

作成者インスタンスと発行インスタンスは別々に実行する必要があります。2つのインスタンスを別々のマシンに構成することができます。

注：発行インスタンスには、クラスタートポロジーは推奨されません。発行インスタンスを単独で使用するか、発行インスタンスのファームを設定します。

注：デフォルトでは、発行インスタンスは対応する作成者インスタンスと同じモードを実行するように設定されています。そのモードは、TarMK、MongoMK または RDBMK のいずれかになります。発行インスタンスを TarMK モードで実行します。

### 発行ノードの設定

- 1) 発行インスタンス用のアプリケーションサーバーのプロファイルを、同じマシンまたは別のマシンに新規作成します。
- 2) 作成者インスタンスで、[aem-forms root]/configurationManager/export/ ディレクトリに移動します。
- 3) adobe-livecycle-cq-publish.ear ファイルをコピーし、手順 1 で作成したアプリケーションサーバーのプロファイルにデプロイします。
- 4) [aem-forms root]/configurationManager/export/crx-quickstart ディレクトリの内容を、発行インスタンス用のファイルサーバーにコピーします。
- 5) (作成者インスタンスが RDBMK を実行するように設定されている場合) 発行インスタンスにコピーしたインストールディレクトリから、次のファイルを削除します。
  - org.apache.jackrabbit.oak.plugins.document.DocumentNodeStoreService.cfg
  - org.apache.sling.datasource.JNDIDataSourceFactory-oak.cfg
- 6) -Dcom.adobe.livecycle.crx.home=<location for crx-repository> パラメーターを使用して、発行サーバーを起動します。ここで、<location for crx-repository> は発行インスタンス用の crx-repository ディレクトリのコピー元の場所です。例えば、cq-quickstart ディレクトリの内容を C:\CM-publish\crx-repository ディレクトリにコピーした場合、<location for crx-repository> パラメーターは Dcom.adobe.livecycle.crx.home=C:\CM-publish\crx-repository になります。

注：同じコンピューター上に作成者インスタンスと発行インスタンスが両方ある場合には、発行インスタンスを起動する際に必ず別のポートを使用するようにしてください。

**重要：**CRX リポジトリパスに空白が含まれていないことを確認してください。

## 作成者インスタンスと発行インスタンス間の通信

作成者インスタンスと発行インスタンス間の双方向通信を有効にします。

### 発行インスタンス URL の定義

- 1) <http://<authorHost>:<authorPort>/lc/etc/replication/agents.author/publish.html> に移動します。
- 2) 「編集」をクリックします。「Agent Settings」ダイアログが表示されます。
- 3) 「Transport」タブをクリックして、パブリッシュサーバーの URL を「URL」フィールドに入力します。

`http://<publishHost>:<publishPort>/lc/bin/receive? sling:authRequestLogin=1`

注：ロードバランサーによって複数の発行インスタンスが管理されている場合は、URI フィールドにその URL を指定します。

- 4) 「OK」をクリックします。

注：別のクラスターに対しては、1つの作成者インスタンス（できればマスターインスタンス）でこれらの手順を実行する必要があります。

### ActivationManagerImpl の発行インスタンス URL の定義

- 1) <http://<authorHost>:<authorPort>/lc/system/console/configMgr> に移動します。ログイン用のデフォルトのユーザー名とパスワードは、admin と admin です (CRX 管理者と同じです)。
- 2) 「com.adobe.livecycle.content.activate.impl.ActivationManagerImpl.name」設定の横にある「編集」アイコンをクリックします。
- 3) 「ActivationManager Publish URL」フィールドで、対応する発行インスタンスの URL を指定します。
- 4) 「保存」をクリックします。

### 逆複製キューの設定

- 1) [http://<authorHost>:<authorPort>/lc/etc/replication/agents.author/publish\\_reverse.html](http://<authorHost>:<authorPort>/lc/etc/replication/agents.author/publish_reverse.html) に移動します。
  - 2) 「編集」をクリックします。「Agent Settings」ダイアログが表示されます。
  - 3) 「Transport」タブをクリックして、対応するパブリッシュサーバーの URL を「URL」フィールドに入力します。
- 注：ロードバランサーによって複数の発行インスタンスが管理されている場合は、URI フィールドにその URL を指定します。
- 4) 「OK」をクリックします。

## 作成者インスタンス URL の定義

- 1) `http://<publishHost>:<publishPort>/lc/system/console/configMgr` に移動します。ログイン用のデフォルトのユーザー名とパスワードは、`admin` と `admin` です (CRX 管理者と同じです)。
- 2) 「`com.adobe.livecycle.content.activate.impl.VersionRestoreManagerImpl.name`」設定の横にある「編集」アイコンをクリックします。
- 3) 「`VersionRestoreManager Author URL`」フィールドで、対応する作成者インスタンスの URL を指定します。  
注：ロードバランサーによって複数の作成者インスタンスが管理されている場合は、「`VersionRestoreManager Author URL`」フィールドにその URL を指定します。
- 4) 「保存」をクリックします。

## IPv6 実装の設定

注：マシン／サーバーが 1 つの IPv6 アドレスを使用している場合のみ、次の手順を実行します。

IPv6 アドレスをサーバーおよびクライアントコンピューターにマップするには：

- 1) `C:\Windows\System32\drivers\etc` ディレクトリを開きます。
- 2) `hosts` ファイルをテキストエディターで開きます。
- 3) IPv6 アドレスのマッピングをホスト名に追加します。例えば、以下のように行います。

`2001:1890:110b:712b:d1d:9c99:37ef:7281 <ipv6_hostname>`

- 4) ファイルを保存して閉じます。

マシンへのアクセスに IPv6 アドレスではなくマップされたホスト名が使用されていることを確認します。

## Adobe Reader 用日本語フォントのインストール

ドキュメントフラグメントで日本語フォントを使用する場合は、Adobe Reader 用日本語サポートパッケージをインストールする必要があります。インストールしないと、文字やフォームのレンダリングおよび機能が正常に実行されません。言語パックをインストールするには、Adobe Reader のダウンロードページにアクセスします。

### 5.1.8. Workbench へのアップグレード

JEE 上の AEM Forms サーバーのアップグレードが完了し、適切に動作していることを確認したら、JEE 上の AEM Forms アプリケーションの作成と変更を引き続き行うために、新しいバージョンの Workbench をインストールします。

### 5.1.9. CSIV2 Inbound Transport の設定

デフォルトの Global Security が有効な状態での IBM WebSphere をインストールすると、CSIV2 Inbound Transport オプションが SSL-required に設定されます。この設定は、Output および Forms コンポーネントの失敗を引き起こします。CSIV2 Inbound Transport オプションを SSL-Supported に変更したことを確認します。オプションを変更するには、次の操作を行います。

- 1) IBM WebSphere 管理コンソールにログインします。
- 2) 「Security」を展開して、「Global security」をクリックします。
- 3) Authentication セクションで、「RMI/IOP security」を展開して、「CSIV2 inbound communications」をクリックします。
- 4) CSIV2 Transport Layer セクションで、「Transport」の値を「SSL-Supported」に設定します。
- 5) 「適用」をクリックします。

### 5.1.10. JBoss 用 JMS の有効化

JMS サービスは、デフォルトで無効になっています。JMS サービスを有効にするには、以下の手順を実行します。

- 1) 次のタグを standalone\_full.xml から lc\_turnkey.xml にコピーします。

```
<extension module="org.jboss.as.messaging">....</extension>
<subsystem xmlns="urn:jboss:domain:messaging:1.4">  </subsystem>
```

- 2) add-user.bat スクリプトを実行して、アプリケーションユーザーを作成します。Guest グループにアプリケーションユーザーを追加します。

注: JMS DSC コンポーネントは、接続ユーザー名とパスワードが必要です。新規追加されたアプリケーションユーザーが Send/Receive 操作のための JMS Queue/Topic を使用する権限を持っていることを確認してください。

注: デフォルトでは、lc\_turnkey.xml ファイルの `security-setting match="#">>.... </security-settings>` スニペットには、JMS の Send/Receive 読み取り権限を持つ guest ロールがあります。アプリケーションユーザーを作成する必要があります。

- 3) JMS DSC 設定を変更して、新規作成されたアプリケーションユーザーを含めます。
- 4) JMS Service 設定で、org.jnp.interfaces.NamingContextFactory を org.jboss.as.naming.InitialContextFactory に変更します。

### 5.1.11. アダプティブフォームおよびCorrespondence Management アセットの移行

移行ユーティリティにより、以前のバージョンのアセットがAEM 6.3 Formsで使用できるようになります。AEM パッケージ共有からユーティリティをダウンロードできます。手順について詳しくは、<https://helpx.adobe.com/jp/aem-forms/6-3/migration-utility.html> を参照してください。

#### 分析とレポートの再設定

AEM 6.3 Formsでは、ソースのトラフィック変数とインプレッションの成功イベントは利用できません。このため、AEM 6.3 Formsにアップグレードすると、AEM FormsはAdobe Analyticsサーバーへのデータ送信を停止し、アダプティブフォームとアダプティブドキュメントの分析レポートは使用できなくなります。また、AEM 6.3 Formsには、フォームバージョン分析用のトラフィック変数と、フィールドの処理時間に関する成功イベントが導入されています。このため、AEM Forms環境で分析とレポートを再設定してください。手順について詳しくは、<https://helpx.adobe.com/content/help/jp/aem-forms/6-3/configure-analytics-forms-documents.html> を参照してください。

フォームの平均記入時間とアダプティブドキュメントの平均読み取り時間を計算する方法が変更されました。したがって、AEM 6.3 Formsにアップグレードすると、これらの指標が古いデータ（以前のAEM Formsリリースのデータ）は、Adobe Analyticsでしか使用できなくなります。これは、AEM Formsの分析レポートには表示されません。これらの指標について、AEM Formsの分析レポートでは、アップグレードが実行された後に取得されたデータを表示します。

### 5.1.12. Content Repository Connector サービスの設定

デフォルトでは、Content Repository Connector サービスは、<http://localhost:8080/lc/crx/server/> という URL を使用して設定されます。次の手順を実行して、使用する環境に合わせてサービスを構成します。

- 1) AEM Forms Admin UIに、資格情報administrator/passwordを使用してログインします。管理UIのデフォルト URLは[http://\[IP\]:\[Port\]/adminui](http://[IP]:[Port]/adminui) です。
- 2) サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理に移動します。
- 3) 編集のため、Content Repository Connectorを検索して開きます。
- 4) 設定タブを開き、Experience Management Server フィールドのデフォルトのURLを、使用する環境のURLに変更します。

#### IP

アプリケーションサーバーを実行しているマシンのIPアドレス。

#### ポート

AEM Formsが使用しているポート番号。JBoss、WebLogic、WebSphereのデフォルトのポート番号は、それぞれ8080、8001、9080です。

## 5.2. 作成者インスタンスと発行インスタンスの設定

CRX リポジトリをインストールおよび設定している場合にのみ、次のタスクを実行して、作成者インスタンスと発行インスタンスを設定してください。

### 5.2.1. 作成者インスタンスの設定

作成者インスタンスは、JEE 上の AEM Forms サーバーに埋め込まれています。これは、作成者インスタンスの設定を更新する必要がないことを意味します。インスタンスは、JEE 上の AEM Forms インスタンスからすべての構成設定を引き継ぎます。

### 5.2.2. 発行インスタンスの設定

作成者インスタンスと発行インスタンスは別々に実行する必要があります。2つのインスタンスを別々のマシンに構成することができます。

注：発行インスタンスには、クラスタートポロジーは推奨されません。発行インスタンスを単独で使用するか、発行インスタンスのファームを設定します。

注：デフォルトでは、発行インスタンスは対応する作成者インスタンスと同じモードを実行するように設定されています。そのモードは、TarMK、MongoMK または RDBMK のいずれかになります。発行インスタンスを TarMK モードで実行します。

#### 発行ノードの設定

- 1) 発行インスタンス用のアプリケーションサーバーのプロファイルを、同じマシンまたは別のマシンに新規作成します。
- 2) 作成者インスタンスで、[aem-forms root]/configurationManager/export/ ディレクトリに移動します。
- 3) adobe-livecycle-cq-publish.ear ファイルをコピーし、手順 1 で作成したアプリケーションサーバーのプロファイルにデプロイします。
- 4) [aem-forms root]/configurationManager/export/crx-quickstart ディレクトリの内容を、発行インスタンス用のファイルサーバーにコピーします。
- 5) (作成者インスタンスが **RDBMK** を実行するように設定されている場合) 発行インスタンスにコピーしたインストールディレクトリから、次のファイルを削除します。
  - org.apache.jackrabbit.oak.plugins.document.DocumentNodeStoreService.cfg
  - org.apache.sling.datasource.JNDIDataSourceFactory-oak.cfg

- 6) -Dcom.adobe.livecycle.crx.home=<location for crx-repository>パラメーターを使用して、発行サーバーを起動します。ここで、<location for crx-repository>は発行インスタンス用のcrx-repositoryディレクトリのコピー元の場所です。例えば、cq-quickstartディレクトリの内容をC:\CM-publish\crx-repositoryディレクトリにコピーした場合、<location for crx-repository>パラメーターはDcom.adobe.livecycle.crx.home=C:\CM-publish\crx-repositoryになります。

注：同じコンピューター上に作成者インスタンスと発行インスタンスが両方ある場合には、発行インスタンスを起動する際に必ず別のポートを使用するようしてください。

重要：CRX リポジトリパスに空白が含まれていないことを確認してください。

### 5.2.3. 作成者インスタンスと発行インスタンス間の通信

作成者インスタンスと発行インスタンス間の双方向通信を有効にします。

#### 発行インスタンス URL の定義

- 1) http://<authorHost>:<authorPort>/lc/etc/replication/agents.author/publish.html に移動します。
- 2) 「編集」をクリックします。「Agent Settings」ダイアログが表示されます。
- 3) 「Transport」タブをクリックして、パブリッシュサーバーの URL を「URI」フィールドに入力します。

http://<publishHost>:<publishPort>/lc/bin/receive?sling:authRequestLogin=1

注：ロードバランサーによって複数の発行インスタンスが管理されている場合は、URI フィールドにその URL を指定します。

- 4) 「OK」をクリックします。

注：別のクラスターに対しては、1つの作成者インスタンス（できればマスターインスタンス）でこれらの手順を実行する必要があります。

#### ActivationManagerImpl の発行インスタンス URL の定義

- 1) http://<authorHost>:<authorPort>/lc/system/console/configMgr に移動します。ログイン用のデフォルトのユーザー名とパスワードは、admin と admin です（CRX 管理者と同じです）。
- 2) 「com.adobe.livecycle.content.activate.impl.ActivationManagerImpl.name」設定の横にある「編集」アイコンをクリックします。
- 3) 「ActivationManager Publish URL」フィールドで、対応する発行インスタンスの URL を指定します。
- 4) 「保存」をクリックします。

## 逆複製キューの設定

- 1) [http://<authorHost>:<authorPort>/lc/etc/replication/agents.author/publish\\_reverse.html](http://<authorHost>:<authorPort>/lc/etc/replication/agents.author/publish_reverse.html) に移動します。
- 2) 「編集」をクリックします。「Agent Settings」ダイアログが表示されます。
- 3) 「Transport」タブをクリックして、対応するパブリッシュサーバーの URL を「URL」フィールドに入力します。  
注：ロードバランサーによって複数の発行インスタンスが管理されている場合は、URI フィールドにその URL を指定します。
- 4) 「OK」をクリックします。

## 作成者インスタンス URL の定義

- 1) <http://<publishHost>:<publishPort>/lc/system/console/configMgr> に移動します。ログイン用のデフォルトのユーザー名とパスワードは、admin と admin です (CRX 管理者と同じです)。
- 2) 「com.adobe.livecycle.content.activate.impl.VersionRestoreManagerImpl.name」設定の横にある「編集」アイコンをクリックします。
- 3) 「VersionRestoreManager Author URL」フィールドで、対応する作成者インスタンスの URL を指定します。  
注：ロードバランサーによって複数の作成者インスタンスが管理されている場合は、「VersionRestoreManager Author URL」フィールドにその URL を指定します。
- 4) 「保存」をクリックします。

### 5.2.4. IPv6 実装の設定

注：マシン／サーバーが1つのIPv6 アドレスを使用している場合のみ、次の手順を実行します。

IPv6 アドレスをサーバーおよびクライアントコンピューターにマップするには：

- 1) C:\Windows\System32\drivers\etc ディレクトリを開きます。
- 2) hosts ファイルをテキストエディターで開きます。
- 3) IPv6 アドレスのマッピングをホスト名に追加します。例えば、以下のように行います。  
2001:1890:110b:712b:d1d:9c99:37ef:7281 <ipv6\_hostname>
- 4) ファイルを保存して閉じます。

マシンへのアクセスに IPv6 アドレスではなくマップされたホスト名が使用されていることを確認します。

### 5.2.5. Adobe Reader 用日本語フォントのインストール

ドキュメントフラグメントで日本語フォントを使用する場合は、Adobe Reader 用日本語サポートパッケージをインストールする必要があります。インストールしないと、文字やフォームのレンダリングおよび機能が正常に実行されません。言語パックをインストールするには、Adobe Reader のダウンロードページにアクセスします。

## 5.3. PDF Generatorの設定

PDF Generatorをインストールした場合は、次のタスクを実行します。

### 5.3.1. 環境変数

ファイルをPDFに変換するようにPDF Generatorを設定している場合は、一部のファイル形式に関して、対応するアプリケーションを起動する際に使用する実行可能ファイルの絶対パスを含む環境変数を手動で設定する必要があります。次の表に、ネイティブアプリケーション用の環境変数の一覧を示します。

注：クラスター内のすべてのノードに、必要なアプリケーションがインストールされていることを確認してください。

注：すべての環境変数とそれぞれのパスでは、大文字と小文字が区別されます。

アプリケーション	環境変数	例
Adobe Acrobat	Acrobat_PATH	C:\Program Files (x86)\Adobe\Acrobat 2015\Acrobat\Acrobat.exe
メモ帳	Notepad_PATH	C:\Windows\notepad.exe Notepad_PATH変数は空欄でかまいません。
OpenOffice	OpenOffice_PATH	C:\Program Files (x86)\OpenOffice 4

注：これらの環境変数は、クラスター内のすべてのノードに対して設定する必要があります。

注：環境変数OpenOffice\_PATHは、実行ファイルへのパスではなく、インストールフォルダーのパスに設定します。

### 5.3.2. HTTP プロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定

JEE上のAEM Formsが実行されているコンピューターが、プロキシ設定を使用して外部Webサイトにアクセスしている場合、アプリケーションサーバーは、次の値をJava仮想マシン (JVM) 引数として設定して起動する必要があります。

```
-Dhttp.proxyHost=[server host]
-Dhttp.proxyPort=[server port]
```

アプリケーションサーバーをHTTPプロキシホスト設定で起動するには、次の手順を完了します。

- 1) WebLogicが実行されている場合は停止します。
- 2) コマンドラインから、[WL\_HOME]\user\_projects\[appserverdomain]\binディレクトリ内のstartWebLogicスクリプトを編集します。
  - (Windows) startWebLogic.cmd
  - (Linux、UNIX) startWebLogic.sh

- 3) 次のテキストをスクリプトファイルに追加します。

- (Windows)

```
set PROXY_SETTINGS=-Dhttp.proxyHost=<hostname> -Dhttp.proxyPort=[port]
```

- (Linux、UNIX)

```
PROXY_SETTINGS=-Dhttp.proxyHost=<hostname> -Dhttp.proxyPort=[port]
```

- 4) ファイルを保存して閉じ、WebLogicを再起動します。

### 5.3.3. Adobe PDF プリンターをデフォルトのプリンターとして設定

Adobe PDF プリンターを、サーバーのデフォルトプリンターに設定する必要があります。Adobe PDF プリンターがデフォルトとして設定されていない場合、PDF Generatorではファイルを変換できません。

クラスターの場合、Adobe PDF プリンターを、すべてのノードのデフォルトプリンターに設定する必要があります。

#### デフォルトプリンターの設定

- 1) スタート／プリンターとFAXを選択します。
- 2) プリンターとFAX ウィンドウで、「Adobe PDF」を右クリックし、「通常使うプリンターに設定」を選択します。

### 5.3.4. Acrobat Professionalの設定 (Windowsベースのコンピューターのみ)

注: この手順は、JEE 上の AEM Forms のインストールを完了後に Acrobatへのアップグレードまたは Acrobat のインストールを行った場合にのみ必要です。Acrobatのアップグレードは、Configuration Managerを実行してアプリケーションサーバーにJEE上のAEM Formsをデプロイした後に実行できます。Acrobat Professional のルートディレクトリは、[Acrobatroot] と表記します。通常、ルートディレクトリは C:\Program Files (x86)\Adobe\Acrobat 2015\Acrobat\ です。

#### PDF Generatorで使用するための Acrobat の設定

- 1) Acrobat の以前のバージョンがインストールされている場合、Windows コントロールパネルの「プログラムの追加と削除」を使用して Acrobatをアンインストールします。
- 2) インストーラーを実行して Acrobat DC Pro をインストールします。
- 3) JEE 上の AEM Forms のインストールメディアの additional\scripts フォルダーに移動します。
- 4) 次のバッチファイルを実行します。

```
Acrobat_for_PDFG_Configuration.bat [aem_forms_root]/pdflg_config
```

- 5) JEE 上の AEM Forms Configuration Manager を実行しない他のクラスターノード上で、次の手順を実行します。
  - HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Control\Print に、SplWOW64TimeOut という名前の新しいレジストリ DWORD エントリを追加します。値を 60000 に設定します。
  - JEE 上の AEM Forms がインストールされているノード上の [aem-forms root]/plugins/x86\_win32 ディレクトリにある PDFGen.api を、現在設定しているノード上の [Acrobat root]/plug\_ins ディレクトリにコピーします。
- 6) Acrobat を開き、ヘルプ／アップデートの有無をチェック／環境設定を選択します。
- 7) 「自動的に新しいアップデートを確認する」を選択解除します。

### Acrobat のインストールの検証

- 1) システム上の PDF ファイルに移動し、そのファイルをダブルクリックして Acrobat で開きます。PDF ファイルが正常に開いた場合は、Acrobat が正しくインストールされています。
- 2) PDF ファイルを正しく開くことができない場合は、Acrobat をアンインストールしてから再インストールします。

注：Acrobat のインストール完了後に表示される Acrobat のすべてのダイアログボックスを閉じてから、Acrobat の自動アップデートを無効化してください。環境変数 Acrobat\_PATH を、Acrobat.exe を指すように設定してください（例えば、C:\Program Files (x86)\Adobe\Acrobat 2015\Acrobat\Acrobat.exe）。

### Acrobat の信頼できるディレクトリリストへの一時ディレクトリの追加

OptimizePDF サービスでは、Adobe Acrobat を使用し、JEE 上の AEM Forms の一時ディレクトリおよび PDF Generator の一時ディレクトリを Acrobat の信頼できるディレクトリリストに作成します。

JEE 上の AEM Forms の一時ディレクトリおよび PDF Generator の一時ディレクトリが信頼できるディレクトリリストに追加されない場合、OptimizePDF サービスの実行は失敗します。一時ディレクトリリストにディレクトリを追加するには、次の手順を実行します。

- 1) Acrobat を開き、編集／環境設定を選択します。
- 2) 左側のカテゴリから、「セキュリティ（強化）」を選択し、「拡張セキュリティを有効にする」オプションを選択します。
- 3) JEE 上の AEM Forms の一時ディレクトリおよび PDF Generator の一時ディレクトリを信頼できるディレクトリリストに追加するには、「フォルダーパスの追加」をクリックし、ディレクトリを選択して、「OK」をクリックします。

### 5.3.5. PDF Generator へのフォントの追加

JEE 上の AEM Forms では、フォントの中央リポジトリを提供しています。これは、すべての JEE 上の AEM Forms モジュールにアクセスすることができます。サーバー上にある JEE 上の AEM Forms 以外のアプリケーションで、追加フォントを使用できるように設定します。これにより、PDF Generator では、そのアプリケーションを使用して作成された PDF ドキュメントで追加フォントを使用できるようになります。

注：指定したフォントフォルダーに新しいフォントを追加したら、アプリケーションサーバーを再起動します。

## JEE 上の AEM Forms 以外のアプリケーション

次のリストには、サーバー側で PDF を生成する際に PDF Generator で使用できる、JEE 上の AEM Forms 以外のアプリケーションが記載されています。

### Windows 専用アプリケーション

- Microsoft Office Word
- Microsoft Office Excel
- Microsoft Office PowerPoint
- Microsoft Office Project
- Microsoft Office Publisher
- Adobe FrameMaker
- Adobe PageMaker
- Adobe Acrobat Professional

### マルチプラットフォームアプリケーション

- OpenOffice Writer
- OpenOffice Calc
- OpenOffice Draw
- OpenOffice Impress

注：これらのアプリケーションの他にも、各ユーザーが追加したアプリケーションが含まれている場合があります。

上記のアプリケーションのうち OpenOffice スイート (Writer、Calc、Draw および Impress) は、他のアプリケーションが Windows にのみ対応しているのに対して、Windows、Solaris および Linux プラットフォームに対応しています。

### Windows 専用アプリケーションへの新しいフォントの追加

上記のすべての Windows 専用アプリケーションでは、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダーにあるすべてのフォントにアクセスできます。これらのアプリケーションには、C:\Windows\Fonts に加えて、それぞれ固有のフォントフォルダーが存在する場合があります。

このため、JEE 上の AEM Forms フォントディレクトリにカスタムフォントを追加する場合、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダーにそのフォントをコピーして、Windows 専用のアプリケーションでもこれらのフォントを使用できるようにする必要があります。

カスタムフォントの使用に際しては、使用許諾契約に基づくライセンスを取得して、そのフォントにアクセスするアプリケーションでの使用が許可されている必要があります。

## その他のアプリケーションへの新しいフォントの追加

他のアプリケーションに PDF 作成のサポートを追加した場合、これらのアプリケーションのヘルプを参照して新しいフォントを追加します。Windows では、通常はカスタムフォントを C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダーに追加すれば十分です。

## OpenOffice スイートへの新しいフォントの追加

OpenOffice スイートへのカスタムフォントの追加方法は、OpenOffice Fonts-FAQ ページ (<http://wiki.services.openoffice.org>) で説明されています。

### 5.3.6. HTML から PDF への変換の設定

HTML から PDF への変換プロセスは、Acrobat DC Pro の設定を使用するように設計されています。この設定は、PDF Generator の設定よりも優先されます。

注：この設定は、HTML から PDF への変換プロセスを有効にするために必要です。設定が行われていない場合、この変換タイプは失敗します。

#### HTML から PDF への変換の設定

- 1) Acrobat のインストールおよび検証は、「Acrobat Professional の設定」で説明されています。
- 2) [aem-forms root]\plugins\x86\_win32 ディレクトリにある pdfgen.api ファイルを探し、[Acrobat root]\Acrobat\plug\_ins ディレクトリにコピーします。

#### HTML から PDF への変換における Unicode フォントのサポート

**重要：**入力用 zip ファイルにファイル名が 2 バイト文字の HTML ファイルが含まれている場合、HTML から PDF への変換は失敗します。この問題を回避するには、HTML ファイルに名前を付けるときに 2 バイト文字を使用しないようにします。

- 1) Unicode フォントを、使用しているシステムに応じて、次のいずれかのディレクトリにコピーします。
  - ウィンドウ
    - [Windows root]\Windows\fonts
    - [Windows root]\WINNT\fonts
  - UNIX
    - /usr/lib/X11/fonts/TrueType
    - /usr/openwin/lib/X11/fonts/TrueType
    - /usr/share/fonts/default/TrueType
    - /usr/X11R6/lib/X11/fonts/ttf

```
/usr/X11R6/lib/X11/fonts/truetype  
/usr/X11R6/lib/X11/fonts/TrueType  
/usr/X11R6/lib/X11/fonts/TTF  
/Users/cfqauser/Library/Fonts  
/System/Library/Fonts  
/Library/Fonts  
/Users/ + System.getProperty(<username>, root) + /Library/Fonts  
System.getProperty(JAVA_HOME) + /lib/fonts  
/usr/share/fonts (Solaris)
```

注：/usr/lib/X11/fonts ディレクトリが存在することを確認します。ディレクトリがない場合は、ln コマンドを使用して /usr/share/X11/fonts から /usr/lib/X11/fonts へのシンボリックリンクを作成します。

注：フォントが /usr/share/fonts または /usr/share/X11/fonts ディレクトリのいずれかに存在することを確認します。

- 2) IBM type1 Courier フォントを /usr/share/X11/fonts/font-ibm-type1-1.0.3 フォルダーに解凍します。
- 3) /usr/share/fonts から /usr/share/X11/fonts へのシンボリックリンクを作成します。
- 4) [aem-forms root]/deploy/adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルにある cffont.properties ファイルで、フォント名マッピングを変更します。
  - このアーカイブファイルを展開し、cffont.properties ファイルを探して、エディターで開きます。
  - Java フォント名のコンマ区切りリストで、フォントタイプごとに、Unicode システムフォントにマップを追加します。以下の例では、kochi mincho が Unicode システムフォントの名前です。

```
dialog=Arial, Helvetica, kochi mincho  
dialog.bold=Arial Bold, Helvetica-Bold, kochi mincho ...
```
  - プロパティファイルを保存して閉じ、adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルを再パッケージ化して再デプロイします。

注：日本語のオペレーティングシステムでは、cffont.properties.ja ファイルでもフォントマッピングを指定します。これは、標準の cffont.properties ファイルよりも優先されます。

ヒント：リスト内のフォントは、左から右に検索され、最初に見つかったフォントが使用されます。HTML から PDF の変換ログでは、システム内で見つかったすべてのフォント名のリストが返されます。マップが必要なフォント名を特定するには、前述したいずれかのディレクトリにフォントを追加し、サーバーを再起動して変換を実行します。マッピングに使用するフォント名は、ログファイルから特定できます。

生成された PDF ファイルにフォントを埋め込むには、cffont.properties ファイル内の embedFonts プロパティを true に設定します（デフォルトは false）。

### 5.3.7. Network Printer Client のインストール

PDF Generator には、クライアントコンピューターに PDF Generator ネットワークプリンターをインストールするための実行ファイルが含まれています。インストールが完了すると、PDF Generator プリンターがクライアントコンピューターの既存のプリンターのリストに追加されます。その後、このプリンターを使用してドキュメントを送信し、PDF に変換することができます。

注：管理コンソールのネットワークプリンタークライアントのインストールウィザードでは、Windows オペレーティングシステムのみがサポートされています。ネットワークプリンタークライアントのインストールウィザードの起動には、32 ビット JVM を使用してください。64 ビット JVM を使用した場合は、エラーが発生します。

Windows で PDFG ネットワークプリンターのインストールが失敗する場合や、プリンターを UNIX または Linux のプラットフォームにインストールする場合は、各オペレーティングシステムのネイティブのプリンター追加ユーティリティを使用して、Windows でネイティブのプリンターの追加ウィザードを使用した PDFG ネットワークプリンターの設定の説明に従って設定してください。

#### PDF Generator ネットワークプリンタークライアントのインストール

注：Windows Server 2012 で PDF Generator ネットワークプリンタークライアントをインストールする前に、Windows Server 2012 にインターネット印刷クライアント機能がインストールされていることを確認してください。機能のインストールについては、Windows Server 2012 のヘルプを参照してください。

- 1) PDF Generator をサーバーに正常にインストールしたことを確認します。
- 2) 次のいずれかの操作を行います。
  - Windows クライアントコンピューターで、Web ブラウザーから次の URL を開きます。[host] は PDF Generator をインストールしたサーバーの名前、[port] は使用しているアプリケーションサーバー ポートです。

`http://[host]:[port]/pdfg-ipp/install`

- 管理コンソールで、ホーム/サービス/PDF Generator/PDFG ネットワークプリンターをクリックします。「PDFG ネットワークプリンターのインストール」セクションで、「ここをクリックしてください」をクリックして、PDFG ネットワークプリンターのインストールを起動します。
- 3) インターネットポートの構成画面で、「指定されたユーザー アカウントを使う」オプションを選択して、PDFG 管理者またはユーザーのロールを持つ JEE 上の AEM Forms ユーザーの資格情報を指定します。このユーザーには電子メールアドレスも必要です。このアドレスは、変換済みのファイルを受信する際に使用できます。このセキュリティ設定をクライアントコンピューター上のすべてのユーザーに適用するには、「すべてのユーザーに同じセキュリティ設定を使う」を選択して、「OK」をクリックします。

注：ユーザーのパスワードが変更された場合、ユーザーは使用しているコンピューターに PDFG ネットワークプリンターを再インストールする必要があります。パスワードを管理コンソールから更新することはできません。

インストールが終了すると、プリンターが正常にインストールされたことを示すダイアログボックスが表示されます。

- 4) 「OK」をクリックします。プリンターのリストに使用可能な「PDF Generator」という名前のプリンターが追加されます。

**Windows でネイティブのプリンターの追加ウィザードを使用した PDFG ネットワークプリンターの設定**

- 1) スタート／プリンターと FAX をクリックし、「プリンターの追加」をダブルクリックします。
- 2) 「次へ」をクリックし、「ネットワークプリンター、または他のコンピューターに接続されているプリンター」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 3) 「インターネット上または自宅／会社のネットワーク上のプリンターに接続する」を選択し、次の PDFG プリンターの URL を入力します。[host] はサーバー名、[port] はサーバーを実行しているポート番号です。

`http://[host]:[port]/pd़fg-ipp/printer`

- 4) インターネットポートの構成画面で、「指定されたユーザーアカウントを使う」を選択し、ユーザーの有効な資格情報を指定します。
- 5) 「プリンタードライバーの選択」ボックスで、任意の標準的な PostScript ベースのプリンタードライバー (HP Color LaserJet PS など) を選択します。
- 6) 適切なオプション (このプリンターをデフォルトに設定するなど) を選択してインストールを完了します。  
注：プリンターの追加の際に使用するユーザーの資格情報では、応答を受信するために、有効な電子メール ID を User Management で設定する必要があります。
- 7) 電子メールサービスの sendmail サービスを設定します。サービスの設定オプションで有効な SMTP サーバーと認証情報を指定します。

**プロキシサーバーのポート転送を使用した PDF Generator Network Printer Client のインストールと設定**

- 1) CC プロキシサーバーで特定のポートについて JEE 上の AEM Forms サーバーへのポート転送を設定し、プロキシサーバーレベルで認証を無効にします (JEE 上の AEM Forms で独自の認証を使用するため)。転送を設定したポートでクライアントがこのプロキシサーバーに接続すると、すべての要求が JEE 上の AEM Forms サーバーに転送されます。
- 2) 次の URL を使用して、PDFG ネットワークプリンターをインストールします。

`http://[proxy server]:[forwarded port]/pd़fg-ipp/install.`

- 3) PDFG ネットワークプリンターの認証に必要な資格情報を指定します。
- 4) PDFG ネットワークプリンターがクライアントマシンにインストールされます。これにより、ファイアウォールで保護されている JEE 上の AEM Forms サーバーを使用した PDF 変換が可能になります。

### 5.3.8. ファイル制限機能の設定の変更

Microsoft Office のセキュリティセンター設定を変更して、PDFG が古いバージョンの Microsoft Office ドキュメントを変更できるようにします。

- 1) 任意の Office 2013 アプリケーションで、「ファイル」タブをクリックします。「ファイル」の下の「オプション」をクリックします。オプションダイアログボックスが表示されます。
- 2) 「セキュリティセンター」をクリックし、「セキュリティセンターの設定」をクリックします。
- 3) セキュリティセンターダイアログで、「ファイル制限機能の設定」をクリックします。
- 4) 「ファイルの種類」リストで、PDF Generator で変換するファイルの種類に対して、「開く」チェックボックスをオフにします。

### 5.3.9. 監視フォルダーのパフォーマンスパラメーター

監視フォルダーを使用した PDF の変換を実行するための十分なディスク容量がないことを示す `java.io.IOException` エラーメッセージが発生しないように、管理コンソールで PDF Generator の設定を変更できます。

#### PDF Generator のパフォーマンスパラメーターの設定

- 1) 管理コンソールにログインして、サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理を選択します。
- 2) サービスのリストで **PDFGConfigService** を探してクリックし、以下の値を設定します。
  - **PDFG Cleanup Scan Seconds** : 1800
  - **Job Expiration Seconds** : 6000
  - **Server Conversion Timeout** : デフォルト値の 270 を、450 などの大きい値に変更します。
- 3) 「保存」をクリックして、サーバーを再起動します。

### 5.3.10. 保護フィールドを含む Microsoft Word 文書に対する PDF 変換の有効化

PDF Generator は保護フィールドを含む Microsoft Word 文書をサポートします。保護フィールドを含む Microsoft Word 文書に対して PDF 変換を有効にするには、次のようにファイルタイプ設定を変更します。

- 1) 管理コンソールで、**Services**／**PDF Generator**／**File Type Settings** に行き、ファイルタイプ設定プロファイルを開きます。
- 2) **Microsoft Word** オプションを展開し、「**Adobe PDF** でドキュメントマークアップを保持 (Microsoft Office 2003 以降) オプションを選択します。
- 3) 「名前を付けて保存」をクリックし、ファイルタイプ設定の名前を指定し、「OK」をクリックします。

## 5.4. Document Securityに対するSSLの設定

Document Securityでは、SSLを使用するようにアプリケーションサーバーを設定する必要があります。管理ヘルプを参照してください。

## 5.5. FIPSモードの有効化

注：以前のバージョンで設定している場合は、次の手順をスキップしてください。

JEE上のAEM FormsにはFIPSモードがあり、RSA BSAFE Crypto-C 2.1暗号化モジュールを使用して、データ保護を連邦情報処理規格（FIPS）140-2承認アルゴリズムに限定しています。

JEE上のAEM Formsの設定中にConfiguration Managerを使用してこのオプションを有効化しなかった場合、または有効化した設定を無効化する場合は、Administration Consoleからこの設定を変更できます。

FIPSモードを変更した場合は、サーバーを再起動する必要があります。

FIPSモードはAcrobat 7.0より前のバージョンをサポートしていません。FIPSモードが有効で、パスワードによる暗号化およびパスワード削除のプロセスにAcrobat 5の設定が含まれる場合、このプロセスは失敗します。

通常、FIPSが有効化されていると、Assemblerサービスでは、どのドキュメントにもパスワードの暗号化が適用されません。この処理が試行されると、FIPSModeExceptionが発生し、FIPSモードではパスワードを暗号化できないことが示されます。また、ベースドキュメントがパスワードで暗号化されている場合、PDFsFromBookmarksエレメントはFIPSモードではサポートされません。

### 5.5.1. FIPSモードのオンまたはオフ

- 1) 管理コンソールにログインします。
- 2) 設定／コアシステム設定／設定をクリックします。
- 3) 「FIPSを有効にする」を選択してFIPSモードを有効化するか、選択を解除してFIPSモードを無効化します。
- 4) 「OK」をクリックして、アプリケーションサーバーを再起動します。

注：JEE上のAEM Formsソフトウェアでは、コードを検証してFIPSの互換性を確認しません。FIPS操作モードは、FIPSで承認されたライブラリ（RSA）の暗号化サービスで、FIPSで承認されたアルゴリズムが使用されるようにするために提供されています。

## 5.6. Connector for EMC Documentumの設定

注：JEE上のAEM Formsは、EMC Documentum 6.7 SP1および7.0のマイナーアップデートのみをサポートします。ECMが適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for EMC DocumentumをJEE上のAEM Formsの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、Documentumリポジトリに接続するように、このサービスを設定します。

### 5.6.1. Connector for EMC Documentum の設定

- 1) [appserverdomain] フォルダーにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます（ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します）。
- 2) 次の Documentum Foundation Classes JAR ファイルを指定する新しいシステムプロパティを追加します。
  - dfc.jar
  - aspectjrt.jar
  - log4j.jar
  - jaxb-api.jar
  - configservice-impl.jar
  - configservice-api.jar
  - commons-codec-1.3.jar
  - commons-lang-2.4.jar

新しいシステムプロパティは、次の形式にする必要があります。

[component id].ext=[JAR files and/or folders]

例えば、デフォルトの Content Server と Documentum Foundation Classes のインストールを使用して、次のいずれかのシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

- Connector for EMC Documentum 6.7 SP1 および 7.0 のみ：

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforEMCDocumentum.ext=
C:/Program Files/Documentum/Shared/dfc.jar,
C:/ProgramFiles/Documentum/Shared/aspectjrt.jar,
C:/Program Files/Documentum/Shared/log4j.jar,
C:/Program Files/Documentum/Shared/jaxb-api.jar,
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-impl.jar,
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-api.jar
C:/Program Files/Documentum/Shared/commons-codec-1.3.jar
C:/Program Files/Documentum/Shared/commons-lang-2.4.jar
```

注：上記のテキストには、改行が含まれています。このテキストをコピー＆ペーストする場合、改行を削除してください。

- 3) Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

http://[host]:[port]/adminui

- 4) 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名：administrator

パスワード：password

- 5) サービス／Connector for EMC Documentum／環境設定に移動して、以下のタスクを実行します。
  - 必要な Documentum リポジトリ情報のすべてを入力します。
  - Documentum をリポジトリプロバイダーとして使用するには、「リポジトリサービスプロバイダー」で「EMC Documentum リポジトリプロバイダー」を選択し、「保存」をクリックします。詳しくは、[管理ヘルプ](#)のページの右上隅にあるヘルプリンクをクリックしてください。
- 6) (オプション) サービス／Connector for EMC Documentum／リポジトリ証明書の設定に移動して、「追加」をクリックし、Docbase 情報を指定して、「保存」をクリックします (詳しくは、右上隅の「ヘルプ」をクリックしてください)。
- 7) アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。
- 8) Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[host]:[port]/adminui`

- 9) 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

- 10) サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理に移動して、以下のサービスを選択します。
  - EMCDocumentumAuthService
  - EMCDocumentumContentRepositoryConnector
  - EMCDocumentumRepositoryProvider
  - EMCDocumentumECMUpgradeService
- 11) 「開始」をクリックします。サービスのいずれかが正常に起動されない場合は、前の手順で実行した設定を確認します。
- 12) 次のいずれかのタスクを実行します。
  - Documentum Authorization サービス (EMCDocumentumAuthService) を使用して、Workbench の Resources ビューで Documentum リポジトリのコンテンツを表示するには、この手順を続行します。Documentum Authorization サービスを使用すると、デフォルトの JEE 上の AEM Forms 認証が上書きされるので、Documentum の資格情報を使用して Workbench にログインするように設定する必要があります。
  - JEE 上の AEM Forms リポジトリを使用するには、JEE 上の AEM Forms の上級管理者の資格情報 (デフォルトは administrator と password) を使用して Workbench にログインします。
- 13) アプリケーションサーバーを再起動します。

- 14) 管理コンソールにログインし、**設定**／**User Management**／ドメインの管理をクリックします。
- 15) 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメインIDと名前を入力します。ドメインIDは、ドメインの一意の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注：(WebLogic および WebSphere のみ) JEE 上の AEM Forms データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100 文字、2 バイト文字で 50 文字、4 バイト文字で 25 文字です (管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照してください。)

注：JEE 上の AEM Forms データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください (JEE 上の AEM Forms 管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照してください。)

- 16) カスタム認証プロバイダーを追加します。
    - 「認証を追加」をクリックします。
    - 認証プロバイダーリストで「カスタム」を選択します。
    - 「EMCDocumentumAuthProvider」を選択し、「OK」をクリックします。
  - 17) LDAP 認証プロバイダーを追加します。
    - 「認証を追加」をクリックします。
    - 認証プロバイダーリストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。
  - 18) LDAP ディレクトリを追加します。
    - 「ディレクトリを追加」をクリックします。
    - 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。
    - 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。
    - (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。
    - 「次へ」をクリックし、ユーザー設定を指定して「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。
- 設定について詳しくは、ページの右上隅にある「**User Management** ヘルプ」をクリックしてください。
- 19) 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。
  - 20) 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。  
(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。
  - 21) 設定／User Management／ユーザーとグループをクリックします。

22) LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
- JEE 上の AEM Forms のロールを 1つ以上選択し、「OK」をクリックします。
- 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「**User Management ヘルプ**」をクリックしてください。

23) Workbench を起動し、Documentum リポジトリ用の次の資格情報を使用してログインします。

**Username** : [username]@[repository\_name]

**Password** : [password]

ログイン後は、Documentum リポジトリは、Workbench 内の Resources ビューに表示されます。

username@repository\_name を使用してログインしない場合、Workbench では、デフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

24) (オプション) Connector for EMC Documentum の JEE 上の AEM Forms サンプルをインストールするには、Samples という名前の Documentum リポジトリを作成して、その中にサンプルをインストールします。

Connector for EMC Documentum サービスの設定後の、Documentum リポジトリでの Workbench の設定について詳しくは、JEE 上の AEM Forms 管理ヘルプを参照してください。

### 5.6.2. Documentum リポジトリでの XDP MIME 形式の作成

ユーザーが Documentum リポジトリから XDP ファイルを取得し、保存できるようにするには、次のタスクのいずれかを実行する必要があります。

- ユーザーがアクセスする XDP ファイルが置かれている各リポジトリに、対応する XDP 形式を作成します。
- Documentum リポジトリにアクセスするときに Documentum 管理者アカウントを使用するように、Connector for EMC Documentum サービスを設定します。この場合、Connector for EMC Documentum サービスでは必要に応じて XDP 形式が使用されます。

#### Documentum 管理者アカウントを使用した Documentum Content Server での XDP 形式の作成

1) Documentum 管理者アカウントにログインします。

2) 「形式」をクリックし、ファイル／新規作成／形式を選択します。

3) 次の情報を対応するフィールドに入力します。

名前 : xdp

デフォルトのファイル拡張子 : xdp

Mime タイプ : application/xdp

4) ユーザーが XDP ファイルを保存する他のすべての Documentum リポジトリについて、手順 1～3 を繰り返します。

## Documentum 管理者アカウントを使用するためのConnector for EMC Documentum サービスの設定

- 1) Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。  
http://[host]/:[port]/adminui
- 2) 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。  
ユーザー名 : administrator  
パスワード : password
- 3) サービス／Connector for EMC Documentum／環境設定をクリックします。
- 4) 「Documentum プリンシパル秘密鍵証明書に関する情報」領域で、次の情報を更新し、「保存」をクリックします。  
ユーザー名 : [Documentum Administrator user name]  
パスワード : [Documentum Administrator password]
- 5) 「リポジトリ証明書の設定」をクリックして、リストからリポジトリを選択します。リストにない場合は、「追加」をクリックします。
- 6) 対応するフィールドで適切な情報を指定して、「保存」をクリックします。  
リポジトリ名 : [Repository Name]  
リポジトリ証明書のユーザー名 : [Documentum Administrator user name]  
リポジトリ証明書のパスワード : [Documentum Administrator password]
- 7) ユーザーがXDP ファイルを保存するすべてのリポジトリについて、手順5～6を繰り返します。

### 5.6.3. 複数の接続プローカーのサポートの追加

JEE 上の AEM Forms の Configuration Manager では、1つの接続プローカーの構成のみサポートしています。JEE 上の AEM Forms の Administrator Console を使用して、複数の接続プローカーのサポートを追加します。

- 1) JEE 上の AEM Forms の Administrator Console を開きます。
- 2) ホーム／サービス／Connector for EMC Documentum／環境設定に移動します。
- 3) 「接続プローカーのホスト名またはIP アドレスで、別の接続プローカーのホスト名のカンマで区切りられたリストを入力します。例えば、host1、host2、host3 と入力します。
- 4) 「接続プローカーのポート番号」で、対応する接続プローカーのポートのカンマで区切りられたリストを入力します。例えば、1489、1491、1489 を入力します。
- 5) 「保存」をクリックします。

## 5.7. Documentum リポジトリでの XDP MIME 形式の作成

ユーザーが Documentum リポジトリから XDP ファイルを取得し、保存できるようにするには、次のタスクのいずれかを実行する必要があります。

- ユーザーがアクセスする XDP ファイルが置かれている各リポジトリに、対応する XDP 形式を作成します。
- Documentum リポジトリにアクセスするときに Documentum 管理者アカウントを使用するように、Connector for EMC Documentum サービスを設定します。この場合、Connector for EMC Documentum サービスでは必要に応じて XDP 形式が使用されます。

### 5.7.1. Documentum 管理者アカウントを使用した Documentum Content Server での XDP 形式の作成

1) Documentum 管理者アカウントにログインします。

2) 「形式」をクリックし、ファイル／新規作成／形式を選択します。

3) 次の情報を対応するフィールドに入力します。

名前 : xdp

デフォルトのファイル拡張子 : xdp

Mime タイプ : application/xdp

4) ユーザーが XDP ファイルを保存する他のすべての Documentum リポジトリについて、手順 1～3 を繰り返します。

### 5.7.2. Documentum 管理者アカウントを使用するための Connector for EMC Documentum サービスの設定

1) Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

http://[host]/:[port]/adminui

2) 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

3) サービス／Connector for EMC Documentum／環境設定をクリックします。

4) 「Documentum プリンシパル秘密鍵証明書に関する情報」領域で、次の情報を更新し、「保存」をクリックします。

ユーザー名 : [Documentum Administrator user name]

パスワード : [Documentum Administrator password]

- 5) 「リポジトリ証明書の設定」をクリックして、リストからリポジトリを選択します。リストにない場合は、「追加」をクリックします。
- 6) 対応するフィールドで適切な情報を指定して、「保存」をクリックします。  
リポジトリ名 : [Repository Name]  
リポジトリ証明書のユーザー名 : [Documentum Administrator user name]  
リポジトリ証明書のパスワード : [Documentum Administrator password]
- 7) ユーザーがXDPファイルを保存するすべてのリポジトリについて、手順5～6を繰り返します。

## 5.8. Connector for IBM Content Managerの設定

注：AEM Formsは、IBM Content Managerをサポートしています。「[サポートされているプラットフォームの組み合わせ](#)」ドキュメントを確認して、ECMがサポートされているバージョンにアップグレードされていることを確認してください。

Connector for IBM Content ManagerサービスをAEM Formsインストールの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、IBM Content Managerデータストアに接続するようサービスを設定します。

### 5.8.1. Connector for IBM Content Managerの設定

- 1) [appserverdomain] フォルダーにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます。ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します。
- 2) 次の IBM II4C JAR ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。
  - cmb81.jar
  - cmbcm81.jar
  - cmbicm81.jar
  - cmblog4j81.jar
  - cmbsdk81.jar
  - cmbutil81.jar
  - cmutilicm81.jar
  - cmbview81.jar
  - cmbwas81.jar
  - cmbwcm81.jar
  - cmgmt

注：cmgmtはJARファイルではありません。Windowsでは、このフォルダーはデフォルトで C:\Program Files\IBM\db2cmv8\ にあります。

- common.jar
- db2jcc.jar
- db2jcc\_license\_cisuz.jar
- db2jcc\_license\_cu.jar
- ecore.jar
- ibmjgssprovider.jar
- ibmssseprovider2.jar
- ibmpkcs.jar
- icmrm81.jar
- jcache.jar
- log4j-1.2.8.jar
- xerces.jar
- xml.jar
- xsd.jar

新しいシステムプロパティは次のようにになります。

[component id].ext=[JAR files and/or folders]

例えば、デフォルトのDB2 Universal Database Client および II4C インストールを使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

```
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/cmgmt,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmssseprovider2.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmjgssprovider.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmpkcs.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/xml.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbview81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmb81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xsd.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/common.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib.ecore.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/jcache.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutil81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutilicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/icmrm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc.jar,
```

```
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cu.jar,
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cisuz.jar,
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xerces.jar,
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmblog4j81.jar,
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/log4j-1.2.8.jar,
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbsdk81.jar,
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwas81.jar
```

- 3) アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

これで、IBMCMConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use User credentials」をログインモードとして使用して接続できます。

これで、この手順に必要なステップを完了しました。

(オプション) IBMCMConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use Credentials From Process Context」をログインモードとして使用して接続するには、次の手順を実行します。

### 5.8.2. 「Use Credentials from process context」 ログインモードを使用した接続

- 1) Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

`http://[host]:[port]/adminui`

- 2) 上級管理者の資格情報を使用してログインします。インストール中に設定されたデフォルト値は、次のとおりです。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

- 3) サービス／Connector for IBM Content Manager をクリックします

- 4) 必要なリポジトリ情報のすべてを入力して「保存」をクリックします。IBM Content Manager リポジトリ情報について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

- 5) 次のいずれかのタスクを実行します。

- IBM Content Manager Authorization サービス (IBMCMAuthProvider) を使用して IBM Content Manager データストアのコンテンツを Workbench の Processes ビューで使用するには、この手順を続行します。IBM Content Manager Authorization サービスを使用すると、デフォルトの AEM Forms 認証が上書きされるので、IBM Content Manager の資格情報を使用して Workbench にログインするように設定する必要があります。
- Workbench の Processes ビューで IBM Content Manager データストアのコンテンツを使用するためには手順4で指定したシステム資格情報を使用するには、AEM Forms の上級管理者の資格情報 (デフォルトは administrator と password) を使用して、Workbench にログインします。これで、この手順に必要なステップを完了しました。この場合、手順4で指定したシステム資格情報は、デフォルトリポジトリにアクセスするためのデフォルトの AEM Forms 認証サービスを使用します。

- 6) 管理コンソールにログインし、設定／User Management／ドメインの管理をクリックします。

- 7) 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメインIDと名前を入力します。ドメインIDは、ドメインの一意の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注: AEM FormsデータベースとしてDB2を使用している場合、IDの許容される最大長は、1バイト(ASCII)文字で100文字、2バイト文字で50文字、4バイト文字で25文字です (管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照してください。)

注: AEM FormsデータベースとしてMySQLを使用している場合、IDには1バイト(ASCII)文字のみを使用してください (管理ヘルプの「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

- 8) カスタム認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 認証プロバイダリストで「カスタム」を選択し、「**IBMCMAuthProviderService**」を選択して、「OK」をクリックします。

- 9) LDAP認証プロバイダーを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 認証プロバイダリストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。

- 10) LDAPディレクトリを追加します。

- 「ディレクトリを追加」をクリックします。
- 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。
- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。(オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDNを取得」を選択します。完了したら、「次へ」をクリックします。
- ユーザー設定を指定し、「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

上記の設定について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックしてください。

- 11) 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

- 12) 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

- 13) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

- 14) 設定/User Management/ユーザーとグループをクリックします。

- 15) LDAPから同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
- AEM Formsのロールを1つ以上選択し、「OK」をクリックします。
- 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

- 16) Workbenchを起動し、IBM Content Manager データストア用の次の資格情報を使用してログインします。

**Username** : [username]@[repository\_name]

**Password** : [password]

これで、IBMCMConnectorService オーケストレーション可能コンポーネントのログインモードが「**Use Credentials from process context**」として選択されている場合に、Workbench の Processes ビューで IBM Content Manager データストアを使用できます。

## 5.9. Connector for IBM FileNet の設定

AEM Forms は、IBM FileNet 5.0 および 5.2 のみをサポートしています。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

注：AEM Forms は FileNet 5.2 Content Engine をサポートしています。FileNet 5.2 Process Engine はサポートしていません。

Connector for IBM FileNet を AEM Forms の一部としてインストールした場合は、FileNet オブジェクトストアに接続するように、このサービスを設定する必要があります。

- 1) [appserverdomain]/config/config.xml ファイルを探し、そのバックアップコピーを作成します。
- 2) WebLogic Server Administration Console の「Domain Structure」で、**Environment / Servers** をクリックし、右側のウィンドウでサーバーの名前をクリックします。
- 3) 「Configuration」タブをクリックし、「Server Start」をクリックします。
- 4) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 5) [appserverdomain] フォルダーにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます（ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します）。
- 6) 次の FileNet Application Engine JAR ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。  
FileNet 5.x の場合、次の JAR ファイルを追加します。
  - Jace.jar
  - javaapi.jar
  - log4j.jar
  - pe.jar
  - stax-api.jar
  - xlpxScanner.jar
  - xlpxScannerUtils.jar

注：pe.jar ファイルは、デプロイメントで IBMFileNetProcessEngineConnector サービスを使用する場合にのみ追加します。新しいシステムプロパティには、次の構造を反映させる必要があります。

```
[component id].ext=[JAR files and/or folders]
```

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

注：次のテキストには、レイアウトのために1行が分割されている部分があります。このテキストを、このドキュメント以外の場所にコピーする場合は、新しい場所に貼り付けるときに改行を削除してください。

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforIBMFileNet.ext=
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/javaapi.jar,
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/log4j-1.2.13.jar
```

7) (FileNet Process Engine Connectorのみ) 次の手順で、プロセスエンジンの接続プロパティを設定します。

- テキストエディターを使用してファイルを作成し、次のコンテンツを1行で入力します。末尾で改行してください。

(FileNet 5.0のみ)

```
RemoteServerUrl = cemp:http://[contentserver_IP]:[contentengine_port]/wsi/FNCEWS40DIME/
(FileNet 5.2のみ)
```

```
RemoteServerUrl = cemp:http://[contentserver_IP]:[contentengine_port]/wsi/FNCEWS40MTOM/
```

- このファイルを WcmApiConfig.properties という名前で別のフォルダーに保存して、そのフォルダーの場所を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

例えば、このファイルを c:\pe\_config\WcmApiConfig.properties として保存して、パス c:\pe\_config を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

注：ファイル名では大文字と小文字が区別されます。

8) カスタム JAAS 設定ファイルが使用されている場合、次の行をカスタム JAAS 設定ファイルに追加します。

```
FileNetP8 {weblogic.security.auth.login.UsernamePasswordLoginModule
required authOnLogin=true;};
FileNetP8WSI {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};
FileNetP8Engine
{weblogic.security.auth.login.UsernamePasswordLoginModule required
authOnLogin=true;};
FileNetP8Server
{weblogic.security.auth.login.UsernamePasswordLoginModule required
authOnLogin=true;};
```

ヒント：カスタム JAAS 設定ファイルが使用されているかどうかは、アプリケーションサーバーの start コマンドのプロパティ -Djava.security.auth.login.config の値で識別できます。

- 9) (FileNet Process Engine Connectorのみ) このFileNet Process Engine Connectorをデプロイメントで使用する場合、設定に応じて次のいずれかの手順を実行します。

- カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使用する場合、次の行をカスタム JAAS 設定ファイルに追加します。

```
FileNetP8 {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};
```

- カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使用しない場合、テキストエディターを使用して次の内容を含むファイルを作成します。

```
FileNetP8 {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};
```

このファイルをjaas.conf.WSIとして保存して、その場所を、WebLogic Server startコマンドに次のJavaオプションとして追加します。

-Djava.security.auth.login.config=<JAAS file location>

例えば、このファイルをC:\pe\_config\jaas.conf.WSIとして保存して、次のJavaオプションを追加します。

-Djava.security.auth.login.config=C:/pe\_config/jaas.conf.WSI

- 10) config.xml ファイルを開き、管理対象サーバーのユーザー ドメインの <credential-encrypted> 値を探します。このエレメントに値が設定されていない場合は、手順1で作成した config.xml ファイルのバックアップコピーを開き、<credential-encrypted> 値をコピーします。

- 11) 新しい config.xml ファイルに値を貼り付けてから、このファイルを保存して閉じます。

- 12) アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

- 13) Web ブラウザーを開き、次の URL を入力します。

http://[host]:[port]/adminui

- 14) 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

- 15) サービス／Connector for IBM FileNetをクリックします。

- 16) コンテンツエンジンの URL を入力します。例：cemp:http://ContentEngineHostNameorIP:port/wsi/FNCEWS40MTOM?jaasConfigurationName=FileNetP8WSI

- 17) 必要なすべてのFileNet リポジトリ情報を入力し、「リポジトリサービスプロバイダー」の下で「IBM FileNet リポジトリプロバイダー」を選択します。

オプションのプロセスエンジンサービスをデプロイメントで使用する場合、「プロセスエンジン設定」領域で「プロセスエンジンコネクタサービスを使用」を選択し、プロセスエンジンの各設定を指定します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

注：この手順で指定する資格情報は、IBM FileNet リポジトリサービスを後で起動するときに検証されます。資格情報が無効な場合はエラーが発生し、サービスは起動されません。

- 18) 「保存」をクリックし、サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理に移動します。
- 19) 次の各サービスの横にあるチェックボックスを選択して「開始」をクリックします。
  - IBMFileNetAuthProviderService
  - IBMFileNetContentRepositoryConnector
  - IBMFileNetRepositoryProvider
  - IBMFileNetProcessEngineConnector (設定されている場合)

サービスのいずれかが正常に開始されない場合は、Process Engine 設定を確認します。
- 20) 次のいずれかのタスクを実行します。
  - FileNet Authorization サービス (IBMFileNetAuthProviderService) を使用して Workbench の Resources ビューで FileNet オブジェクトストアからコンテンツを表示するには、この手順を続行します。FileNet Authorization サービスを使用すると、デフォルトの AEM Forms 認証が上書きされるので、FileNet の資格情報を使用して Workbench にログインするように設定する必要があります。
  - AEM Forms リポジトリを使用するには、AEM Forms の上級管理者の資格情報 (デフォルトは administrator と password) を使用して Workbench にログインします。この場合、手順 16 で指定した資格情報は、デフォルトリポジトリにアクセスするためにデフォルトの AEM Forms 認証サービスを使用します。
- 21) アプリケーションサーバーを再起動します。
- 22) 管理コンソールにログインし、**設定／User Management／ドメインの管理**をクリックします。
- 23) 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの一意の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

AEM Forms データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100 文字、2 バイト文字で 50 文字、4 バイト文字で 25 文字です ([管理ヘルプ](#) の「エンタープライズドメインの追加」を参照してください)。
- 24) カスタム認証プロバイダーを追加します。
  - 「認証を追加」をクリックします。
  - 「認証プロバイダー」リストで「カスタム」を選択します。
  - 「IBMFileNetAuthProviderService」を選択し、「OK」をクリックします。
- 25) LDAP 認証プロバイダーを追加します。
  - 「認証を追加」をクリックします。
  - 認証プロバイダーリストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。

## 26) LDAP ディレクトリを追加します。

- 「ディレクトリを追加」をクリックし、「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力して、「次へ」をクリックします。
- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。
- (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDNを取得」を選択します。完了したら、「次へ」をクリックします。
- ユーザー設定を指定し、「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

設定について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックしてください。

## 27) 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

## 28) 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

## 29) 設定／User Management／ユーザーとグループをクリックします。

## 30) LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。

- 1つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
- AEM Forms のロールを1つ以上選択し、「OK」をクリックします。
- 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

## 31) Workbench を起動して、IBM FileNet リポジトリ用の次の資格情報を使用してログインします。

ユーザー名 : [username]@[repository\_name]

Password : [password]

これで、FileNet オブジェクトストアが Workbench の Resources ビューに表示されます。

username@repository name を使用してログインしない場合、Workbench では、手順16で指定したデフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

## 32) (オプション) Connector for IBM FileNet の AEM Forms サンプルをインストールする場合、Samples という名前の FileNet オブジェクトストアを作成してその中にインストールします。

Connector for IBM FileNet を設定したら、FileNet リポジトリを使用した Workbench の機能の設定について、管理ヘルプを参照することをお勧めします。

## 5.10. UNIX および Linux 用の追加のライブラリのインストール

UNIX および Linux システムでは、ConvertPDFservice と XMLFormService にいくつかのシステムライブラリを追加する必要があります。必要なライブラリのリストは、『堅牢化とセキュリティガイド』の「[AEM Forms on JEE UNIX system library dependencies](#)」を参照してください。

## 5.11. Content Repository Connector サービスの設定

デフォルトでは、Content Repository Connector サービスは、<http://localhost:8080/lc/crx/server/> という URL を使用して設定されます。次の手順を実行して、使用する環境に合わせてサービスを構成します。

- 1) AEM Forms Admin UI に、資格情報 administrator/password を使用してログインします。管理 UI のデフォルト URL は [http://\[IP\]:\[Port\]/adminui](http://[IP]:[Port]/adminui) です。
- 2) サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理に移動します。
- 3) 編集のため、Content Repository Connector を検索して開きます。
- 4) 設定タブを開き、Experience Management Server フィールドのデフォルトの URL を、使用する環境の URL に変更します。

### IP

アプリケーションサーバーを実行しているマシンの IP アドレス。

### ポート

AEM Forms が使用しているポート番号。JBoss、WebLogic、WebSphere のデフォルトのポート番号は、それぞれ 8080、8001、9080 です。

## 6. 高度な実稼働環境の設定

ここでは、Output、Forms Standard および PDF Generator モジュールの高度なチューニングについて説明します。この節に記載されている作業は、上級アプリケーションサーバー管理者が実稼働システムに対してのみ行ってください。

### 6.1. Output および Forms のプールサイズの設定

PoolMax の現在のデフォルト値は 4 です。実際に設定する値は、使用環境のハードウェア構成と予想される使用量によって異なります。

最適な使用方法としては、PoolMax の下限を使用可能な CPU コアの数以上に設定し、上限はサーバーの負荷パターンによって決めることをお勧めします。一般的に、上限はサーバー上にある CPU コアの数の 2 倍に設定します。

#### 6.1.1. 既存の PoolMax 値の変更

- 1) テキストエディターを使用して、WebLogic 起動スクリプトを編集します。
- 2) ConvertPdf の以下のプロパティを追加します。
  - com.adobe.convertpdf.bmc.POOL\_MAX=[new value]
  - com.adobe.convertpdf.bmc.MAXIMUM\_REUSE\_COUNT=5000
  - com.adobe.convertpdf.bmc.REPORT\_TIMING\_INFORMATION=true
  - com.adobe.convertpdf.bmc.CT\_ALLOW\_SYSTEM\_FONTS=true
- 3) XMLFM の以下のプロパティを追加します。
  - com.adobe.xmlform.bmc.POOL\_MAX=[new value]
  - com.adobe.xmlform.bmc.MAXIMUM\_REUSE\_COUNT=5000
  - com.adobe.xmlform.bmc.REPORT\_TIMING\_INFORMATION=true
  - com.adobe.xmlform.bmc.CT\_ALLOW\_SYSTEM\_FONTS=true

## 6.2. PDF Generator

PDF Generator では、一部の種類の入力ファイルについて、複数の PDF 変換を同時に実行することができます。これは、ステートレスセッションビーンを使用して実行されます。

### 6.2.1. EJB プールサイズの設定

以下の種類の入力ファイルについて個別のプールサイズを適用するために、4種類のステートレスセッションビーンがあります。

- Adobe PostScript® および Encapsulated PostScript (EPS) ファイル
- 画像ファイル (BMP、TIFF、PNG、JPEG ファイルなど)
- OpenOffice ファイル
- Microsoft Office ファイル、PageMaker® ファイル、FrameMaker® ファイルなど、その他すべての種類のファイル (HTML ファイルを除く)

HTML から PDF への変換時のプールサイズは、ステートレスセッションビーンでは管理されません。

PostScript および EPS ファイルと画像ファイルのデフォルトのプールサイズは 3 に設定され、OpenOffice とその他の種類のファイル (HTML を除く) のデフォルトのプールサイズは 1 に設定されます。

CPU の数や各 CPU 内のコアの数など、使用しているサーバーハードウェア構成に基づいて、PS/EPS と画像のプールサイズを別の値に設定できます。ただし、PDF Generator を正常に機能させるためには、OpenOffice とその他の種類のファイルのプールサイズを 1 のままにする必要があります。

この節では、サポートされるアプリケーションサーバーのそれぞれについて、PS2PDF (PS から PDF への変換) と Image2PDF (画像から PDF への変換) のプールサイズを設定する方法を説明します。

以下の説明は、次の 2 つの JEE 上の AEM Forms アプリケーション EAR ファイルがアプリケーションサーバーにデプロイされていることを前提としています。

- adobe-livelcycle-weblogic.ear
- adobe-livelcycle-native-weblogic-[platform].ear

この [platform] は、オペレーティングシステムに応じて、次のいずれかの文字列に置き換えられます。

- (Windows) x86\_win32
- (Linux) x86\_linux
- (SunOS™) sparc\_sunos

### PS2PDF および Image2PDF のプールサイズの設定

## 6.3. Windows での CIFS の有効化

JEE 上の AEM Forms をホストする Windows Server マシンを手動で設定する必要があります。

注：サーバーには、静的 IP アドレスが必要です。

Windows マシンで、次の作業を行う必要があります。

### 6.3.1. NetBIOS over TCP/IP の有効化

JEE 上の AEM Forms サーバーに接続するクライアントの要求がサーバー ホスト名で解決されるように、NetBIOS over TCP/IP を有効にする必要があります。

- 1) ローカルエリアの接続プロパティダイアログボックスの「全般」タブで、「インターネットプロトコル」を選択して、「プロパティ」をクリックします。
- 2) インターネットプロトコル (TCP/IP) のプロパティダイアログボックスの「全般」タブで、サーバーに静的 IP アドレスがあることを確認します。「詳細設定」をクリックします。
- 3) TCP/IP 詳細設定ダイアログボックスで、「WINS」タブを選択して「NetBIOS over TCP/IP を有効にする」を選択します。

### 6.3.2. 他の IP アドレスの追加

- 1) ローカルエリアの接続プロパティダイアログボックスの「全般」タブで、「インターネットプロトコル」を選択して、「プロパティ」をクリックします。
- 2) インターネットプロトコル (TCP/IP) のプロパティダイアログボックスの「全般」タブで、サーバーに静的 IP アドレスがあることを確認します。「詳細設定」をクリックします。
- 3) TCP/IP 詳細設定ダイアログボックスで、「IP 設定」タブを選択して「追加」をクリックします。
- 4) 静的 IP アドレスを指定して「追加」をクリックします。

### 6.3.3. ファイルとプリンターの共有の無効化 (Windows Server 2008)

- 「ネットワークの設定」に移動し、「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンター共有」の選択を解除して、「適用」をクリックします。

### 6.3.4. ファイルとプリンターの共有の無効化 (Windows Server 2012 のみ)

- コントロールパネル／ネットワークとインターネット／ネットワークと共有センター／共有の詳細設定に移動し、「ファイルとプリンターの共有」をオフにします。

## 7. 付録-コマンドラインインターフェイスを使用したインストール

### 7.1. 概要

JEE上のAEM Formsでは、インストールプログラムにコマンドラインインターフェース (CLI) を提供しています。CLIは、JEE上のAEM Formsの上級ユーザーが使用したり、インストールプログラムのグラフィカルユーザーインターフェイス (GUI) がサポートされていないサーバー環境で使用したりすることを前提としています。CLIはコンソールモードで実行します。1つのインタラクティブセッションで、すべてのインストール操作を行うことができます。

インストールプロセスを開始したら、画面の指示に従ってインストールオプションを選択します。各プロンプトに応答しながらインストールを進めてください。

注：前の手順で選択した内容を変更する場合は、`back`と入力します。`quit`と入力すれば、いつでもインストールをキャンセルできます。

### 7.2. JEE上のAEM Formsのインストール

- 1) コマンドプロンプトを開き、実行可能なインストーラーが含まれるインストールメディアまたはハードディスクのフォルダーに移動します。
    - (Windows) `server\Disk1\InstData\Windows_64\NoVM`
    - (Linux) `server/Disk1/InstData/Linux/NoVM`
    - (Solaris) `server/Disk1/InstData/Solaris/NoVM`
  - 2) コマンドプロンプトを開いて、次のコマンドを実行します。
    - (Windows) `install.exe -i console`
    - (Windows以外) `/install.bin -i console`
- 注：`-i console`オプションを指定せずにコマンドを入力すると、GUIベースのインストーラーが起動します。

- 3) 次の表の説明に従って、プロンプトに応答します。

プロンプト	説明
Choose Locale	インストールで使用するロケールを値1～2を入力して選択します。デフォルト値を選択するには、 <b>Enter</b> キーを押します。 English、または日本語を選択できます。デフォルトのロケールは日本語です。
Choose Install Folder	Destination画面で、 <b>Enter</b> キーを押してデフォルトディレクトリを使用するか、新しいインストールディレクトリの場所を入力します。 ディレクトリ名にアクセント記号付きの文字を使用しないでください。アクセント記号付きの文字を使用すると、CLIによってアクセントが無視され、アクセント記号付きの文字が変更されからディレクトリが作成されます。
JEE 上の AEM Forms サーバー使用許諾契約書	<b>Enter</b> キーを押して、使用許諾契約のページに目を通します。 契約に同意する場合は、Yを入力し、 <b>Enter</b> キーを押します。
Pre-Installation Summary	<b>Enter</b> キーを押すと、選択した内容でインストールが続行します。 前の手順に戻って設定を変更するには、backと入力します。
Ready To Install	<b>Enter</b> キーを押すと、インストールプロセスが開始します。
Installing	インストール中、進行状況バーによりインストールの進行状況が示されます。
Configuration Manager	JEE 上の AEM Forms のインストールを完了するには、 <b>Enter</b> キーを押します。 Configuration Manager を GUI モードで実行するには、次のスクリプトを呼び出します。 (Windows) : C:\Adobe\Adobe_Experience_Manager_Forms\configurationManager\bin\ConfigurationManager.bat (Windows以外) : /opt/adobe/Adobe_Experience_Manager_Forms/configurationManager/bin/ConfigurationManager.sh
Installation Complete	<b>Enter</b> キーを押すと、インストーラーが終了します。

## 7.3. エラーログ

エラーが発生した場合は、次のインストールのログディレクトリでinstall.logを確認できます。

- (Windows) [aem-forms root]\log

## 8. 付録 - Configuration Manager コマンドラインインターフェイス

CLIは、Configuration Managerのグラフィカルユーザーインターフェイス(GUI)がサポートされていないサーバー環境で使用することを前提としています。

### 8.1. 操作の順序

Configuration Manager CLIは、GUIバージョンのConfiguration Managerの操作と同じ順序で実行する必要があります。CLIの操作は以下の順序で実行してください。

- 1) JEE 上の AEM Forms を設定します。
- 2) CRX を設定します。
- 3) 既存の自動インストールデータベースを移行します (自動アップグレードのみ)。
- 4) アプリケーションサーバートポロジを検証します。
- 5) データベース接続を検証します。
- 6) アプリケーションサーバーを設定します。
- 7) アプリケーションサーバーの設定を検証します。
- 8) JEE 上の AEM Forms をデプロイします。
- 9) JEE 上の AEM Forms を初期化します。
- 10) JEE 上の AEM Forms を検証します。
- 11) JEE 上の AEM Forms モジュールをデプロイします。
- 12) JEE 上の AEM Forms モジュールのデプロイメントを検証します。
- 13) PDF Generator のシステム準備設定を確認します。
- 14) PDF Generator 用の管理者ユーザーを追加します。
- 15) Connector for IBM Content Manager を設定します。
- 16) Connector for IBM FileNet を設定します。
- 17) Connector for EMC Documentum を設定します。
- 18) Connector for SharePoint を設定します。

重要: Configuration Manager CLIの操作を完了したら、各クラスターノードを再起動する必要があります。

## 8.2. コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル

Configuration Manager CLIには、JEE上のAEM Forms環境用に定義したプロパティを含むプロパティファイルが必要です。プロパティファイルのテンプレートであるcli\_propertyFile\_template.txtは、[aem-forms root]/configurationManager/binフォルダーにあります。このファイルのコピーを作成して値を編集します。このファイルは、使用するConfiguration Managerの操作に基づいてカスタマイズできます。次の節で、必要なプロパティとその値について説明します。

- プロパティファイルcli\_propertyFile\_template.txtをテンプレートとして使用し、使用するConfiguration Manager操作に基づいて値を編集します。
- Configuration ManagerのGUIを使用し、GUIバージョンによって作成されたプロパティファイルをCLIバージョンのプロパティファイルとして使用します。[aem-forms root]/configurationManager/bin/ConfigurationManager.bat/shファイルを実行すると、userValuesForCLI.propertiesファイルが[aem-forms root]/configurationManager/configディレクトリに作成されます。このファイルをConfiguration Manager CLIの入力として使用できます。

注：ファイルには、以下のオプションのプロパティは含まれていません。必要に応じて、これらのプロパティを手動でファイルに追加してください。

- ApplicationServerRestartRequired
- lcGdsLocation
- lcPrevGdsLocation

注：CLIプロパティファイルでは、Windowsパスのディレクトリ区切り文字(¥)にエスケープ文字(¥)を使用する必要があります。例えば、指定するFontsフォルダーがC:¥Windows¥Fontsである場合、Configuration Manager CLIスクリプトではc:¥¥Windows¥¥Fontsと入力する必要があります。

注：次のモジュールは、ALC-LFS-ContentRepositoryに依存します。cli\_propertyFile\_template.txtをテンプレートとして使用する場合は、ALC-LFS-ContentRepositoryをexcludedSolutionComponentsリストから削除するか、あるいは次のLFSをexcludedSolutionComponentsリストに追加してください。

- ALC-LFS-ProcessManagement
- ALC-LFS-CorrespondenceManagement
- ALC-LFS-ContentRepository
- ALC-LFS-MobileForms
- ALC-LFS\_FormsManager

## 8.3. 一般的な設定プロパティ

### 8.3.1. 共通のプロパティ

共通のプロパティは以下のとおりです。

**WebLogic および WebSphere 固有のプロパティ**：アプリケーションサーバーの設定、JEE 上の AEM Forms のデプロイ、アプリケーションサーバートポロジの検証およびアプリケーションサーバー設定の検証操作に必要です。

**JEE 上の AEM Forms Server 固有のプロパティ**：JEE 上の AEM Forms を初期化し、JEE 上の AEM Forms コンポーネントの操作をデプロイするのに必要です。

以下の操作に必要なプロパティは次の表のとおりです。

- JEE 上の AEM Forms の初期化
- JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイ

プロパティ	値	説明
targetServer.topologyType	server または cluster	JEE 上の AEM Forms をデプロイするアプリケーションサーバートポロジーのタイプ。
targetServer.name	文字列	アプリケーションサーバー(管理サーバー)ノードまたはクラスターに割り当てられた名前。
targetServer.adminHost	文字列 デフォルトはlocalhost です。	Admin サーバーがインストールされているサーバーのホスト名。
targetServer.adminPort	整数値	管理サーバーが SOAP 要求をリスンするポートのポート番号。
targetServer.adminUserID	文字列	アプリケーションサーバーへのアクセスに使用する管理ユーザー ID。
targetServer.adminPassword	文字列	WebLogic 管理ユーザー ID に関連付けられているパスワード。
localServer.appServerRootDir	(Windows) WebLogic <12.2.1 または 12.1.3> C:\Oracle\Middleware\wlserver (Linux、Solaris) WebLogic <12.2.1 または 12.1.3> /opt/Oracle/Middleware/wlserver	ローカルに設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (JEE 上の AEM Forms をデプロイしたり、JEE 上の AEM Forms をデプロイするリモートサーバーと通信するために使用したりするディレクトリ)。
targetServer.appServerRootDir	デフォルト： (Windows) WebLogic <12.2.1 または 12.1.3> C:\Oracle\Middleware\wlserver (Linux、Solaris) WebLogic <12.2.1 または 12.1.3> /opt/Oracle/Middleware/wlserver	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (JEE 上の AEM Forms のデプロイ先となるディレクトリ)。

プロパティ	値	説明
JEE 上の AEM Forms Server 固有のプロパティ		
LCHost	文字列	JEE 上の AEM Forms がデプロイされるサーバーのホスト名。 クラスター デプロイメントの場合、アプリケーション サーバーを実行しているいずれかのクラスター ノードのホスト名。
LCPort	整数値	JEE 上の AEM Forms がデプロイされる Web ポート番号。
excludedSolutionComponents	文字列。次の値がサポートされています。 ALC-LFS-Forms、 ALC-LFS-ConnectorEMCDocumentum、 ALC-LFS-ConnectorIBMFileNet、 ALC-LFS-ConnectorIBMContentManager、 ALC-LFS-DigitalSignatures、 ALC-LFS-DataCapture、 ALC-LFS-Output、 ALC-LFS-PDFGenerator、 ALC-LFS-ProcessManagement、 ALC-LFS-ReaderExtensions、 ALC-LFS-RightsManagement、 ALC-LFS-CorrespondenceManagement、 ALC-LFS-ContentRepository、 ALC-LFS-MobileForms、 ALC-LFS_FormsManager	(オプション) 設定をしない JEE 上の AEM Forms モジュールをリストします。構成対象から除外するモジュールが複数ある場合はコンマで区切ります。
includeCentralMigrationService	true : サービスを含める false : サービスを含めない	Central Migration Bridge Service を含めるまたは除外するためのプロパティ。
CRX Content レポジトリ 次のプロパティは、 cli_propertyFile_ crx_template.txt ファイルで指定されます。	true : false :	
contentRepository.rootDir		CRX レポジトリのパス。
use.crx3.mongo	true : false :	新規インストールを実行する場合、Mongo DB で CRX3 を使用するには値を true に設定します。値が false の場合、CRX3 TAR が設定されます。
mongo.db.uri	<Mongo DB の URI>	Mongo DB を使用している場合は、Mongo DB の URI を設定します
mongo.db.name	<Mongo DB の名前>	Mongo DB を使用している場合は、Mongo DB インスタンスの名前を指定します
use.crx3.rdb.mk	true : false :	このプロパティの値が true の場合、CRX リポジトリを RDB MK で設定します。デフォルト値は false です。この場合、リポジトリは CRX3 TAR に設定されます。

### 8.3.2. JEE 上の AEM Forms プロパティの設定

これらのプロパティは、JEE 上の AEM Forms の操作の設定にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
AdobeFontsDir	文字列	Adobe サーバーフォントディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。 このパスは、デプロイ先のすべてのクラスターノードからアクセスできるようにする必要があります。
customerFontsDir	文字列	カスタマーフォントディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。 このパスは、デプロイ先のすべてのクラスターノードからアクセスできるようにする必要があります。
systemFontsDir	文字列	システムフォントディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。 このパスは、デプロイ先のすべてのクラスターノードからアクセスできるようにする必要があります。
LCTempDir	文字列	一時ディレクトリの場所。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。 このパスは、デプロイ先のすべてのクラスターノードからアクセスできるようにする必要があります。
LCGlobalDocStorageDir	文字列	グローバルドキュメントストレージのルートディレクトリ。 長期間有効なドキュメントを保存したり、それらをすべてのクラスターノードで共有したりするために使用する、NFS 共有ディレクトリのパスを指定します。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。 このパスは、デプロイ先のすべてのクラスターノードからアクセスできるようにする必要があります。
EnableDocumentDBStorage	true または false デフォルト:false	永続ドキュメントについて、データベースへのドキュメントの保存を有効または無効にします。 データベースへのドキュメントの保存を有効にしても、GDS のファイルシステムディレクトリは必要です。

### 8.3.3. アプリケーションサーバーの設定および検証のプロパティ

#### WebLogicの設定および検証のプロパティ

Configuration Manager では、必要に応じて、WebLogic アプリケーションサーバーを JEE 上の AEM Forms で設定および検証できます。

以下の操作に適用されるプロパティは次の表のとおりです。

- アプリケーションサーバーの構成
- アプリケーションサーバートポロジの検証
- アプリケーションサーバー構成の検証
- データベース接続の検証

#### アプリケーションサーバーのプロパティ

プロパティ	値	説明
アプリケーションサーバー固有のプロパティセクションを設定する必要があります。詳しくは、「 <a href="#">共通のプロパティ</a> 」を参照してください。		
jvm.initialHeapSize	デフォルト： 256	JVM の初期ヒープサイズ (MB)。
jvm.maxHeapSize	デフォルト： 4096	JVM の最大ヒープサイズ (MB)。
WebLogic および WebSphere クラスターのみ		
cache.useUDP	true	JEE 上の AEM Forms でキャッシュの実装に UDP を使用する場合は、値を <code>true</code> に設定してください。 JEE 上の AEM Forms でキャッシュの実装に TCP を使用する場合は、値を <code>false</code> 設定してください。
cache.udp.port	デフォルト： 33456	プライマリコンピューターが UDP ベースのキャッシュ通信に使用するポート番号。 <code>cache.useUDP=true</code> の場合にのみ設定します。
cache.tcpip.primaryhost	文字列	プライマリアプリケーションサーバーがインストールされているコンピューターのホスト名。 <code>cache.useUDP!=true</code> の場合にのみ設定します。
cache.tcpip.primaryport	デフォルト： 22345	プライマリアプリケーションサーバーコンピューターが TCP ベースのキャッシュ通信に使用するポートのポート番号。 <code>cache.useUDP!=true</code> の場合にのみ設定します。

プロパティ	値	説明
cache.tcpip.secondaryhost	文字列	セカンダリーアプリケーションサーバーがインストールされているコンピューターのホスト名。 cache.useUDP!=trueの場合にのみ設定します。
cache.tcpip.secondaryport	デフォルト： 22345	セカンダリーアプリケーションサーバーコンピューターがTCPベースのキャッシュ通信に使用するポートのポート番号。 cache.useUDP!=trueの場合にのみ設定します。
WebLogic サーバーのコアクラスパス構成		
classpath.targetServer.javaHome	文字列	ターゲットアプリケーションサーバーの構成では、ターゲットアプリケーションサーバーの実行で使用する Java Home の場所を指定する必要があります。 このパスは、構成するサーバーからアクセスできる必要があります。 このパスは、設定するすべてのクラスターノードからアクセスできるようにする必要があります。
classpath.targetServer.pop3JarPath	文字列	ターゲットアプリケーションサーバーがアクセスできる Pop3 JAR ファイルのパス。このパスは、構成するサーバーからアクセスできる必要があります。
データソース構成		
datasource.dbType	選択： • oracle • db2 • sqlserver	JEE 上の AEM Forms で使用するために設定されるデータベースのタイプ。
datasource.dbName	文字列	データベースの名前。
datasource.dbHost	文字列	データベースがあるサーバーのホスト名または IP アドレス。
datasource.dbPort	整数値	データベースと通信するときに JEE 上の AEM Forms が使用するデータベースポート。
datasource.dbUser	文字列	データベースにアクセスするときに JEE 上の AEM Forms が使用するユーザー ID。
datasource.dbPassword	文字列	データベースユーザー ID に関連付けられているパスワード。
datasource.target.driverPath	文字列	アプリケーションサーバーの lib ディレクトリ内の JDBC ドライバー。 このパスは、設定するサーバーからアクセスできる、有効なパスである必要があります。 このパスは、設定するすべてのクラスターノードからアクセスできる、有効なパスである必要があります。
datasource.local.driverPath	文字列	ローカル JDBC ドライバー。この値は、直接データベース接続のテストにのみ使用します。

### 8.3.4. JEE 上の AEM Forms プロパティのデプロイ

これらの JEE 上の AEM Forms プロパティのデプロイは、JEE 上の AEM Forms のデプロイの設定にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
詳しくは、「 <a href="#">共通のプロパティ</a> 」を参照してください。		
deployment.includeIVS	false	IVS EAR ファイルをデプロイメントに含めるかどうかを指定します。IVS EAR ファイルは実稼働環境に含めないようにすることをお勧めします。

### 8.3.5. JEE 上の AEM Forms プロパティの初期化

これらの JEE 上の AEM Forms プロパティの初期化は、JEE 上の AEM Forms の初期化の設定にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
詳しくは、「 <a href="#">共通のプロパティ</a> 」を参照してください。		

### 8.3.6. JEE 上の AEM Forms コンポーネントプロパティのデプロイ

以下の操作に適用されるプロパティは次の表のとおりです。

- JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイ
- JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイメントの検証
- JEE 上の AEM Forms Server の検証

プロパティ	値	説明
JEE 上の AEM Forms Server 情報セクションを設定する必要があります。詳しくは、「 <a href="#">共通のプロパティ</a> 」を参照してください		
LCAdminUserID	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てられるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てられるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。

### 8.3.7. PDF Generator 用の管理者ユーザーの追加

以下のプロパティは、PDF Generator 用の管理者ユーザーを追加する場合にのみ適用されます。これらのプロパティは、cli\_propertyFile\_pcfg\_template.txt にあります。

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	JEE 上の AEM Forms がインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	JEE 上の AEM Forms アプリケーションサーバーが構成されるポート番号。
LCAdminUserID	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てられるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てられるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCServerMachineAdminUser	文字列	JEE 上の AEM Forms をホストする運用システムの管理者ユーザーのユーザー ID。
LCServerMachineAdminUserPasswd	文字列	JEE 上の AEM Forms をホストする運用システムの管理者ユーザーのパスワード。

### 8.3.8. Connector for IBM Content Manager の設定

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	JEE 上の AEM Forms がインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	JEE 上の AEM Forms アプリケーションサーバーが構成されるポート番号。
LCAdminUserID	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てられるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てられるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (JEE 上の AEM Forms のデプロイ先となるディレクトリ)
ConfigureIBCMC	true または false	Connector for IBM Content Manager を設定するには、true を指定します。
IBCMCClientPathDirectory	文字列	IBM Content Manager クライアントのインストールディレクトリの場所。

プロパティ	値	説明
DataStoreName	文字列	接続する IBM Content Manager サーバーのデータストアの名前。
IBMCUsername	文字列	IBM Content Manager 管理者ユーザーに割り当てるユーザー名。このユーザー ID は、IBM Content Manager へのログインに使用されます。
IBMCPassword	文字列	IBM Content Manager 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、IBM Content Manager へのログインに使用されます。
ConnectionString	文字列	IBM Content Manager に接続するための接続文字列内に使用される追加の引数 (オプション)。

### 8.3.9. Connector for IBM FileNet の設定

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	JEE 上の AEM Forms サーバーがインストールされるマシンのホスト名。
LCPort	整数値	JEE 上の AEM Forms アプリケーションサーバーが構成されるポート番号。
LCAdminUserID	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (JEE 上の AEM Forms のデプロイ先となるディレクトリ)。
ConfigureFilenetCE	true または false	Connector for IBM Filenet を設定するには、true を指定します。
FilenetConfigureCEVersion	文字列	設定する FileNet クライアントのバージョン。FilenetClientVersion5.0 または FilenetClientVersion5.2 を指定します。
FilenetCEClientPathDirectory	文字列	IBM Filenet Content Manager クライアントのインストールディレクトリの場所。
ContentEngineName	文字列	IBM Filenet Content Engine がインストールされているマシンのホスト名または IP アドレス
ContentEnginePort	文字列	IBM Filenet Content Engine が使用するポート番号。
CredentialProtectionSchema	CLEAR または SYMMETRIC	保護のレベルを指定します。

プロパティ	値	説明
EncryptionFileLocation	文字列	暗号化ファイルの場所。これは、CredentialProtectionSchema属性に対して SYMMETRIC オプションを選択した場合にのみ必要です。パス区切り文字には、スラッシュ (/) または二重の円記号 (\\\) を使用します。
DefaultObjectStore	文字列	Connector for IBM Filenet Content Server のオブジェクトストアの名前。
FilenetContentEngineUsername	文字列	IBM Filenet Content Server に接続するためのユーザー ID。読み取りアクセス権限を持つユーザー ID では、デフォルトのオブジェクトストアへの接続が許可されます。
FilenetContentEnginePassword	文字列	IBM FileNet ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、デフォルトのオブジェクトストアに接続する際に使用されます。
ConfigureFilenetPE	true または false	Connector for IBM FileNet を設定するには、true を指定します。
FilenetPEClientPathDirectory	文字列	IBM FileNet クライアントのインストールディレクトリの場所。
FilenetProcessEngineHostname	文字列	プロセスルーターのホスト名または IP アドレス。
FilenetProcessEnginePortNumber	整数値	IBM FileNet Content Server のポート番号。
FilenetPERouterURLConnectionPoint	文字列	プロセスルーターの名前。
FilenetProcessEngineUsername	文字列	IBM FileNet Content Server に接続するためのユーザー ID。
FilenetProcessEnginePassword	文字列	IBM FileNet Content Server に接続するためのパスワード。

### 8.3.10. Connector for EMC Documentum の設定

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	JEE 上の AEM Forms サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	JEE 上の AEM Forms アプリケーションサーバーが構成されるポート番号。
LCAdminUserID	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (JEE 上の AEM Forms のデプロイ先となるディレクトリ)。
ConfigureDocumentum	true または false	Connector for EMC Documentum を設定するには、true を指定します。

プロパティ	値	説明
DocumentumClientVersion	文字列	設定する EMC Documentum クライアントのバージョン。 DocumentumClientVersion7.0 または DocumentumClientVersion6.7 を指定します。
DocumentumClientPathDirectory	文字列	EMC Documentum クライアントのインストールディレクトリの場所。
ConnectionBrokerHostName	文字列	EMC Documentum Content Server のホスト名または IP アドレス。
ConnectionBrokerPortNumber	文字列	EMC Documentum Content Server のポート番号。
DocumentumUsername	文字列	EMC Documentum Content Server に接続するためのユーザー ID。
DocumentumPassword	文字列	EMC Documentum Content Server に接続するためのパスワード。
DocumentumDefaultRepositoryName	文字列	MC Documentum Content Server のデフォルトリポジトリの名前。

### 8.3.11. Connector for Microsoft SharePoint の設定

プロパティ	値	説明
LCHost	文字列	JEE 上の AEM Forms サーバーがインストールされるホスト名。
LCPort	整数値	JEE 上の AEM Forms アプリケーションサーバーが構成されるポート番号。
LCAdminUserID	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てられるユーザー ID。このユーザー ID は、Administration Console へのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	JEE 上の AEM Forms 管理者ユーザーに割り当てられるパスワード。このパスワードは、Administration Console へのログオンに使用されます。
CDVTopology.appserverrootdir	文字列	リモートサーバー上に設定するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (JEE 上の AEM Forms のデプロイ先となるディレクトリ)。
ConfigureSharePoint	true または false	Connector for Microsoft SharePoint を設定するには、true を指定します。
SharePointServerAddress	文字列	SharePoint Server のホスト名または IP アドレス
SharePointUsername	文字列	SharePoint Server に接続するためのユーザー ID。
SharePointPassword	文字列	SharePoint Server に接続するためのパスワード。
SharePointDomain	文字列	SharePoint Server のドメイン名。
ConnectionString	文字列	SharePoint Server に接続するための接続文字列内に使用される追加の引数 (オプション)。

### 8.3.12. コマンドラインインターフェイスの使用

プロパティファイルを設定したら、[AEM Forms on JEE root]/configurationManager/bin フォルダーに移動する必要があります。

Configuration Manager CLI のコマンドの詳細な説明を表示するには、ConfigurationManagerCLI help <command name> と入力します。

#### JEE 上の AEM Forms の設定 CLI の使用

JEE 上の AEM Forms の操作の設定では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureLiveCycle -f <propertyFile>
```

場所：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「[コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル](#)」を参照してください。

#### CRX CLI の使用の設定

CRX リポジトリの設定では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureCRXRepository -f <propertyFile>
```

#### アプリケーションサーバートポロジの検証 CLI の使用

アプリケーションサーバートポロジの検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateApplicationServerTopology -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

場所：

- -targetServer\_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

#### データベース接続の検証 CLI の使用

データベース接続の検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateDBConnectivity -f <propertyFile> -datasource_dbPassword <password>
```

場所：

- -datasource\_dbPassword <password> : コマンドラインでデータベースユーザーパスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの datasource.dbPassword プロパティが上書きされます。

## アプリケーションサーバーの設定 CLI の使用

アプリケーションサーバーの設定操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureApplicationServer -targetServer_AdminPassword <password>-f <propertyFile>
[-skip <configurationsToSkipList>]
```

場所：

- -targetServer\_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer\_AdminPassword プロパティが上書きされます。
- -skip <configurationsToSkipList> : 構成しないアプリケーションサーバーコンポーネントを指定できるオプションのパラメーターです。構成対象から除外するコンポーネントが複数ある場合はコンマで区切ります。有効なオプションは、Datasource および Core です。

## アプリケーションサーバー設定の検証 CLI の使用

アプリケーションサーバー構成の検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateApplicationServerConfigurations -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

場所：

- -targetServer\_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

## (WebSphere および Weblogic のみ) JEE 上の AEM Forms デプロイ CLI の使用

JEE 上の AEM Forms のデプロイの操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
deployLiveCycle -f <propertyFile>
```

**重要：**JEE 上の AEM Forms のデプロイの操作を完了したら、アプリケーションサーバーを再起動する必要があります。

## JEE 上の AEM Forms 初期化 CLI の使用

JEE 上の AEM Forms の初期化の操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
initializeLiveCycle -f <propertyFile>
```

## JEE 上の AEM Forms Server の検証 CLI の使用

JEE 上の AEM Forms の検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleServer -f <propertyFile> -LCAdminPassword <password>
```

場所：

- -LCAdminPassword <password> : コマンドライン上で管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

### JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイ CLI の使用

JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイの操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
deployLiveCycleComponents -f <propertyFile> -LCAdminPassword <password>
```

### JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイメントの検証 CLI の使用

JEE 上の AEM Forms コンポーネントのデプロイメントの検証操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleComponentDeployment -f <propertyFile> -LCAdminPassword <password>
```

### PDF Generator のシステム準備設定の確認

PDF Generator のシステム準備設定の確認操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
pd़fg-checkSystemReadiness
```

### PDF Generator の管理者ユーザーの追加

PDF Generator の管理者ユーザーの追加操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
pd़fg-addAdminUser -f <propertyFile>
```

場所：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、「[コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル](#)」を参照してください。

### Connector for IBM Content Manager の設定

Connector for IBM Content Manager の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
IBMCM-configurationCLI -f <propertyFile>
```

重要：[aem-forms root]\configurationManager\bin\ ディレクトリにある cli\_propertyFile\_ecm\_ibmcm\_template.txt という名前の <propertyFile> を修正します。

- 1) [aem-forms root]\configurationManager\configure-ecm\weblogic の adobe-component-ext.properties ファイルを次の [appserver root]\users\_projects\domain\[appserverdomain] ディレクトリにコピーします。
  - 2) アプリケーションサーバーを再起動します。
  - 3) 管理コンソールから以下のサービスを開始します。
- IBMCMAuthProviderService
  - IBMCMConnectorService

## Connector for IBM FileNet の設定

Connector for IBM FileNet の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

filenet-configurationCLI -f <propertyFile>

**重要：**[aem-forms root]\configurationManager\bin\ ディレクトリにある cli\_propertyFile\_ecm\_filenet\_template.txt という名前の <propertyFile> を修正します。

Connector for IBM Content Manager の設定を完了するには、次の手順を手動で実行してください。

- 1) [aem-forms root]/configurationManager/configure-ecm/weblogic の adobe-component-ext.properties ファイルを次の [appserver root]/users\_projects/domain/[appserverdomain] ディレクトリにコピーします。
- 2) カスタム JAAS ファイルをデプロイメントで使用する場合、カスタム JAAS ファイルを探し、そのファイルに [aem-forms root]/configurationManager/configure-ecm/weblogic ディレクトリにある jaas.conf.WSI ファイルの内容を追加します。そうしない場合は、jaas.conf.WSI ファイルの場所を WebLogic Server の start コマンドに次の Java オプションとして追加します

```
-Djava.security.auth.login.config=[aem-forms root]/configurationManager/
configure-ecm/weblogic/jaas.conf.WSI.
```

- 3) アプリケーションサーバーを再起動します。
- 4) 管理コンソールから以下のサービスを開始します。
  - IBMFileNetAuthProviderService
  - IBMFileNetContentRepositoryConnector
  - IBMFileNetRepositoryProvider
  - IBMFileNetProcessEngineConnector (設定されている場合)

## Connector for EMC Documentum の設定

Connector for EMC Documentum の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

documentum-configurationCLI -f <propertyFile>

**重要：**[aem-forms root]\configurationManager\bin\ ディレクトリにある cli\_propertyFile\_ecm\_documentum\_template.txt という名前の <propertyFile> を修正します。

Connector for EMC Documentum の設定を完了するには、次の手順を手動で実行してください。

- 1) [aem-forms root]/configurationManager/configure-ecm/weblogic の adobe-component-ext.properties ファイルを次の [appserver root]/users\_projects/domain/[appserverdomain] ディレクトリにコピーします。
- 2) アプリケーションサーバーを再起動します。
- 3) 管理コンソールから以下のサービスを開始します。
  - EMCDocumentumAuthProviderService
  - EMCDocumentumRepositoryProvider
  - EMCDocumentumContentRepositoryConnector

### Connector for Microsoft SharePoint の設定

Connector for Microsoft SharePoint の設定操作（オプション）では、次の構文を使用する必要があります。

```
sharepoint-configurationCLI -f <propertyFile>
```

場所：

重要：[aem-forms root]\configurationManager\bin\ ディレクトリにある cli\_propertyFile\_ecm\_sharepoint\_template.txt という名前の <propertyFile> を修正します。

## 8.4. 使用例

C:\Adobe\Adobe\_Experience\_Manager\_Forms\configurationManager\bin から、次のように入力します。

```
ConfigurationManagerCLI configureLiveCycle -f cli_propertyFile.txt
```

cli\_propertyFile.txt には、作成済みのプロパティファイルの名前を指定します。

## 8.5. Configuration Manager CLI のログ

エラーが発生した場合は、[aem-forms root]\configurationManager\log フォルダーにある CLI ログで確認できます。生成されるログファイルには、命名規則に基づいて lcmCLI.0.log のような名前が付けられます。ファイル名の数字（ここでは 0）は、ログファイルがロールオーバーされるたびに増加します。

## 8.6. 次の手順

Configuration Manager CLI を使用して JEE 上の AEM Forms を設定およびデプロイした場合は、次のタスクを実行します。

- デプロイメント後の設定を行います

## 9. 付録 - WebLogic Server の手動設定

注: ここでは、JEE 上の AEM Forms のアプリケーションサーバーを手動で設定する方法について説明します。Configuration Manager には、これらの手順を自動で実行するためのオプションが用意されています。このオプションの選択を解除した場合は、この付録で説明する手順を実行する必要があります。

アプリケーションサーバーを自動的に設定する方法については、「JEE 上の AEM Forms の設定とデプロイ」を参照してください。

ここでは、WebLogic 管理サーバー、Node Manager および管理対象サーバーを既に起動していることを前提としています。

### 9.1. サーブレットコンテナ用の認証資格情報の設定

ここで、サーブレットコンテナ用に認証資格情報を設定する必要があります。

#### 9.1.1. サーブレットコンテナ認証を変更するには

- 1) WebLogic 管理サーバーは、クラスターの管理サーバー上で実行してください。
- 2) コマンドプロンプトを開き、次のスクリプトを実行して環境を設定し、WebLogic スクリプトツールを起動します。
  - (Windows) [appserver root]\common\bin\wlst.cmd
  - (Linux、UNIX) [appserver root]/common/bin/wlst.sh
- 3) WLST で以下のコマンドを入力し、サーブレットコンテナの認証を更新します。

```
connect('[WebLogic username]', '[WebLogic password]', '[WebLogic URL]')
edit()
startEdit()
cd('SecurityConfiguration')
cd('[' + domain_name + ']')
set('EnforceValidBasicAuthCredentials', 'false')
activate()
exit()
```

注: WebLogic URL は、t3://hostname:[port] の形式で指定します。[port] のデフォルト値は 7001 です。

- 4) WebLogic 管理サーバーを再起動します。

## 9.2. クラスパスおよびサーバー起動引数の変更

JEE 上の AEM Forms では、データベースの JDBC ドライバー、および電子メールサポート用の pop3 JAR ファイルを、WebLogic Server 用に正しく設定する必要があります。

注：(MySQL のみ) <http://dev.mysql.com/downloads/connector/j/> から、mysql-connector-java-5.1.14-bin.jar ドライバーをダウンロードしてください。

### 9.2.1. 管理対象サーバーのクラスパスの変更

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールにアクセスします。ここで、[port] は、安全ではないリスニングポートです。デフォルトでは、このポート番号は **7001** です。
- 2) ログイン画面で、WebLogic ユーザー名とパスワードを入力して「**Log In**」をクリックします。
- 3) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、**Environment / Servers** をクリックし、右側のウィンドウで、管理対象サーバー名をクリックします。
- 5) サーバーの設定ウィンドウで、「**Configuration**」タブ／「**Server Start**」タブをクリックします。
- 6) 「**Class Path**」ボックスに、以下の順序で JAR ファイルの場所とファイル名を入力します。
  - pop3.jar
  - weblogic.jar (WebLogic Server JAR ファイル)
  - tools.jar (WebLogic Server JAR ファイル)
  - データベース用の JDBC ドライバーファイル (ojdbc6.jar など)

例えば、WebLogic 12.1.3 を使用している Windows 環境では次のように入力します。

```
C:\Adobe\Adobe_Experience_Manager_Forms\lib\weblogic\pop3.jar;[WL_HOME]\wlserver_12.1\server\lib\weblogic.jar;C:\Program Files\Java\jdk1.8\lib\tools.jar;C:\Adobe\Adobe_Experience_Manager_Forms\lib\db\ojdbc6.jar
```

例えば、WebLogic 12.1.1 を使用している UNIX 環境では次のように入力します。

```
opt/adobe/Adobe_Experience_Manager_Forms/lib/weblogic/pop3.jar:[WL_HOME]/wlserver_12.1.1/server/lib/weblogic.jar:/opt/jrvt-4.0.0-1.6.0/lib/tools.jar:opt/adobe/Adobe_Experience_Manager_Forms/lib/db/ojdbc6.jar
```

注：上記の例では、Oracle JDBC ドライバーファイルを指定します。別のデータベースを使用している場合は、そのデータベースに合わせてこの JAR ファイルを指定します。

- 7) 「Arguments」 ボックスに、以下の引数をスペースで区切って入力します。

```
-Dadobeidp.RootDirectory=[WL_HOME]\user_projects\domains\DomainLC
-Dfile.encoding=utf8
-Djava.net.preferIPv4Stack=true
-Djava.security.policy=[WL_Home]\server\lib\weblogic.policy
-DentityExpansionLimit=10000
```

IPv6を使用している場合は、- Djava.net.preferIPv4Stack=trueを、- Djava.net.preferIPv6Stack=trueに置き換えてください。

[WL\_Home] は、次の例のように、WebLogic ホームディレクトリに置き換えてください。

Djava.security.policy=/opt/Oracle/Middleware/weblogic12.1/server/lib/weblogic.policy

[AppServerdomain] は、次の例のように、ドメインディレクトリに置き換えてください。

-Dadobeidp.RootDirectory=/opt/Oracle/Middleware/user\_projects/domains/base\_domain/

- 8) 「Save」 をクリックし、「Activate Changes」 をクリックします。

### 9.3. WebLogic Server スタックスレッドタイムアウトの増加

デプロイ方法によっては、JEE 上の AEM Forms EAR ファイルが大きくなる可能性があります。EAR ファイルのデプロイメントタイムアウトを回避するには、WebLogic Server スタックスレッドタイムアウトの最大値を増やす必要があります。この値は、WebLogic 管理サーバーが長時間実行中のスレッドをアクティブなままとして扱う時間です。このしきい値に達した後、WebLogic Server はこのスレッドを削除しようとします。

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。
- 3) Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、**Environment / Servers** をクリックし、右側のウィンドウで、管理対象サーバー名をクリックします。
- 5) 「Configuration」タブで、「Tuning」タブをクリックします。
- 6) 「Stuck Thread Max Time」ボックスに 1200 と入力し、「Save」をクリックします。
- 7) 「Domain Structure」で、ドメインの名前をクリックします。
- 8) 「Configuration」タブで、「JTA」タブをクリックします。
- 9) 「Timeout Seconds」ボックスに 300 と入力します。
- 10) 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

## 9.4. Solaris の管理対象サーバーの開始引数の設定

WebLogic Server を手動で設定する場合、Solaris では、管理対象サーバーで 64 ビット機能を使用するために追加のサーバー開始引数が必要です。この設定を変更しないと、Sun JDK では既定で 32 ビットしかサポートされません。

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Login**」をクリックします。
- 3) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、**Environment / Servers** をクリックし、右側のウィンドウで、管理対象サーバー名をクリックします。
- 5) 「**Configuration**」タブ／「**Server Start**」タブをクリックします。
- 6) 「**Arguments**」ボックスで、現在の内容の末尾に `-d64` を付加します。
- 7) 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 8) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

## 9.5. JVM 引数の設定

### 9.5.1. 管理対象サーバーで JVM でのメモリ割り当ての増加

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Login**」をクリックします。
- 3) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、**Environment / Servers** をクリックし、右側のウィンドウで、管理対象サーバー名をクリックします。
- 5) 次の画面で、「**Configuration**」タブ／「**Server Start**」タブをクリックします。
- 6) 「**Arguments**」ボックスで、現在の内容の末尾に次の情報を付加します。
  - (64 ビット JVM を使用する Solaris) `-Xms256m -Xmx1792m -XX:MaxPermSize=1024m`  
注 : Solaris でのみ、MaxPermSize パラメータの設定が必要です。
  - (Windows、Linux 64 ビット) 行 `WLS_MEM_ARGS_64BIT=-Xms256m -Xmx512m` を検索し、`WLS_MEM_ARGS_64BIT=-Xms256m -Xmx4096m-Xms256m -Xmx1792m` で置き換えます。  
また、行 `-XX:MaxPermSize=256m` を検索し、`XX:MaxPermSize=1536m` で置き換えます。
- 7) 「**Arguments**」ボックスに、以下の JVM 引数を追加します。

8) アプリケーションサーバーがサービス拒否攻撃を受けないようにするには、次のJVM引数を追加します。

-DentityExpansionLimit=10000

9) 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

10) WebLogic管理対象サーバーを再起動します。

注: Correspondence Management Solutionをインストールする場合、最大ヒープサイズを4096 (4 GB) に設定することをお勧めします。

## 9.6. データベース接続の設定

ここでは、JEE上のAEM Formsデータベース用のJDBCデータソースを設定する方法について説明します。

### 9.6.1. Oracle データベース接続の設定

WebLogic ServerおよびJEE上のAEM formsデプロイメントでOracle 11gまたは12cデータベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定してWebLogic Serverのデータベース接続を作成する必要があります。

#### Oracle用の新しいデータソースの作成

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。
- 3) Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で **Services / Data Sources** をクリックして、右側のウィンドウで「New」をクリックし、ドロップダウンメニューから「Generic Data Source」を選択します。
- 5) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「Name」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - 「JNDI name」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - 「Database Type」リストで「Oracle」を選択し、「Next」をクリックします。
- 6) 次の画面で、「Database Driver」リストから **Oracle's Driver (Thin) for Instance Connections; Versions: 9.0.1** 以降を選択し、「Next」をクリックします。  
(Oracle RACのみ) 「Database Driver」リストから **Oracle's Driver (Thin) for RAC Service-Instance Connections; Versions: 10** 以降を選択し、「Next」をクリックします。
- 7) 「Supports Global Transactions」と「Emulate Two-Phase Commit」を選択します。

- 8) 「Next」をクリックし、JEE 上の AEM Forms のインストールの準備で作成した Oracle データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : Oracle を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトの値は 1521 です。

**Service Name** : Oracle データベースに作成したユーザーの名前。

- 9) 「次へ」をクリックします。

(Oracle RAC のみ) Enter database specific properties for the datasource ウィンドウで、「URL」フィールドに次の接続 URL を入力します。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ENABLE=broken)
(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost1)
(PORT=1521)) (ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost2) (PORT=1521))
(LOAD_BALANCE=on) (FAILOVER=on))
(CONNECT_DATA=(SERVER=dedicated) (SERVICE_NAME=service.yourcompany.com)
FAILOVER_MODE=(TYPE=session) (METHOD=basic)
(RETRIES=10) (DELAY=3)))
```

注：プラグ可能なデータベースを使用している場合は、<port> の後にあるコロン (:) をスラッシュ (/) で置き換えてください。

- 10) 「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 11) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「Finish」をクリックします。

### Oracle 用の新しい AEM\_DS データソースの作成

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。
- 3) Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で **Services / Data Sources** をクリックして、右側のウィンドウで「New」をクリックし、ドロップダウンメニューから「Generic Data Source」を選択します。
- 5) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「Name」ボックスに「AEM\_DS」と入力します。
  - 「JNDI name」ボックスに「AEM\_DS」と入力します。
  - 「Database Type」リストで「Oracle」を選択し、「Next」をクリックします。

- 6) 次の画面で、「Database Driver」リストから **Oracle's Driver (Thin) for Instance Connections; Versions: 9.0.1** 以降を選択し、「Next」をクリックします。

(Oracle RACのみ) 「Database Driver」リストから **Oracle's Driver (Thin) for RAC Service-Instance Connections; Versions: 10** 以降を選択し、「Next」をクリックします。

- 7) 「Supports Global Transactions」と「Emulate Two-Phase Commit」を選択します。

- 8) 「Next」をクリックし、JEE 上の AEM Forms のインストールの準備で作成した Oracle データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : Oracle を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトの値は 1521 です。

**Service Name** : Oracle データベースに作成したユーザーの名前。

- 9) 「次へ」をクリックします。

(Oracle RACのみ) Enter database specific properties for the datasource ウィンドウで、「URL」フィールドに次の接続 URL を入力します。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ENABLE=broken)
(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost1)
(PORT=1521)) (ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost2) (PORT=1521)))
(LOAD_BALANCE=on) (FAILOVER=on))
(CONNECT_DATA=(SERVER=dedicated) (SERVICE_NAME=service.yourcompany.com)
FAILOVER_MODE=(TYPE=session) (METHOD=basic)
(RETRIES=10) (DELAY=3)))
```

注：プラグ可能なデータベースを使用している場合は、<port> の後にあるコロン (:) をスラッシュ (/) で置き換えてください。

- 10) 「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 11) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「Finish」をクリックします。

## 接続プールの設定

- 「Domain Structure」で **Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「**AEM\_DS**」をクリックします。
- 次の画面で、「**Configuration**」タブをクリックし、「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

## Oracle用の新しいデータソースの作成

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で **Services / Data Sources** をクリックして、右側のウィンドウで「**New**」をクリックし、ドロップダウンメニューから「**Generic Data Source**」を選択します。
- 5) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - 「**JNDI name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - 「**Database Type**」リストで「**Oracle**」を選択し、「**Next**」をクリックします。
- 6) 次の画面で、「**Database Driver**」リストから **Oracle's Driver (Thin) for Instance Connections; Versions: 9.0.1** 以降を選択し、「**Next**」をクリックします。

(Oracle RAC のみ) 「**Database Driver**」リストから **Oracle's Driver (Thin) for RAC Service-Instance Connections; Versions: 10** 以降を選択し、「**Next**」をクリックします。

- 7) 「**Supports Global Transactions**」と「**Emulate Two-Phase Commit**」を選択します。
- 8) 「**Next**」をクリックし、JEE 上の AEM Forms のインストールの準備で作成した Oracle データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : Oracle を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトの値は 1521 です。

**Service Name** : Oracle データベースに作成したユーザーの名前。

- 9) 「次へ」をクリックします。

(Oracle RAC のみ) Enter database specific properties for the datasource ウィンドウで、「**URL**」フィールドに次の接続 URL を入力します。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ENABLE=broken)
(ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost1)
(PORT=1521)) (ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost2) (PORT=1521))
(LOAD_BALANCE=on) (FAILOVER=on))
(CONNECT_DATA=(SERVER=dedicated) (SERVICE_NAME=service.yourcompany.com)
FAILOVER_MODE=(TYPE=session) (METHOD=basic)
(RETRIES=10) (DELAY=3)))
```

注：プラグ可能なデータベースを使用している場合は、<port>の後にあるコロン (:) をスラッシュ (/) で置き換えてください。

- 10) 「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 11) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「Finish」をクリックします。

## 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP\_DS**」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「**Configuration**」タブをクリックし、「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3) 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 4) 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 5) 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

## WebLogic 10g 上の Rights Management に使用する Oracle 用の新しいデータソースの作成

注：この手順は、Rights Management がインストール済みの場合にのみ該当します。

- 1) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 2) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 3) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Name**」ボックスに、RM\_DS と入力します。
  - 「**JNDI name**」ボックスに EDC\_DS と入力します。
  - 「**Database Type**」リストで「**Oracle**」を選択します。
  - 「**Database Driver**」リストで、「**Oracle's Driver (Thin); Versions: 9.0.1,9.2.0,10**」を選択します。
- 4) 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**One-Phase Commit**」を選択します。
- 5) 「**Next**」をクリックし、JEE 上の AEM Forms のインストールの準備で作成した Oracle データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name**：作成したデータベースの名前。

**Host Name**：Oracle を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port**：データベースのポート。デフォルトの値は 1521 です。

**Database User Name**：Oracle データベースに作成したユーザーの名前。

**Password** と **Confirm Password**：ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 6) 「Next」をクリックし、「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 7) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「Finish」をクリックします。

## 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで「**RM\_DS**」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「**Configuration**」タブ／「**Connection Pool**」タブをクリックし、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Initial Capacity**」ボックスに 1 と入力します。
  - 「**Maximum Capacity**」ボックスに 20 と入力します。
  - 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 3) 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 4) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

### 9.6.2. MySQL データベース接続の設定

WebLogic Server および JEE 上の AEM Forms デプロイメントで手動インストールした MySQL データベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

#### MySQL 用の新しいデータソースの作成

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 5) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - 「**JNDI name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - 「**Database Type**」リストで「**MySQL**」を選択し、「Next」をクリックします。
  - 「**Database Driver**」リストで、「**MySQL's Driver (Type 4) Versions:using com.mysql.jdbc.Driver**」を選択します。

- 6) 「Next」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**Emulate Two-Phase Commit**」を選択します。
- 7) 「Next」をクリックし、JEE上のAEM Formsのインストールの準備で作成したデータベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : MySQLを実行しているコンピューターの名前またはIPアドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトの値は3306です。

**Database User Name** : MySQLデータベースに作成したユーザーの名前。

**Password** と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 8) 「Next」をクリックし、「**Test Configuration**」をクリックして設定を確認します。

注: テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 9) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「**Finish**」をクリックします。

## 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP\_DS**」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「**Configuration**」タブ／「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3) 「**Maximum Capacity**」ボックスに30と入力します。
- 4) 「**Statement Cache Size**」ボックスに80と入力します。
- 5) 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6) WebLogic管理対象サーバーを再起動します。

## MySQL用の新しいAEM\_DSデータソースの作成

- 1) WebブラウザーのURL行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Serverドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3) Change Centerで、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 5) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Name**」ボックスに「**AEM\_DS**」と入力します。
  - 「**JNDI name**」ボックスに「**AEM\_DS**」と入力します。

- **Database Type** リストで「MySQL」を選択し、「Next」をクリックします。
  - **Database Driver** リストで、「MySQL's Driver (Type 4) Versions:using com.mysql.jdbc.Driver」を選択します。
- 6) 「Next」をクリックし、「Supports Global Transactions」と「Emulate Two-Phase Commit」を選択します。
- 7) 「Next」をクリックし、JEE 上の AEM Forms のインストールの準備で作成したデータベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : MySQL を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトの値は 3306 です。

**Database User Name** : MySQL データベースに作成したユーザーの名前。

**Password** と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 8) 「Next」をクリックし、「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注: テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 9) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー (ここでは管理対象サーバー) を選択し、「Finish」をクリックします。

## 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で **Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「AEM\_DS」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「Configuration」タブ / 「Connection Pool」タブをクリックします。
- 3) 「Maximum Capacity」ボックスに 30 と入力します。
- 4) 「Statement Cache Size」ボックスに 80 と入力します。
- 5) 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。
- 6) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

## Rights Management に使用する MySQL 用の新しいデータソースの作成

注: この手順は、Rights Management がインストール済みの場合にのみ該当します。

- 1) Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
- 2) 「Domain Structure」で、**Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「New」をクリックします。

- 3) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「Name」ボックスに、RM\_DSと入力します。
  - 「JNDI name」ボックスに EDC\_DSと入力します。
  - Database Typeリストで「MYSQL」を選択し、「Next」をクリックします。
  - Database Driverリストで、「MySQL's Driver (Type 4) Versions:using com.mysql.jdbc.Driver」を選択します。
- 4) 「Next」をクリックし、「Supports Global Transactions」と「One-Phase Commit」を選択します。
- 5) 「Next」をクリックし、JEE上のAEM Formsのインストールの準備で作成したMySQLデータベースに適用される以下のプロパティを定義します。
 

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : MySQLを実行しているコンピューターの名前またはIPアドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトのポートは3306です。

**Database User Name** : MySQLデータベースに作成したユーザーの名前

**Password** と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。
- 6) 「Next」をクリックし、「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。  
注: テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。
- 7) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー(ここでは管理対象サーバー)を選択し、「Finish」をクリックします。

### 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで「RM\_DS」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「Configuration」タブをクリックし、「Connection Pool」タブをクリックし、以下のプロパティを設定します。
  - 「Initial Capacity」ボックスに1と入力します。
  - 「Maximum Capacity」ボックスに20と入力します。
  - 「Capacity Increment」ボックスに5と入力します。
  - 「Statement Cache Size」ボックスに80と入力します。
  - 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。
- 3) WebLogic管理対象サーバーを再起動します。

### 9.6.3. DB2 データベース接続の設定

WebLogic Server および JEE 上の AEM forms デプロイメントで DB2 データベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

#### DB2 用の新しいデータソースの作成

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 5) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - 「**JNDI name**」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - 「**Database Type**」リストで「**DB2**」を選択します。
  - 「**Database Driver**」リストで「**Other**」を選択します。
- 6) 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**Emulate Two-Phase Commit**」を選択します。
- 7) 「**Next**」をクリックし、次の画面で、JEE 上の AEM forms のインストールの準備で作成したデータベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : DB2 を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトのポートは 50000 です。

**Database User Name** : DB2 データベースに作成したユーザーの名前。

**Password** と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 8) 「**Next**」をクリックし、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Driver Class Name**」ボックスに、`com.ibm.db2.jcc.DB2Driver` と入力します。
  - 「**URL**」ボックスに、`jdbc:db2://[host]:[port]/[database_name]` と入力します。
  - 「**Properties**」ボックスに、`user=<userid>`（「**Database User Name**」で指定した `userid`）と入力します。
- 9) 「**Test Configuration**」をクリックして設定を確認します。

注：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「**次へ**」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 10) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。
- 11) 「Finish」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

### 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP\_DS**」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「**Configuration**」タブ／「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3) 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 4) 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 5) 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

### DB2用の新しいAEM\_DS データソースの作成

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[hostname]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 5) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Name**」ボックスに「**AEM\_DS**」と入力します。
  - 「**JNDI name**」ボックスに「**AEM\_DS**」と入力します。
  - **Database Type** リストで「**DB2**」を選択します。
  - **Database Driver** リストで「**Other**」を選択します。
- 6) 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**Emulate Two-Phase Commit**」を選択します。
- 7) 「**Next**」をクリックし、次の画面で、JEE 上の AEM forms のインストールの準備で作成したデータベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : DB2 を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトのポートは 50000 です。

**Database User Name** : DB2 データベースに作成したユーザーの名前。

**Password** と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 8) 「Next」をクリックし、以下のプロパティを設定します。
  - 「Driver Class Name」ボックスに、com.ibm.db2.jcc.DB2Driverと入力します。
  - 「URL」ボックスに、jdbc:db2://[host]:[port]/[database\_name]と入力します。
  - 「Properties」ボックスに、user=<userid>(「Database User Name」で指定したuserid)と入力します。
- 9) 「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注: テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。
- 10) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。
- 11) 「Finish」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

### 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で **Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「AEM\_DS」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「**Configuration**」タブ / 「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3) 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 4) 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 5) 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

### Rights Management に使用する DB2 用の新しいデータソースの作成

注: この手順は、Rights Management がインストール済みの場合にのみ該当します。

- 1) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 2) 「Domain Structure」で、**Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 3) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Name**」ボックスに、RM\_DS と入力します。
  - 「**JNDI name**」ボックスに EDC\_DS と入力します。
  - 「**Database Type**」リストで「**DB2**」を選択します。
  - 「**Database Driver**」リストで「**Other**」を選択します。
- 4) 「Next」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**One-Phase Commit**」を選択します。

- 5) 「Next」をクリックし、JEE 上の AEM Forms のインストールの準備で作成した DB2 データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : DB2 を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトのポートは 50000 です。

**Database User Name** : DB2 データベースに作成したユーザーの名前。

**Password** と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード

- 6) 「Next」をクリックし、以下のプロパティを設定します。

- 「Driver Class Name」ボックスに、com.ibm.db2.jcc.DB2Driver と入力します。
- 「URL」ボックスに、jdbc:db2://[host\_name]:[port]/[database\_name] と入力します。
- 「Properties」ボックスに、user=<userid>（「Database User Name」で指定した userid）と入力します。

注：「Driver Class Name」、「URL」および「Properties」は、インストールした DB2 ドライバーによって異なります。

- 7) 「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 8) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。

- 9) 「Finish」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

## 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで「RM\_DS」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「Configuration」タブ／「Connection Pool」タブをクリックします。
- 3) 「Maximum Capacity」ボックスに 20 と入力します。
- 4) 「Statement Cache Size」ボックスに 80 と入力します。
- 5) 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。
- 6) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

#### 9.6.4. SQL Server データベース接続の設定

WebLogic Server および JEE 上の AEM forms デプロイメントで SQL Server データベースに接続できるようになるには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

##### SQL Server 用の新しいデータソースの作成

- 1) Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
- 2) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「New」をクリックします。
- 3) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「Name」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - 「JNDI name」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
  - **Database Type** リストで「MS SQL Server」を選択します。
  - **Database Driver** リストで、「Microsoft's MS SQL Server Driver (Type 4) Versions:2005」を選択します。
- 4) 「Next」をクリックし、「Supports Global Transactions」と「Emulate Two-Phase Commit」を選択します。
- 5) (統合された認証の場合のみ) アプリケーションサーバーを実行しているコンピューターの Windows システムパスに `sqljdbc_auth.dll` を追加します。`sqljdbc_auth.dll` ファイルは、Microsoft SQL JDBC 4.0 ドライバーのインストール先ディレクトリ（デフォルトでは `<InstallDir>/sqljdbc_3.0/enu/auth/x64`）にあります。
- 6) 「Next」をクリックし、JEE 上の AEM forms のインストールの準備で作成した SQL Server データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : SQL Server を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトのポートは 1433 です。

**Database User Name** : SQL Server データベースに作成したユーザーの名前。

**Password** と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 7) 「Next」をクリックし、「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 8) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。
- 9) 「Finish」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

## 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP\_DS**」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「**Configuration**」タブ／「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3) 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 4) 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 5) 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

## SQL Server 用の新しい AEM\_DS データソースの作成

- 1) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 2) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources**をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 3) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Name**」ボックスに「**AEM\_DS**」と入力します。
  - 「**JNDI name**」ボックスに「**AEM\_DS**」と入力します。
  - **Database Type** リストで「**MS SQL Server**」を選択します。
  - **Database Driver** リストで、「**Microsoft's MS SQL Server Driver (Type 4) Versions:2005**」を選択します。
- 4) 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**Emulate Two-Phase Commit**」を選択します。
- 5) (統合された認証の場合のみ) アプリケーションサーバーを実行しているコンピューターの Windows システムパスに `sqljdbc_auth.dll` を追加します。`sqljdbc_auth.dll` ファイルは、Microsoft SQL JDBC 4.0 ドライバーのインストール先ディレクトリ (デフォルトでは `<InstallDir>/sqljdbc_3.0/enu/auth/x64`) にあります。
- 6) 「**Next**」をクリックし、JEE 上の AEM forms のインストールの準備で作成した SQL Server データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : SQL Server を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトのポートは 1433 です。

**Database User Name** : SQL Server データベースに作成したユーザーの名前。

**Password** と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 7) 「Next」をクリックし、「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「次へ」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 8) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。
- 9) 「Finish」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

### 接続プールの設定

- 1) 「Domain Structure」で **Services**／**JDBC**／**Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「AEM\_DS」をクリックします。
- 2) 次の画面で、「**Configuration**」タブ／「**Connection Pool**」タブをクリックします。
- 3) 「**Maximum Capacity**」ボックスに 30 と入力します。
- 4) 「**Statement Cache Size**」ボックスに 80 と入力します。
- 5) 「**Save**」をクリックし、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 6) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

### WebLogic 10g 上の Rights Management に使用する SQL Server 用の新しいデータソースの作成

注：この手順は、Rights Management がインストール済みの場合にのみ該当します。

- 1) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 2) 「Domain Structure」で、**Services**／**JDBC**／**Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**New**」をクリックします。
- 3) 次の画面で、以下のプロパティを設定します。
  - 「**Name**」ボックスに、RM\_DS と入力します。
  - 「**JNDI name**」ボックスに EDC\_DS と入力します。
  - 「**Database Type**」リストで「**MS SQL Server**」を選択します。
  - 「**Database Driver**」ボックスで、「**Microsoft's MS SQL Server Driver (Type 4) Versions:2005**」を選択します。
- 4) 「**Next**」をクリックし、「**Supports Global Transactions**」と「**One-Phase Commit**」を選択します。

- 5) 「Next」をクリックし、JEE 上の AEM Forms のインストールの準備で作成した SQL Server データベースに適用される以下のプロパティを定義します。

**Database Name** : 作成したデータベースの名前。

**Host Name** : SQL Server を実行しているコンピューターの名前または IP アドレス。

**Port** : データベースのポート。デフォルトのポートは 1433 です。

**Database User Name** : SQL Server データベースに作成したユーザーの名前。

**Password** と **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられたパスワード。

- 6) 「Next」をクリックし、統合セキュリティを使用する場合は「Properties」ボックスに `integratedSecurity=true` と入力します。

注：この値を `true` に設定した場合は、統合セキュリティを使用するように SQL Server を設定する必要があります（「JEE 上の AEM Forms のインストールの準備（シングルサーバー）」を参照）。

- 7) 「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注：テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「Next」をクリックします。正常に終了しなかった場合は、表示されるエラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

- 8) 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「Finish」をクリックします。

## 接続プールの設定

- 1) Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
- 2) 「Domain Structure」で、**Services** / **JDBC** / **Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「RM\_DS」をクリックします。
- 3) 次の画面で、「Configuration」をクリックし、「Connection Pool」タブをクリックし、以下のプロパティを設定します。
  - 「Initial Capacity」ボックスに 1 と入力します。
  - 「Maximum Capacity」ボックスに 20 と入力します。
  - 「Capacity Increment」ボックスに 5 と入力します。
  - 「Statement Cache Size」ボックスに 80 と入力します。
- 4) 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。
- 5) WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

## Windows ログインの JEE 上の AEM Forms データベースユーザーへのマップ

注：ユーザー アカウントを作成し、Windows ドメインに関連付けておく必要があります。

- 1) Microsoft SQL Server Management Studio を使用して、JEE 上の AEM Forms データベースをホストするデータベースサーバーに接続します。
- 2) 認証モードを「**Windows 認証**」に設定します。
- 3) セキュリティ／ログインで Windows ドメインユーザーに対して新しいアカウントを作成し、「**Windows 認証**」を選択します。
- 4) ログイン - 新規作成画面で「**ユーザーマッピング**」をクリックして、新しいユーザーのデータベースおよびデフォルトスキーマを設定します。
- 5) データベースロールとして「**db\_owner**」を選択し、「**OK**」をクリックします。

ユーザーが作成できたかを確認するには、ナビゲーションツリーで JEE 上の AEM Forms データベースを展開して、セキュリティ／ユーザーをクリックします。新しいユーザーが表示されます。

## Windows 上での統合セキュリティの設定

- 1) Web ブラウザーの URL 行に `http://[host]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。

注：Windows ドメインユーザーを使用して、アプリケーションサーバーを起動します。WebLogic Server をサービスとして実行している場合は、Windows ドメインユーザー アカウントを使用して起動する必要があります。

- 2) WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「**Log In**」をクリックします。
- 3) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで、「**IDP\_DS**」をクリックします。
- 5) 次の画面で、「**Configuration**」タブ／「**Connection Pool**」タブをクリックし、「**Properties**」ボックスに `integratedSecurity=true` と入力します。

注：この値を `true` に設定した場合は、統合セキュリティを使用するように SQL Server を設定する必要があります（「[AEM Forms のインストールの準備（シングルサーバー）](#)」を参照）。

- 6) 「Domain Structure」で、**Services / JDBC / Data Sources** をクリックし、右側のウィンドウで「**RM\_DS**」をクリックします。
- 7) 次の画面で、「**Configuration**」タブ／「**Connection Pool**」タブをクリックし、「**Properties**」ボックスに `integratedSecurity=true` と入力します。
- 8) アプリケーションサーバーがインストールされているコンピューターの Windows システムパス (C:\Windows) に `sqljdbc_auth.dll` を追加します。

注：`sqljdbc_auth.dll` ファイルは、Microsoft SQL JDBC 4.0 ドライバーのインストールディレクトリ（デフォルトは `[DriverInstallDir]/sqljdbc_3.0/enu/auth/x64`）と同じ場所にあります。

## 9.7. データソースのセキュリティ保護

WebLogic 上にデプロイされた JEE 上の AEM Forms を使用している場合、必要に応じて JNDI アーティファクトへのアクセスを保護することができます。限られた一連のユーザーに対して JNDI へのアクセスを制限する手順については、[この TechNote](#) を参照してください。

## 9.8. 次の手順

この後、JEE 上の AEM Forms EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイする必要があります（「WebLogic への手動デプロイ」を参照してください）。

# 10. WebLogicへの手動デプロイ

この章では、JEE 上の AEM Forms を WebLogic に手動でデプロイする方法について説明します。この章の内容は、JEE 上の AEM Forms を WebLogic に自動的にデプロイしない場合にのみ適用されます。アプリケーションサーバーに JEE 上の AEM Forms を自動でデプロイする方法について詳しくは、「JEE 上の AEM Forms の設定およびデプロイ」を参照してください。

インストールプロセスのこの段階では、既に JEE 上の AEM Forms ファイルをインストールし、Configuration Manager を実行してデプロイ可能な JEE 上の AEM Forms アーカイブを設定し、手動で WebLogic を構成しています。ここで、JEE 上の AEM Forms のデプロイ可能なアーカイブを手動でデプロイする必要があります。

## 10.1. JEE 上の AEM Forms モジュールのデプロイについて

JEE 上の AEM Forms をデプロイする前に、次のタスクが完了していることを確認してください。

- 必要なソフトウェアとファイルがインストールしており、作業を行うディレクトリの場所を確認している。
- Configuration Manager を実行し、システムおよびアプリケーションサーバーの要件に従って JEE 上の AEM Forms モジュールを設定およびアセンブリしている。デプロイメントにモジュールを追加するには、Configuration Manager を実行して変更を行い、更新した EAR ファイルを再デプロイします。

JEE 上の AEM Forms を初めてデプロイする場合は、製品をデプロイした後に、Configuration Manager を使用してデータベースを初期化します。

外部 Web サーバーを使用している場合は、Web サーバーのマニュアルを参照して、アプリケーションサーバーへのアクセスに必要な設定について確認してください。

### 10.1.1. デプロイ可能なコンポーネントの概要

デプロイメントプロセス中に、次の EAR ファイルをデプロイします。

- adobe-lifecycle-native-weblogic-[OS].ear
- adobe-lifecycle-weblogic.ear
- adobe-workspace-client.ear

サービス用の 3 つのサンプルアプリケーション (Forms、Output、Mobile Forms、および Assembler のみ) 検証サンプル (IVS) EAR ファイルをインストールします。

注：IVS EAR ファイルは実稼働環境にデプロイしないでください。

Configuration Manager を使用して JEE 上の AEM Forms を設定すると、これらのファイルは [aem-forms]/configurationManager/export ディレクトリに置かれます。

## インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイルの選択

(Forms、Output、Mobile Forms、および Assemblerのみ) Adobe Experience Manager forms インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイル画面では、サービス用の3つのサンプルアプリケーションをインストールできます。これらのサンプルファイルをインストールするには、「IVS EARをデプロイメントセットに含めます」を選択し、「次へ」をクリックします。

EAR ファイルが表示されます (モジュール画面で各モジュールを選択した場合のみ)。

注: IVS EAR ファイルは実稼働環境にデプロイしないでください。

## 10.2. WebLogic Serverへのデプロイ

JEE 上の AEM Forms コンポーネントを WebLogic Server にデプロイするには、WebLogic Server Administration Console を使用して、コンポーネントの EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイします。

WebLogic Server へのデプロイを開始する前に、アプリケーションサーバーを起動します。必須のコンポーネントをデプロイしたら、サービスを起動する前にアプリケーションサーバーを停止して再起動します。

### 10.2.1. EAR ファイルをデプロイするには

- 1) WebLogic Server 管理コンソールにアクセスするには、Web ブラウザーの URL 行に `http://<hostname>:7001/console` と入力します。
- 2) WebLogic Server 設定の作成時に使用したユーザー名とパスワードを入力して、「**Log In**」をクリックします。
- 3) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 4) 「Domain Structure」で、「Deployments」をクリックし、右側のウィンドウで「Install」をクリックします。
- 5) Install Application Assistant ウィンドウで、インストールする EAR ファイルの場所に移動します。
- 6) EAR ファイルを選択し、「**Next**」をクリックします。
- 7) 「Install this deployment as an application」を選択し、「**Next**」をクリックします。
- 8) 「作成された管理サーバー」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 9) デプロイ対象についてクラスターを選択し、「**All servers in the cluster**」を選択します。
- 10) 「**Next**」をクリックして、デフォルトの設定を受け入れて、「**Finish**」をクリックします。
- 11) Change Center で、「**Activate Changes**」をクリックします。
- 12) 右側のウィンドウで、今インストールしたアプリケーションのチェックボックスを選択します。
- 13) 「**Start**」をクリックし、メニューから「**Servicing all requests**」を選択します。
- 14) 右側のウィンドウで「**Yes**」をクリックし、Change Center で「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 15) デプロイ可能なコンポーネントの概要にリストされた各EARファイルについて、手順5~12を繰り返します。
- 16) デプロイが完了したら、WebLogic を再起動します「**WebLogic Server の再起動**」を参照してください。

## 10.3. WebLogic Serverの再起動

すべての設定変更を完了した後、その変更を有効にするには WebLogic を再起動します。再起動する必要があるのは、WebLogic 管理対象サーバーと WebLogic Administration Server です。Node Manager は再起動の必要はありません。

### 10.3.1. WebLogic 管理対象サーバーの停止

管理対象サーバーが停止したことを見認するには、「Control」タブの一番下のテーブルを参照します。このテーブルには、すべてのサーバーのリストが表示され、それぞれの現在の状態が示されます。

- 1) WebLogic Server 管理コンソールの「Domain Structure」で、ドメイン名をクリックします。
- 2) 「Control」タブをクリックし、停止するサーバーの横にあるチェックボックスを選択します。
- 3) 「Shutdown」をクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。

**When work completes**：選択されたサーバーが正常に停止され、管理対象サーバーは処理中のすべての要求を完了するようサブシステムに通知します。正常に停止する処理では、現在処理中の特定のアプリケーションを完了するための時間が WebLogic Server のサブシステムに与えられます。

**Force Shutdown Now**：強制的な停止が開始され、管理対象サーバーは処理中の要求を直ちに破棄するようサブシステムに指示します。

- 4) WebLogic Server 管理コンソールのプロンプトで、「Yes」をクリックしてコマンドの実行を確認します。

### 10.3.2. WebLogic 管理サーバーの停止

- 1) コマンドプロンプトで、[appserverdomain]\bin に移動します。
- 2) 次のコマンドを入力します。
  - (Windows) stopWebLogic.cmd
  - (Linux、UNIX) /stopWebLogic.sh
- 3) WebLogic のユーザー名とパスワードを入力します（WebLogic のインストール時にセキュリティを有効にした場合）。

### 10.3.3. WebLogic 管理サーバーの起動

- 1) コマンドプロンプトで、[appserverdomain]\bin に移動します。
- 2) 次のコマンドを入力します。
  - (Windows) startWebLogic.cmd
  - (Linux、UNIX) /startWebLogic.sh
- 3) WebLogic のユーザー名とパスワードを入力します（WebLogic のインストール時にセキュリティを有効にした場合）。

### 10.3.4. WebLogic 管理対象サーバーの起動

- 1) `http://localhost:7001/console` に移動して、WebLogic Server の設定時に使用したユーザー名とパスワードを入力してログインします。
- 2) Change Center で、「**Lock & Edit**」をクリックします。
- 3) 「Domain Structure」で、**Environment / Servers** をクリックし、右側のウィンドウで管理対象サーバーをクリックします。
- 4) 次の画面で、「**Control**」タブをクリックし、起動する管理対象サーバーの横にあるチェックボックスを選択します。
- 5) 「**Start**」をクリックして、「**Yes**」をクリックします。

## 10.4. 次の手順

Configuration Manager を実行して、データベースの初期化と、コンポーネントおよび JEE 上の AEM Forms アーカイブファイルのデプロイを行う必要があります。必要に応じて、コンポーネントおよびアーカイブファイルのデプロイメントを検証することもできます「JEE 上の AEM Forms の設定およびデプロイ」を参照してください。

## 10.5. AEM Forms のデプロイメントを設定するための Configuration Manager の起動

さらに、次の作業を行う必要があります。

- AEM Forms データベースを初期化します
- AEM Forms コンポーネントをデプロイします
- AEM Forms コンポーネントのデプロイメントを検証します
- AEM Forms コンポーネントを設定します

AEM Forms のデプロイを設定するために Configuration Manager を起動します。詳しくは、「AEM Forms をデプロイするための設定」の章を参照してください。

# 11. 付録 - SharePoint サーバーでの Connector for Microsoft SharePoint の設定

Connector for Microsoft SharePoint を使用すると、JEE 上の AEM Forms と SharePoint の両方の開発の観点で、ワークフローを統合できます。このモジュールには、JEE 上の AEM Forms サービスと、この 2 つのシステム間のエンドツーエンドの接続を容易にするサンプルの SharePoint の機能が含まれています。

このサービスによって、SharePoint リポジトリでの検索、読み取り、書き込み、削除、更新およびチェックイン／チェックアウトが可能になります。SharePoint のユーザーは、SharePoint 内からの承認プロセスなどの JEE 上の AEM Forms プロセスの開始、ドキュメントの Adobe PDF への変換、PDF 形式やネイティブ形式のファイルの権限の管理が可能です。さらに、SharePoint コンテキスト内から、JEE 上の AEM Forms プロセスの SharePoint ワークフロー内からの実行を自動化できます。

## 11.1. インストールと設定

JEE 上の AEM Forms のインストールを設定した後に、次の手順を実行して SharePoint サーバーでコネクタを設定します。

### 11.1.1. SharePoint サーバーの必要システム構成

SharePoint サイトを実行するサーバーが次の要件を満たしていることを確認してください。

- Microsoft SharePoint Server 2007、2010 または 2013
- Microsoft .NET Framework 3.5

### 11.1.2. インストールに関する考慮事項

インストールの計画にあたって、次の点に注意してください。

- Microsoft SharePoint Server 2007 を使用している場合、SharePoint サーバーに Connector for Microsoft SharePoint をインストールすると、インストールプロセスによって Windows IIS Server が停止し、再起動します。
- インストールを実行する前に、他のサイトや Web アプリケーションが IIS Server 上のサービスを使用していないことを確認します。インストールを行う前に、IIS の管理者に問い合わせてください。
- (SharePoint サーバー 2010 のファームインストールの場合) SharePoint 管理サービスは、SharePoint サーバーファームの一元管理サーバーで実行されています。(SharePoint サーバー 2010 スタンドアロンインストールの場合) SharePoint 管理サービスは、SharePoint サーバーで停止します。

## 11.2. SharePoint サーバー 2007 でのインストールと設定

### 11.2.1. Web パーツのインストーラーの抽出

JEE 上の AEM Forms サーバーをインストールしたときに、SharePoint サーバーの Web パーツのインストーラー (Adobe Connector-2007.zip) が [aem-forms root]\plugins\sharepoint フォルダー内に作成されています。SharePoint をホストしている Windows サーバー上のフォルダーにこのファイルをコピーしてから、抽出します。

### 11.2.2. バッチファイルの編集

Web パーツのインストーラーから抽出されたフォルダー内に、バッチファイル (Install.bat) があります。使用している SharePoint サーバーに関するファイルおよびフォルダーのパスを使用して、このバッチファイルを更新する必要があります。

- 1) Install.bat ファイルをテキストエディターで開きます。
- 2) ファイル内で次の行を探して編集します。

```
@SET GACUTILEXE="C:\Program Files\Microsoft SDKs\Windows\v6.0A\Bin\ gacutil.exe"
@SET TEMPLATEDIR="c:\Program Files\Common Files\Microsoft Shared\ web server
extensions\12\TEMPLATE"
@SET WEBAPPDIR="C:\Inetpub\wwwroot\wss\VirtualDirectories\<port>"
@SET SITEURL="http://<SharePoint Server>:<port>/SiteDirectory/<site name>/"
@SET STSADM="C:\Program Files\Common Files\Microsoft Shared\ web server extensions\
12\bin\stsadm.exe"
```

- GACUTILEXE : GAC ユーティリティがあるフォルダーへのパスを変更します。
- TEMPLATEDIR : システム上の IIS Server のテンプレートのディレクトリパスを変更します。
- WEBAPPDIR : システム上の IIS Server の WEBAPPDIR のパスがバッチファイル内のデフォルト値と異なる場合に変更します。
- SITEURL : JEE 上の AEM Forms の機能をアクティブにする、システム上の SharePoint サイトの URL を変更します。
- STSADM : STSADM ユーティリティがあるフォルダーへのパスを変更します。

注 : JEE 上の AEM Forms の機能は、SharePoint サーバーの Web アプリケーションにインストールされます。JEE 上の AEM Forms の機能は、URL を指定したサイトでのみアクティブになります。他の SharePoint サイトについては、各サイトのサイトの設定ページで後から JEE 上の AEM Forms の機能をアクティブにすることができます。詳しくは、SharePoint のヘルプを参照してください。

- 3) ファイルを保存して閉じます。

### 11.2.3. バッチファイルの実行

編集されたバッチファイルがあるフォルダーに移動してから、Install.bat ファイルを実行します。

バッチファイルが実行されている間は SharePoint サイトで他のサービスを使用できることに注意してください。

バッチファイルを実行すると、次の処理が行われます。

- AdobeLiveCycleConnector.dll および AdobeLiveCycleWorkflow.dll のファイルが登録されます。これらのダイナミックライブラリは、JEE 上の AEM Forms の機能と SharePoint サーバーを統合します。
- 以前にインストールされていた SharePoint コネクタがアンインストールされます。
- テンプレートファイルが WSS \TEMPLATE ディレクトリにコピーされます。
- リソースファイルが WEBAPPDIR\App\_GlobalResources ディレクトリにコピーされます。
- JEE 上の AEM Forms の機能を Web サーバー拡張機能とあわせてインストールして有効化します。
- インストーラーが閉じて、プロンプトに戻ります。

### 11.2.4. サービスモデル設定の IIS Web アプリケーションのフォルダーへのコピー

SharePoint Connector 固有の設定を、IIS Server の Web アプリケーションのホームディレクトリにコピーする必要があります。これにより、JEE 上の AEM Forms の機能が Web アプリケーションに追加されます。

- 1) JEE 上の AEM Forms の機能のインストーラーを抽出したときに作成された sharepoint-webpart フォルダーに移動します。
- 2) AdobeLiveCycleConnector.dll.config ファイルをテキストエディターで開きます。
- 3) <system.serviceModel> タグと </system.serviceModel> タグの間の内容（開始タグと終了タグを含む）をコピーしてから、ファイルを閉じます。
- 4) バッチファイルで指定したコンピューター上の IIS サービスの Web アプリケーションのホームディレクトリに移動します。そのフォルダーは、通常は C:\Inetpub\wwwroot\wss\VirtualDirectories\<port> です。
- 5) web.config ファイルのバックアップを作成してから、元のファイルをテキストエディターで開きます。
- 6) コピーした内容を </configuration> タグの前に追加します。
- 7) ファイルを保存して閉じます。

## 11.3. SharePoint Server 2010 および SharePoint server 2013 でのインストールと設定

### 11.3.1. 環境変数の編集

stsadm.exe のパスを PATH 環境変数に追加します。stsadm.exe のデフォルトのパスは C:\Program Files\Common Files\Microsoft Shared\Web Server Extensions\14\BIN です。

### 11.3.2. Web パーツのインストーラーの抽出

JEE 上の AEM Forms サーバーをインストールしたときに、SharePoint サーバーファイルの Web パーツのインストーラー (Adobe Connector-2010.zip と Adobe Connector-2013.zip) が [aem-forms root]\plugins\sharepoint フォルダー内に作成されます。

- Microsoft SharePoint 2010 を使用している場合は、SharePoint をホストする Windows server 上のフォルダに Adobe Connector-2010.zip ファイルをコピーし、コピーしたファイルを解凍します。
- Microsoft SharePoint 2013 を使用している場合は、SharePoint をホストする Windows server 上のフォルダに Adobe Connector-2013.zip ファイルをコピーし、コピーしたファイルを解凍します。

### 11.3.3. Connector のインストールとアクティベート

- (オプション) コネクタをインストールする前に SharePoint Server のコンテキストメニューのオプションを選択します。詳細な手順については、[機能の有効化または無効化](#)を参照してください。
- 次のコマンドをリストの順序どおりに実行して、Connector for SharePoint Server をインストールします。変更がすべてのサーバーに適用されたことを確認するために、各コマンドの後に stsadm - o enumsolutions を実行します。

resultant xml に <state>pending</state> タグが追加されるまで、stsadm - o enumsolutions を繰り返し実行します。

```
install.bat -create
install.bat -add
install.bat -deploy
install.bat -install
```

注：install.bat の -deploy コマンドの場合は、resultant xml に <LastOperationResult>DeploymentSucceeded </LastOperationResult> タグが追加されるまで、stsadm - o enumsolutions を繰り返し実行します。

- SharePoint Web アプリケーションからコネクタをアクティベートします。コネクタをアクティベートするには、次の手順を実行します。
  - ブラウザーで SharePoint Web アプリケーションを開きます。
  - 「サイトの設定」をクリックします。
  - 「Site Collection Features」をクリックします。
  - Adobe Connector 機能および Workflow 機能について「アクティベート」をクリックします。

### 11.3.4. 機能の有効化または無効化

コンテキストメニューのオプションを変更し、SharePoint サイトの他の機能を無効にすることができます。一連のオプションをデフォルトのまま SharePoint Connector をインストールした場合、SharePoint Server で次のオプションを有効にします。

- Adobe PDF に変換
- Acrobat Reader による注釈機能を有効化
- Adobe ポリシーで保護
- JEE 上の AEM Forms の処理の起動

Elements.xml ファイルを変更してこれらのオプションを変更したり、別の機能の有効／無効を切り替えたりすることができます。Elements.xml を変更するには、次の手順を実行します。

- 1) Adobe Connector-2010.zip ファイルまたは Adobe Connector-2013.zip ファイルを展開した内容が含まれるフォルダーに移動します。
- 2) Elements.xml ファイルのバックアップを作成します。Elements.xml のデフォルトの場所は <展開した Adobe Connector-2010/2013.zip ファイルが含まれるディレクトリ> \TEMPLATE\FEATURES\LiveCycle\Elements.xml です。
- 3) Elements.xml ファイルをテキストエディターで開きます。
- 4) 無効にする機能の CustomAction 要素を削除するかコメントにします。

Document Server の機能	CustomAction 要素の ID	説明
ReaderExtensions	LiveCycle.ApplyReaderExtensions	PDF ドキュメントの Acrobat Reader DC extensions を有効にします。
権限管理	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToPdf	PDF ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDoc	Microsoft Word ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToXls	Microsoft Excel ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToPpt	Microsoft PowerPoint ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDocx	Microsoft Word ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToXlsx	Microsoft Excel ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToPptx	Microsoft PowerPoint ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDwg	Microsoft Excel ドキュメントの権限保護を実行します

	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDxf	AutoCAD ドキュメントの権限保護を実行します
	LiveCycle.RightsManagement.ApplyPolicyToDwf	AutoCAD ドキュメントの権限保護を実行します
PDF Generator	LiveCycle.GeneratePDFFromPdf	サイトの設定でファイルの種類として標準の OCR が使用された場合に、画像から作成された PDF をテキストベースの PDF に変換します
	LiveCycle.GeneratePDFFromDoc	Microsoft Word ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPs	PostScript ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromEps	EPS ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPrn	PRN ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromDocx	Microsoft Word 2007 ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPpt	Microsoft PowerPoint ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPptx	Microsoft PowerPoint ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromXls	Microsoft Excel ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromXlsx	Microsoft Excel ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromBmp	BMP ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromGif	GIF ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpeg	JPEG 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpg	JPG 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromTiff	TIFF 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromTif	TIF 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPng	PNG 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpf	JPF 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpx	JPX 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJp2	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJ2k	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJ2c	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromJpc	JPEG 2000 画像から PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromHtm	HTM ドキュメントから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromHtml	HTML ドキュメントから PDF を生成します

	(非推奨) LiveCycle.GeneratePDFFromSwf	(非推奨) SWF ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromFlv	Flash ビデオファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromTxt	テキストファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromRtf	リッチテキスト形式のファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromMpp	Microsoft Project ファイルから PDF を生成します
	LiveCycle.GeneratePDFFromPub	Microsoft Publisher ドキュメントから PDF を生成します
LiveCycle プロセスを起動	LiveCycle.InvokeGenericLiveCycleProcessOnAll	LiveCycle プロセスを起動します
Adobe Forms ライブラリ	AdobeFormsLibrary	フォームデータのリポジトリとして SharePoint を設定します。CustomAction、ListTemplate および ListInstance の各要素を削除します。
AEM Forms ユーザータスク	LiveCycleUserTasks	ユーザータスクのリストを表示します。ListTemplate 要素を削除します。
LiveCycle グループタスク	LiveCycleGroupTasks	グループタスクのリストを表示します。ListTemplate 要素を削除します。

- 5) Elements.xml を保存して閉じます。

### 11.3.5. Microsoft SharePoint Server 2010 のコネクタおよび Microsoft SharePoint Server 2013 のアンインストール

- 1) SharePoint Web アプリケーションから SharePoint Connector のアクティベートを解除します。SharePoint Connector のアクティベートを解除するには
  - a) ブラウザーで SharePoint Web アプリケーションを開きます。
  - b) 「サイトの設定」をクリックします。
  - c) 「Site Collection Features」をクリックします。
  - d) **Adobe Connector** 機能および **Adobe LiveCycle Workflow** 機能について「アクティベートの解除」をクリックします。
- 2) コマンドプロンプトで、次のコマンドを順番どおりに実行します。変更がすべてのサーバーに適用されたことを確認するために、各コマンドの後に `stsadm -o enumolutions` を実行します。resultant xml に `<state>pending</state>` タグが追加されるまで、`stsadm -o enumolutions` を繰り返し実行します。

```
Install.bat -uninstall
Install.bat -retract
Install.bat -delete
```

注: Install.bat の -retract コマンドの場合は、resultant xml に `<LastOperationResult>RetractionSucceeded</LastOperationResult>` タグが追加されるまで、`stsadm -o enumolutions` を繰り返し実行します。